

拍手の方法も種種複雑となるに連れ、八遍拍つより彌開く即ち産靈の働きを行ふといふ義に掛けて、八開手と申し、是を一段とし都合四段行ふこと、即ち三十二遍拍つを極度とし、又四遍拍つたり、或は二遍打つたり致す。(今日は通常二遍打つ事と定まつて居る)。拍ち方にも色色あるか短拍手と申すは、低き音のする様に、靜肅に手を拍つことである。短とは低の意である。事は、大神宮儀式解十一に見えて居る。さて後には支那などの和かき風のみ入り來り、一般に所謂ハイカラ式になり、江家次第抄五、二月にも「上卿拍手作法不令有聲、手のさきをあはせて、やをらやをらと打合なり」などがある。是は主に祈年祭の場合のみかも知れませんが、人人が漢様に上品になつたことが分かる。そこで本居先生は、其の著古事記傳四十二に「江家次第抄に略手の先きを和ら、和ら打合すなりとあるは、いと後世のさまにて甚く本意を失へることなり、其の聲高く大に拍をば、貌よからぬ態として、ただ容貌をつくろへるものなり、いかにも聲高く大に拍こそ本意にはありけれ」と一喝して居られる。誠に先生の仰せの通りに感ずる。

天皇を拜禮するに當り古風とするを

尙ほ拍手と申すことは、一、其の神事として行はるると、二、天皇を拜禮するときに、行ふと、三、其の他の人事として行ふときとを問はず、常に歡喜を以て充滿して居る。其の他、拜禮の場合の外にも群臣に酒を給はるとき手を拍つて之を飲むとか、手を打つて捧物を受けたとか、又今日ならば一同萬歳を唱ふべき所に、拍手したることなどが見えて居る。中には儀式としての拍手もあり、一時の歡樂の情より出でたものもあるが、うれしき時に手を打つは、今日とても亦人情の自然がさうなつて居る。されは、古今神學類編四十九祭祀の箇所にも「唯是事の親切感慨に逼る、則拍手事、少稚愚夫痴嫗と云へども亦有之、豈彼等に於て其禮を知らんや、其至誠不覺、至于此、是ぞ拍手の本致なるべき」と記してある。(尤も學友山本信哉氏は、人の死せるに際し手を打つて泣きたる條を唯一つ大鏡中に發見せる旨を語られた。人情として情の激し我を忘れたるときは、さることなしと限られず、況して藤原氏、專横時代の漢風襲來し、懦弱の心は彌蔓し、古來の勇まじき拍手は、頽れて印度式に合掌して死者を拜むやうに遷り變りたるときには、あり得べきこと

て居る證據である。眞黒であつたら見えはせぬ。嘗に有形的の顔のみならず、無形的に銘銘の愉快の心持が滿ち溢れて顔に顯れて居り、自分の愉快の心持も同様に己の顔を通して輝いて居る。つまり天つ晴れの太陽の光りが我、我の心の内外に輝くによつて、それを我、我が反射する譯である。

明治天皇の御製に「あさみどりすみわたる大空のひろきを己がこころともがな」と仰せられ、又「さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり」と仰せられたるは、誠に古神道の「天つ晴れ」「あな面白」の感じを歌ひ給はれたのであります。遠き神代ながらの心持が、明治天皇の大御心により彌尊く表現せられつつある次第と存ぜられます。

「あな手伸し」

さうすると我我は「あな手伸し」といふことになり、手や足が伸び伸びして何か爲すには居られなくなる。手伸しといふは、ただ手が長く伸びるといふ意味ではない、俗に謂ふ手の長い人などといふのは悪い意味を有つて居ります。『あな手伸し』といふのは、手が伸び伸びし、勇氣が充滿して居るといふ意味で

ある。支那の文字では「たのし」といふ場合に「樂」の字を用ひ、此の字は樂樂として居るとか、享樂主義とかいふ様な所に用ひまして、どうかすると蒞蒞の幽霊の様なものになる意味を有つて居るが、我が大和民族が昔から有つて居る『たのし』といふ心持は、手や足が伸び伸びとして何か爲すには居られぬといふ心持を謂ふのである。

明治天皇御製に「いかならむことにあいても撓ゆまぬは、わがしき島の大和魂」と仰せられしも、『天つ晴れ』『あな面白』の心持により『あな手伸し』と感じつつあるが故に、萬難を歓迎し之を征服するを喜び、雄心勃勃禁ずることが出来ぬのであります。

そこで『あな明け』であつて、うるんな事は決して爲ない。手や足が伸び伸びして何か爲すには居られぬが、併し其の爲る仕事は公明正大のものであり、又四方を眺めても一點も曖昧の所や暗つぼい所などは無いのである。

明治天皇の御製「國といふ國のかがみとなるばかりみがけますらを大和魂」と仰せられし通り、萬國を率ゐて其の模範となつて

八百萬神が異口同音、
てない、全
く一口同音
に歌はれた
ものである。
日蓮聖人の
『天晴地明』
とは古語拾
遺より漢語
したるもの
なり、さす
が聖人は日
本佛敎家な
り。

根本佛敎の
厭世的色彩

三界無安、
猶如火宅、
苦充滿甚可
怖畏、法華
經譬喻品。

行けるのである。「あな明け」の心持がなければ一郷一家内に於てすら永
遠の二本とはなれぬ。否、自分一己をも満足せしむることが出来ず、やがて
煩悶を起さしむるのであります。思案して居るより、天皇の大御心の通
り、さつさと益大和魂を磨いてゆかうではないか。

此の「天つ晴れ」「あな面白」「あな手伸し」「あな明け」といふことは、天照
大御神が天の石屋戸よりお出遊ばされた時に、八百萬神が皆一つの心になつ
てお歌ひなされたお言葉であります。是は古語拾遺に載つて居るのでありま
して、神代の昔から今日迄、是が我我の心の土臺になつて居るのである。故に我
我は毎朝起きて顔を洗ひ水を浴びて神を拜するが、其の時に有つて居る心持は
斯ういふ心持である。

四諦 佛敎の如きは特に其の哲理に於て宏大なものであり、宗教として
も誠に結構のもので、特に其の極致たる大乘佛敎は、皇國の古神道により
美化せられ、皇國を中心として榮えつつある。然し宗教は其の経歴とは
離れぬもので、今以て佛敎の興起した始めの厭世的色彩は、此の敎の特質を

定めつつある。根本佛敎に於ては先づ、四諦十二因縁などを立てて、是から
出發して居る。四諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦である、各相待ち一貫して居る
所以を覺るから諦となる。人間は無常のもので、明日の存否は分からない、
存在して居ると思ふ現在とて不快か困苦で充ち満ちて居り、偶良き物を所
有して居ると必ず之を失はざらん、心配する、生命を有する間は少くも之
を保持せんとしてあらゆる心配をなす。之を覺ることが先づ入用じや。
若し覺らぬものがあれば、監獄に入れたり刑罰を加へて、世間の不快なるも
の嫌ふべきものたることを悟らしめねばならぬ。「三界は猶火宅の如きも
の」たる所以に氣のつくことが悟りの第一歩である。之を苦諦といふ。
されば此の苦は何によりて生じて來たかといふと、自身及父祖以來の偶然
なる行動が身に報ふて來たのである。其の理を十二の因縁に分析して述
べて居る。十二因縁の本原は無明と申して「煩惱の迷ひにより邪見妄執
を生じ事物本來の理法を明らかにせざる」より來るのである。そこで物
が欲しくなつたり物争ひなどする。此の筋途を辯ずることが集諦である。

羊車、鹿車、牛車。

又一念不生是を阿羅漢となす。

めぐりめぐりて輪廻を離れぬこと。

世間的の心

されば世の中のつらいことが分かり、之を除かうとするには、此の原因から無くならしてかからねばならぬ。夫には、釋迦牟尼の御說法並に御手本通りに道を行ふことが必要である。其の道を明らかにするのが道諦であり、其の道を行ふた結果達し得べき安樂の状態を達観することが滅諦である。滅諦を知り、之を實にすることが佛教の主意で、夫の羅漢とは不生の義で滅度し得て、又此の世間の困痛多き現世に生れて來ぬ様になつた人の義である。修業が足りぬと、又又幾度となく生れ替つて來ては、種種の苦しみを受ける。悪い事などすれば、益長生する様な物に生れて來る。是を輪廻の苦と申す。我我は諦を實行し、『常に生死の境をめぐりめぐつて居る様な状態』から脱却せねばならぬ。

以上は四諦の大略であり、誠に尤のことと思ふ。苦しいの、つらいの、などといふ、汚れた状態や未熟の心持より脱却して、『天つ晴れ』『あな面白』『あな手伸し』『あな明け』といふ表現生活の域に入り得ねばならぬ。然し佛教の出發の仕方や、説明法が實に厭世的消極的であつて、如何にも憐れつばい。

持も第二段に必要に於ては、持てあ

平靜に惡戰みし苦闘を樂

否、心の持ち方が悲しいではないか。是も第二段、第三段以下では必要であらうが、第一段の根本に於ては、眞向より『天つ晴れ』『あな面白』『あな手伸し』『あな明け』を振り翳して、猛進したいものである。

第二節 晝間及夜間の生活

第一 晝間の生活は朝の心持を實現するものである。

此の朝の心持を土臺として終日努力奮闘するのであります。随分惡戰苦闘する場合もあり、或は之つたり轉んだら、又どうかすると敵愾心を起す場合もある。敵愾心として決して悪いものではない。神様が無用の心持を我我に與へて下さつてある筈が無い。其の用ひ方が悪ければ害を爲すが之を善用すれば悪いものではない。例へば戦争が有る場合には、夫相當の敵愾心が必要であり、之を有することは公明正大のものである。(和魂を根據とする荒魂は入用であり、世界を救ふ爲に此の兩方面を具備せねばならぬ。兎に角、色色の心持を其の處を失はずして本末の關係を付けて用ひて行くことが、何より大切であ

食事。
外物を採納
し同化し得
る間生命在
り。

第三篇 第三部 第一段 一日の實修 晝及夜の生活 八七六
つつある所謂灰殻思想である。根柢に於ては敵人として居るが、上つ面の
交際に於ては恩恵を以て彼を寛大に取扱ふことと心得ねばならぬ。従つ
て西洋人でさへあれば、敵人でも何でも 皇國の民よりも厚遇するなどと
申すことは、如何にも西洋心酔であると思ふ。
又時が来れば外物を遠慮無く取り入れて之を排斥せず (豊受大神 保食神
宇迦之魂神、大宜津比賣神等あり) 或は飯も食ひ汁も啜つて之を己に同化して
行く。若し同化しなければ下痢を起こし、内部の大切なる部分までが排泄せら
るる恐れもあるが、斯かる危険を冒すことは元より承知で、外物を採納し、よく之
を同化して行く。是も晝の仕事である。

第二 夜間の生活と材料の準備。

夜になると又暗い處に行く。之と共に總て一日の行動はどんな事をしたか、
すつかり忘れてしまはなければならぬ。夜になつても絶えず悪戦苦闘をして
居るのは變則である。夜になつて寝ると眠之國一切の事は悉く忘れてしまつ
て安らかに眠ることが大切である。さういふ事の出来ない者は病人か神経衰

眠る前に入
浴するの
無用の儀
減失せしむ
る業である。

弱者であつて、それは我々の理想ではない。我々の理想として居る所は、夜寝る
と共に一切が無くなつたやうに忘れられてよく眠つてしまふことである。け
れどもそれが根柢より無くなつたのではなく、又翌日の朝早く起きて同じ事を
彌新たに創設するので、其偉大なる愉快なる心持と共に前日來の色々な事柄の
つまらぬことは消滅し、速須良比賣のさすらひ失ふ業である。其の他にいつて
は其續きが更に新生して来る。前日爲した事は最早一切過去の事となつてど
こにか無くなつてしまふかといふと、決して無くなつてしまはずして、必要に應
じてそれが始終顔を出して来ると申すやうな譯であります。然のみならず、一
日の事業を採つて其の不純を去り、其の精髓を未來に傳ふるの前提となる。止
睡眠が夜である。従ふて夜は反つて隠れたる事業並に計畫の熟するときであ
り、晝間の努力が内部より湧出し、朝の理想を充分に實現し得る爲には必ず此の
夜を経過するを要する次第である。吾人は斯様に朝と晝と夜とに分けて、其の
日其の日の行動をして居るのであります。

是は實は日本人のみならず西洋人でも誰でも皆其の通りであります。猫で

も朝起きると顔を洗ふ。けれども日本人間では、殊にさういふ事が昔からの動かない仕來り即ち風習になつて居りまして、各人は理窟とか利害の關係を棄ててそれを行はなければ氣が濟まぬといふことになつて居る。日本では今日の様な曇つた天氣は例外でありませうけれども、夏は勿論冬と雖も晴れ晴れとした天氣が多く、朝明るくなつてから後夜になる迄は燈火を用ひずして仕事が出来。然るに西洋の主なる部分に於ては、夜の明けやうも遅く、冬の日などは朝漸く八時か九時頃から少し明るくなつて來たかと思ふともう二時半か三時頃になると薄暗くなるといふ様にて今日の如き曇つて居る日は日中と雖も電燈をつけなければ仕事が出来ぬので、會社でも學校でも電燈をつけて居るといつたやうな譯で、殆ど夜も晝も區別が無いやうな有様である。所が皇國に於きまゝにしては、春夏秋冬何れも朝になると天つ晴れとなり、それよりずつと明るさが續き、朝の光りを逃さないやうにして其の光りを一日の中に實現し、之を實現した後は、又夜となつて靜かに休むこととなる。箇様にして毎日繰返して行くのである。

近頃の所謂
灰殺者の朝
寢坊参照

そこで今お話しした所の一日の行事は日本に於て著しい事でありまして、我々は朝起きてから終日努力奮闘し、夜になると休むことになつて居り、又一般に朝は日の出る頃には皆起きることになつて居りますが、西洋邊りでは夜と晝とを取違へて居る者なども随分あります。

第二段 一年の實修

第一節 大晦日と正月

斯の如き一日の行事といふものは實に一年に於てもそつくり其の儘現れて居ります。

年『とし』とは疾也、はやき意なり、光陰は矢の如く、年月は早く過ぐるものなる故に『とし』といふとの説もある(日本釋名)。倭訓栞等にも同説を掲げてあるが、採ることは出来ぬ様に思はれる。疾きものは年のみにはあらで一ヶ月、一ヶ月、一生一代皆然りである。殊に光陰矢の如しとか、年往迅勁矢とか申すのは支那人の申し分で、往々歎息の感じがこもつて居り、古神

古神道の心
持ては年よ
りも人の道
進め活働の
方が疾い。

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

大晦日と正月

大晦日

八八〇

道の永遠に合して「天つ晴れ あな面白 あな手伸し あな明け」と感
じつつ勇往邁進するのとは歩調の合はぬ所がある。そこで本居先生は其
の著古事記傳九に曰く「年は田寄なり、多余を切て登となる、さて余世を余
佐志とも余志とも云る例古に多し、然云故はまづ登志とは穀のことなる、其は神の御靈以て田に成して、天皇に
寄奉賜ふゆゑに云り、田より寄すと云こころに祈年祭祀詞に 皇神等能依左
志奉牽奥津御年乎云云八東穂能伊加志穂爾皇神等能依左志奉者云云とあるを以て知べし、天下に成とし成る穀は悉く云り、天皇さて穀を一度取收るを一
年とは云なり、されば登志と云名は穀を本と。先生の此の説こそ確かな
るものと思はれます。

此の「とし」より轉じて「ひととせ」などの如く「とせ」ともいひ、又
「とし」がつまりて「し」となり、再び轉じて「ち」となり、三十年を「みそ
ぢ」四十年を「よそぢ」などといふ趣、新井君美の東雅に見えて居る。

大晦日 先づ大晦日には大祓といふことを致します。是は自分のみならず
他人も共に揃つて、一心同體として、自分自身の爲した過ちより又は他人の爲

大祓(毎日
の朝顔を洗
ひ水浴をな
すこと)に當
る。

古神道の行
他人の行動は
より生じた
罪穢れをた
引き受ける
ことを人生
の本義と認
む。

した不都合より生じた自分並に他人の罪や穢れの一切を除き去る行動であ
ります。然したただ自分だけで罪や穢れを除き去るのでなくして、神人合一の域
に入り神の力に依つて之を除き去ることの式が大祓の式である。真心を以て
此の式を行ふと共に世の中の穢れを大晦日に悉く祓ひ去る譯である。此の外
昔は「鬼逐ひ」と申すことをも致したが、今は無くなり節分の「豆撒き」とし
て民間に傳はつて居る。そこで此の一切の穢れが祓ひ去られ終つた大晦日の
晩は寝る必要はなく、其の清淨の儘直ちに正月に移るのであります。

大祓 大祓は「おほばらひ」とも「おほばらへ」とも訓じ來り、元は
伊邪那岐命が橘小門の阿波岐原に於て祓せられしに起つたのである。此
の禊によりて 天照大御神も生れ給ひ、三つの世間及其の總攬者も確定し、
善惡邪正の分かることとなつた。されば古神道にては、祓を以て「神な
がらの存在」を發揚する第一歩即ち必要なる出發點と見て居る。然して
大祓は祓中の大切なるものである。

此の大祓には常例のもの、と臨時の大祓とがある。一、常例の大祓は六月

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

大晦日と正月

大晦日

八八一

三十日と十二月三十一日とに於て之を行ふので、今日では宮中賢所前庭の神樂舎を祓所となし之を行ふ外、各地方に於ても夫夫神社に於て之を行ふことになつて居り、尙ほ適當の場所を祓所と定め地方一般の祓を爲すべき筈である。二、臨時の大祓は大嘗祭の前後、其他流行病變災等を除く必要ある時特別に之を行ふことになつて居る。是等の大祓は大寶貞觀延喜の頃は盛んであつたが、其の後は漸次に衰へ應仁以後は廢類し、元錄年間に内侍所清祓と申す名稱の下に再興せられしが、明治四年に之を大祓といひ成るべく舊制に復することと致したので、本年大正三年三月には其の際の祝詞等も古式に據りて定められた。

鬼逐ひ 鬼逐ひは又追儼ともいひ、毎年十二月晦日に疫鬼を追ひ拂ふが爲に朝廷に於て行はれし儀式であつた。其の本は漢土に在つたもので、彼の地の文物を採用すると共に公事となつた。方相氏周官が先に立つて振子といへる人人の小供を率ゐ、頭に牛角を有し腰に虎の皮の褌を着け裸形なる鬼を追ひ拂ふた者である。追儼の起りは文武天皇の御宇にありと

豆撒きは支那傳來の風俗なり。

申せども、恒例の儀式となりしは何時よりなるか詳かならず、兎に角永續は致さなかつた。今日は神社の祭中に此の式を存して居るものもあるが、節分の豆撒きと申して『鬼は外、福は内』と呼んで煎りたる豆を打ちつける。然し所謂鬼として口が耳邊まで裂け鋭き牙を有して居る人に似て人に非ざるものは、皇國古來想像されたものではなく、全く印度系の佛教思想が主となり、支那人の想像が附け加はつて出来たものである。皇國にも豫母都醜女及『もの』などの思想は在つたけれども、精神的の意味を主として居つたのである。(總じて古神道にては、八百萬神も在はしませども、之を偶像、其の他の形式にお表はし申すことは致さぬ習はしであつて、其の内特に尊崇すべき神は清素なる神社によりて之に仕へ、斯くして『荒ぶる神』を跋扈せしめぬ様致し來つた次第である)。又福などと申し之を求むることも、幸福主義を重んずる支那思想の影響を受けて居る。皇國固有の心持は福利などを超越し、明かき淨き正しき直き心を發揚し、神ながらの本性を反省することを主と致すものであります。

第一款 民家の正月

正月 歳首を一月といはず正月と呼ぶのは、王者居其正といふ所から來たのであるとは山崎闇齋の説である。正しき直き心を以て年を始むることとは古神道に於ても然かるべきことであるが、正月とは漢語である。(或は「正は長也此年之長月故稱正月」と左傳正義にありといふ)。皇國にては特に「むつき」と申して居ります。「むつき」の意味に就ては種種の説があつて孰れが可なりとも斷定し得られぬが、是等の諸説を見渡しても、一月に有つて居る人の心持が分かる。第一説には「むつき」は睦月即ち「むつびつき」或は「親ましてふ月」である、本來の一心同體を反省し愈これを實現せんとする月であるから、年首の風俗行事は總て仲宜く相揃ふて平等に行ふことになつて居ると申す。第二説には生月即ち「うむつき」で、萬我萬物が其の産靈の働きを行ふべきものたることを自覺し之を實現し始むる月であるといふ。平田先生は「むつき」は萌月即ち「もゆつき」

一心同體を反省する月

産靈の大精神を反省する月

温かき熱誠なる和魂を反省する月

根本に立ち歸る月

なりとせらるるも亦同精神である。此の見方よりすれば二月は「ささらぎ」として陽氣更に満ちて萬物面目を改めんとし、「ささらぎ」は氣更に來るの義なりと説く人もあり、草木張月の約まれるなりとの説もあり、衣更着なりとの説もある、三月は彌生即ち「やよひ」として彌益産靈を實現する頃なるを指すのである。第三説は「むつき」は本月即ち「もつつき」の約まりたるものといひ、又基即ち「もとつき」であるといふ。一年中の基本となる月であるから、此の際に本を捉へ基を立て、是によりて一年中努力せねばならぬと申す。以上の諸説中第一説を採る者が最も多い様であるが、新井白石などは「む」とのみいひて「睦」の義ありとは思はずと申して反對して居る。何れが何れでも、正月に對する皇國人の心持は是等の間にも既に表はれて居ると思ひます。

年始の祝 今日でも一月一日、二日、三日とは「三け日」と申して特に祝ふことになつて居り、一日三日の如きは舉國の大祭日である。其の他古例に倣ひ種種の祝日があります。一月一日は歳の元であり始であり朝であ

寺にても注門
松を立てても
連繩を張るは
おしめ繩は
米の藁にては
左のなひにて
ふ所なひにて
五三所のわら
を下げらる

日の御綱。

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 大晦日と正月 民家の正月 八八八
正月は貴賤を問はず各人の家に於きましても又神社とお寺との別を問はず、注連繩を張り松を立て竹を立てるが先づ注連繩を張るのはどういふ譯かと申すと。一、神代の昔 天照大御神が天の石屋戸から出になつた時に 布刀玉命が注連繩を其の御後方にお引き渡しになつて、是よりは最早後退りして暗い處へお入りになつてはいけませぬと申し上げ、不退轉の意味をお現しになつたのである。そこで我々が注連繩を張るといふことは、矢張り立派な點について決して後退りはせぬ、去年又其の前の年にあつた色の失策などを繰返さず、暗き後ろへ退くことなく、尻餅を搗かずして、益善い方に向ひ、公明正大の方に突進しななければならぬ、といふ意味である。二、斯くして 天照大御神か全く天の石屋戸から出で遊ばして後に、其の周圍に注連繩を張つて、ここには「明かい立派な神様」がおいでになるといふ標識に致したので、依りて又日の御綱と申す。三、随つてそこには暗つぽいものや穢れたものなどは決して其の儘では入らぬ、不淨も入れば淨化されてしまふと申すことになつた次第である。そこで我我も注連繩を張つて、お互に神代の式に倣つて、勇ましく生活を始めやうとす

耶蘇教信者と神棚者

吾人は皆日
子あり光あり
熱かりき清
き本なきなり
の晴しき心なり
伸のしき心なり
然であるは當

るのである。
一體我我は如何なる宗教を信ずる者であらうとも、日本人としては神棚を有つて居る。假令佛教信者であらうとも、耶蘇教信者であらうとも、神棚を有つて居る。否な有つて居らなければならぬ。此の神棚を有すると共に我我の家も亦神社である。正月には特に其の根本を省みるが爲に、注連繩を張つて見ると、愈神社であることが分かり、随つて其の神社の内に生きて居る方方は皆神様である。何の宮とか、何神社とか申す額は懸けてありませぬけれども、銘銘の門に山口太郎とか中村次郎とかいふ表札が掲げてある、それが即ち神社の標札である。古神道に於ては我我の本性は皆神と見て居る。我我には系統の本末、其の他の違ひこそあれ、何れも皆神の御末であり神の子孫である。茄子の枝になつたものは茄子でありませうし、瓜の蔓に出来たものは瓜でありませう。人間の子は人間であり、神の子は神に相違ない。されば我我皆神であるといふのが古神道の信念である。現に日本人たるお互のことをも、お互の子孫をも、神様と同様に「日子」「日女」(彦姫と申して居るではありませぬか。さういふ有難

い事を忘れて居つては申譯が無いから、そこで年の始には何を措いても之を發揚する爲に注連繩を張つて皆其の心持を反省致すのであります。

注連繩 注連繩は亦端出繩尻久米繩七五三繩標繩及飾繩飾葉などと稱へられて居る。端出繩とは米の葉を左繩になひ左を尊むことは本書上卷にいへり其の端を切らず揃へず其の儘出だしをくが故に名づけられたものであり。七五三繩とは其の葉の端を少しづつ間をあけ七つ次に五つ次に三つといふ風に質素に垂れ置くゆゑに然か申す。尻久米繩は葉の先の所を尻といひ之を切らず其の儘ごめて置くゆゑ此の名あり。標繩とは此の如く端をも切り揃へず或は其のまま垂れ、或は込めて置く餘裕の在る素朴の繩こそ、神事には不退轉の明き淨き神の御居所を標し、罪穢も其のままにては、其の標内に入ることなく淨められてしまふから、斯く書かれて居る。通俗にては境界の標として此の繩を張るが、これと神事に用ふる場合とを混ざるのは大なる誤りである。また注連繩を張るは惡しき穢れたるもの侵入を防ぐ爲めであると思ふのは、餘りに支那臭き考へである。

支那古

往住稻穂の付きたる葉を用ひて意裕を示す。

繩の内に入れば清まる、之を神前の清淨地を劃すといふ。

風の入來と共に南洋人の消極的思想の流である。而して「おしめ」は平常も神社には之を引き、又正月には此の荒繩を以て磨き上げた贅澤な家でも何でも飾るから飾繩と申すのである。如何に贅澤な家でも灰殻風の居所でも粗末の家でも正月には同様に「此の體裁を繕はぬ意味深き飾繩」を張る次第であります。此の尊き注連繩も支那に無き爲め、支那心酔時代には朝廷にては頼れお用なされざりしこともあつたらしかつたが、決して其の爲めに隨神の古風が廢せられてしまふことはなかつたのであります。

第三 門に松竹を立てること等。

一 門松。

又正月門に松を立てるのは何の爲であるか、松は一年中青青として居るものであつて之を眞榮木と謂ふ。杉も樟も皆眞榮木である。故に神社には松を植ゑたり杉を植ゑたり又は樟を植ゑたりして居り、それが常に青青として繁茂して行く。我我は又神として益繁榮し益産靈の働きを爲し、創設作用をどこ迄も

古神道は根の在るものなり。古神道は根の在るものなり。古神道は根の在るものなり。

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 大晦日と正月 民家の正月 八九二
行つて往かねばならぬから神社に眞榮木を植ゑるが如く、我々の家を神社としてそこに眞榮木たる松を植ゑるのであります。併し生きて居る松を根抜きにして持つて来て植ゑるのは大仕事でありますから、松の枝を切つて来て門に立てるのであります。

斯やうに松などは『和魂による創設作用』即ち産靈のしるしとして、目出度きものと致して居る。そこで平常でも祝儀として人に物を贈るときには、松の葉を添へたり又は其のかはりに、包紙や封筒に、松葉の形を畫いたり文字にて松の葉などを書いてやる。特に喜ばしきときには赤色の飯を焚き、青き南天の葉を添へて配ばる。されば又人民のことも青人草とか天の益人とかと稱して居る。人民は無數に綠なる草や稻の如く繁茂する然も其の根本は常に同一の大地に在る、同一の神に歸着する。大地より無數の綠草が生じ、枯れて大地に歸するも更に以前に倍して榮え行く。夫と同じく人民は大宇宙の大生命の顯現たる神であつて、愈益産靈の働きを行ひつゝ榮ゆるものである。新年の門松は之を自覺し喜び勇んで之を實現するしるしであります。然るを『門松や冥土の

神代ながらの方式なり

旅の一里塚、目出度もあり目出度もなし』などと申す狂歌もあるが、之は個人的厭世的の外來の思想であつて、古神道の精神ではありませぬ。

新なる御光りの輝きぞめと眞榮木

門松 門松は、年の暮に飾り付けて、元日より七日まで松又は松竹を門前に立て置くものにて、又『松飾』といひ、松飾の在る七日間を『松の内』といふ。此の間注連繩をも張るから、所によりては又『注連の内』とも申します。是等の飾付は十五日まで之を其の儘にして置くこともできる。支那朝鮮などから入り來つたものでなく、神代より皇國に存在し、(天照大御神の御光りの彌や新たに輝かれたのは、八百萬神の立てられたる眞榮木の間を通してである。其の後も神たることを祝する場合には常に眞榮木を立て、神人の交通のしるしとして、榮木より作れる玉串を神に奉る習ひである。)惟神の産靈を行ふべき本性を一心同體として自覺し、他人を出し抜かず、足並揃へて之を發揚する、神代隨らの修養の方式である。然しながら恰かも支那などに公けの習俗として門松を立てることが無かつた爲めに(古今要覽には、西土にても正月元日、松標高戸といふ事は、李唐の代にみ

此時代とて
皇國古
來の習俗を
形式的に確
立せられし
こと多し
此點につ
ては座禮の
繩も似た
法も有る
歴史を有
り
山がつの
立ててけり
千とせむ
かへに待
賢門院堀
河
今朝はみな
しづか門松
たてなべて
いはいやめ
づらなり
(行家)
都鄙一般に
門松を立つ

松を立つ
ことに限ら
ず、榮木な
れば宜し。

えたり紀麗とあれども、之だけで支那に門松の風習の在つたものとは斷定できぬ、よし有つたにしても、其の背後の意味は全く異なるものに相違ない、漢土の風物輸入に汲汲たりし時代には、輸入の中心點となつて居つた上つ方程、彼の風習に倣ひ門松を立つことは、寧ろ眞面目に地方の一般民家に於て維持せられて居たらしい。之が爲め遂に「門松を立つるは公事に非ざりき」などといふことになりました。(之を明治維新後に徴して見ても、上つ方にては西洋風に倣ふて禮服禮式等を定められ 皇國の風習は反つて地方一般の下民により固守せられて居る。)斯かる状態の永續と共に、後世になりては「門松立つることは大古よりありきたれる事なるべし」といふ者があると思へば、「是は末末の賤がいとなみにし習はせる行にてもとよりうるはしき公事にあらず、されば正しき書どもには見えぬなるべし」と言ふ人あり、又「少くも延久承保の頃には下一般に行はれたり」とか申し、遂に「正月の門松は古き世より、其の説様様あれど、いづれもたしかならず」などと斷念せしめ、中には何でも支那さへ持つて來れば宜いと心得

「正月元日松標高戸といふ事は、李唐の代に見えたり」などとやはしむるに至つた。

門松は榮木を立てて、此の家も産靈の神居たることを反省せしめ、其内に住居する各人が神ながらの存在を爲すことを自覺せしむる、神代ながらの式である。従つて榮木でさへあれば何の木でも宜いので、必しも松を立てることに限つては居らぬ。昔は種種の常磐木を立てたものらしく、後代になつても尚ほ或地方に於ては、今日俗間に謂ふ所の榊を門に立てたり、又は檜しきみ草かきを立てる風習が残つて居つた。豊後、東海道の金谷、島田、藤枝、箱根の山家、小田原の里等、茅草又は榊を用ひし旨、支同放言、古今要覽に見ゆ、新編相模國風土記は相模底倉村、大平臺村を擧ぐ。此の榊も之を榊と申し、神事に用ゐる。豊受大神宮にては之を「花さかき」と申すよし、荒木田氏の話として、松廻落葉四藤井に見えて居る。その他、甲子夜話四には「宗氏對鳥のは立松を用ゐる所、榊を用ゐずが家、松浦は椎の枝と竹とを立て、松を用ゐず」とあり。風俗習慣は烟の四方に擴がるが如く、ほど經て中央には影も形もなくなる頃反つてこれを邊鄙の地に見ることを得るものである。(良く引合に出さる

る惟宗孝言の詩に『鑽門賢木換貞松』といふ句あり其の自註に、近來世俗皆以松挿門戸、而余以賢木換之、故云、とあるは、寧ろ古は松と定めず、榮木を立てたことの證據にもなると思ふ。此の様な何うでもよい一人の詩に基きて山間僻陬の人人までが松に更へて賢木を立てるに至つたものではあるまい。兎に角玄同放言瀧澤馬にも、門松の事堀河の御時より連綿として證歌ありといひて、堀河百首の中より『門松をいとなみ立つるその程に春明がたに夜や成ぬらん』といふ藤原顯季の歌や、林葉集より『春にあへるこの門松をわけ來つ、われも千世へんうちに入ぬる』といふ俊惠法師の歌や、拾玉集より『我思ふ君がすみかのおもかげは、松たつ門の春のけしさに』といふ慈鎮和尚へ贈りたる頼朝卿の歌等彼是載せてある。

斯く門松を立てる理由についても、徳川時代に學者が彼是と詮議しましたるが、兎角其の頃の支那風の實證論主義や支那崇拜の考などが付き纏ふて居る。或は正月の神をいはひまつる心だてであらうとか、或は春陽の氣を迎へて門戸を祭る爲であるとか甚しきは、邪鬼を拂ふを目的とするのであ

門松を立てる理由。

らうなどと考へて居る人もある。是等の諸説は、皇國古神道の有り難き所を感じんとはせず、支那崇拜の結果證據を支那に求め、彼の國の思想を以て、我美風を解説せんとする誤りをなすものであります。其の證據には彼等自身も支那の禮記等を引き、月令集説曰、戸者人所出入、司之有神、此神是陽氣在戸之内、春陽氣出、故祭之、とか、荆楚歲時記に、元旦索に松柏をむすび、畫鶏を門戸に付て、疫鬼をさく、などとあるを引きて證據として居る。皇國では各人の居所が即ち神社たる本質を有し、各人は即ち神の御末である、故に門松は其の家の神居たる所以を標示し、其の内に活きて居る産靈の働を表現する、人人に對するものである。門松を立てて祝ふ、人人も門松を立てて祝はるる、神も實は別にして別でなく、誠に不二であります。

尙ほ表門に松飾をする事だけに限らず、戸内の各部分にも松を立てたり注連を飾つたりします。神棚は一家の中心であつて、天照大御神を始め一切の神をお祀り申して在り、此の所を核として一家が神社の性質を有し得るのであるから、神棚にお注連を張り松を立てることは申すにも及ば

戸内の各部に松を立て注連を掛けること。

ぬ。其の他裏口、井戸、竈、湯殿、厩、及各室に至るまで、玉注連輪飾（又は輪じめ）とて注連を輪にしたるものを掛け然のみならず松を飾る。是は徒らに各室の神とか厩の神とかを外部にのみ見申して祀るのではない、吾人が井戸や竈にて仕事をするとともに湯殿に入り又は厩を利用するときも皆神ながらの本性を發揚し、神の表現者に外ならぬ所以を自覺し、到る所毫末も後暗きことをなさず「あな明け」の心持を以て愈、神人合一を實現せんが爲めであります。

神人合一を旨と致すから、神神を徒らに外部にのみ見奉るは誤りであるが、神神は尙ほ各個人の偶然の存在をば超越して外部に存在せらる。是は神棚にお祭り申してある神神の外、特に竈の神及年の神につき著しき所である。各室や厩、湯殿等につきては

竈の神 竈は産靈の大切な場所であるから、火産靈神（即ち火之迦具土神を祀りこれに奥津比古神、奥津比賣神の御二柱を合祀しつ）がある。竈は家の奥の方に在るものにして表に在らざれば、此の「奥」

火産靈神。
奥津比古神。
奥津比賣神。

所謂荒神及
荒神棚。

故に昔は一
火を切り
直して鑽火
を川ぬた。

正月、年の
神を祭る爲
に、特別に
室を設く。

の言葉に助字の「津」を添へて 奥津比古神 奥津比賣神と申すのである。考説。共に 大年神の御子である。古事記には「諸人の以ち拜く竈の神なり」と記してある。所が佛教傳來の後には、是等 三柱の神神を三寶荒神（如來荒神、鹿亂荒神、忿怒荒神、或は食欲神、障碍神及飢）などといふ、わけも分からぬ外來の淫神と習合せしめて「火産靈神は心荒き破壊の神なれば、即ち佛教の荒神と同一なり」と言ひ振らし、遂に竈の神を荒神様と呼ぶことになつた。然し、神代よりの仕來として竈は清くしておかねば、不淨を忌むる 火産靈神等に對して申譯がないとて、特に竈の等は別に於て之を荒神等と呼んで居る。火産靈神などは最も穢れを嫌はるが故に、清き火火なども種々の穢れがあるを現はす竈に居らるのであり、又竈に於て産靈の働きを行ふ淨火を作つて下さるのである。

年の神 年の神とは、年内の農産物の出來る様に盡力せらるる農業の神であつて、年の説明、此神には 大年神、御年神があり、大歳神と申す方もある。大年神は 建速須佐之男神の御子にて、静岡市宮ヶ崎町國幣

名は同じき
全も異なる
陰陽道の塞
明などは迷
信であるは
産靈を阻止
するもの止
ある

小社大歳御祖神社に祀る。御年神は此大年神の御子である(奈良縣山邊郡官幣大社大和神社三座の一として祀る)。此御二柱は農業の神たること疑を容れぬ。大歳神は天菩卑能命(御子)の子建比良鳥命(其の子)津狡命(其子)伊財波止美命(伊勢津彦神)の生まれた神である、同じく御名の如く五穀の神と思はれる。所が支那思想輸入の後、是等の神名と同じき歳神を以て入れ替へんと試みた。此歳神は陰陽家の祭る神で、其の年の塞(大將軍のある方角を塞とす)に、此歳神は陰陽道の司る神にして、此の神の在る方を明(又恵方)と稱し、此の方に従ふて行ふを吉とする。純潔なる古神道の信仰は斯様な支那より渡來せし陰陽道の迷信と混同せらるることとなり、愈産靈の働きを現はし給ふ正しき神の信仰が無意味に活働を阻害する迷信により攪亂せられた。否攪亂せぬ一才曇

死者と榮木 榮木は愈生きて産靈を實現するしとして立てるのである。死者と雖も或る程度に於て、其の分に應じ神として存在するが

竹は萬代を
ちぎる草木
なりといは
れたり。は
正しき直き
竹を立てる

故に墓前其の他に榮木を樹て、其の存在を吾人を通して實現する習ひである。又死者の爲に鳥居をも立て注連繩をも張る(棺の臺まで鳥居では死者を生者と観て扱ふのであつて、其の反對に生者を死者と看做して正月に榮木を立てる次第ではない)。

二 竹のこと。

又竹は之を立てる處も立てぬ處もあり、竹を立てることは後世からであるといふ説もありませけれど、竹も矢張り松の如く一年中青青として居り随分繁殖するもので、且眞直のものである。殊に古神道では明き淨き正き直き心を特に大切に居り、神様にお供物を致すにも質素なる赤きすやきの器、白木の器を用ひます。(竹は神代より注連繩を張るときに立てたものらしい)。そこで元日に暖かき日様が、お出になつて四方が明くなり、大祓の後で清くなつて居る所へ、正しく直き竹を立てて、其の心持を祝ふのであります。さうして此の竹は、高天原に於て、天宇受賣命が八百萬神の中心となり、音頭をとられ、天照大御神を天石屋戸よりお呼び出し申したるときに使用せられたる『天香山の

後世も木遣
りの音頭を
女人がとる

あります。又諸向といひ、風のまにまに彼方此方に向ふ柳の枝の如き趣ある故此の名ありといふ説がある。然うかと思へば、諸向とは夫婦相生の義にとるとも申す。又葉柄は箸となせば諸然し是等の諸説や呼び方は裏白を芽出たき飾に用ふる所から、後に付けたものと思はれる。神代に天宇受賣命が『天の蘿を櫛にかけ、天の眞拆葛を盤として』舞はれた趣の言ひ傳へもあつて裏白は其等に近き所もある、此の點は考ふべき所でありませう。

橙 は其の實が冬になつても落ちぬのみか、七八年も續いて樹に付いて居り、一旦紅黄色になつては更に青がへり、然も其の間に彌大きくなつて參る。されば代代繁榮するしに用ふるが、神代ながらのものではないやうである。

榧 紙に包みて用ふ。喰へば壽命を長くするといふ。此の説も支那臭い。説く者は漢武内傳曰、藥有松柏之膏服之可以延年云云を引て證となす。

第四 正月の食物にも深き意味あり。

日本全國同
一の酒を味

一 お屠蘇。

さて松や竹を立てて彌榮ゆることを祈り、先づ元日の朝は一同揃つて神を拜したる後、屠蘇酒を飲む。此の時は日本全國揃ふて皆一つの酒を飲むのである。平生は酒の好きな人は酒を飲み、麥酒の好きな者は麥酒を飲み、葡萄酒の好きな者は葡萄酒を飲み、或は酒類の嫌ひな人は茶を飲んだり、思ひ思ひのものを飲んで居りますけれども、正月元日には酒の好きな者と嫌ひな者と、男であると女であると、金持であるかと貧乏人であるとを問はず、皆同じく屠蘇酒を飲むのであり、さらばと申して酒好きの者も人を出し、抜いて一人で三升も四升も屠蘇を飲む譯でない。斯く致して同じ御神酒が公平無私に日本人の身體の内を働いて、彼の別なく皆同じに其の血液が循環して彌一心同體となつて居る譯である。そこで屠蘇は女や子供にも飲める様に又飲酒家一人で獨占できぬ様に通例甘きものを選定してある次第であります。

屠蘇 正月の始めに一同揃ふて御神酒を頂戴することは最も古くよりあることなれども、屠蘇と申す名を付けて特殊の藥品を酒に浸して用ふる

は。嵯峨天皇の御宇に始まると申すことである。屠蘇延命散などと申し長命を期するのであるが、それも各自の小生命の長からんことを欲するなどは、支那入來の壽を希ふ思想であつて、皇國神ながらの感じではない。皇國古神道の心持は、同打ち揃ふて御神酒を頂き、『本來の一心同體』を發揚し、神様に歸一するのであるから、命の長久なることは當り前のことである。即ち不滅の大生命に歸一し、其の表現者たることを反省するのである。夫故小生命などには拘泥せず、眞面目の命ずる所に従ひ、所信を斷行して、一個人は仆れても、其の眞面目の所信其の精神は愈益、益花咲き已まぬのである。斯の如く神人合一を期する屠蘇であるから、赤き明かき三かどの袋に入れて用ふることになつて居る。今日は衛生上とか申して白き袋此の屠蘇を加へた神酒を嘗むるは世界の大生命を實現する始めで、一人之を飲めば、一家皆若がへり、一家之を飲めば、一國彌若く、一國擧つて之を飲めば、宇宙の大生命は愈、其の産靈を實現するに至るのであります。嘗に支那思想の影響を受けて言ひ傳へて居るが如く、「一人これ飲めば一家に

明かき心。
みかど(三
角)の袋。
皇國で申す
幸は支那流
の幸福の義
ではない、
「さきはふ」
即ち「咲き
延ぶ」義で
ある。

上卷九四、
二六二頁等
参照。

病なく、一家にこれを用ふれば一里病なし、少年より之を服し然る後老に至る」といふ位のことではありませぬ。そこで此の屠蘇を飲むには、先づ年若の小供より始むる習である。年老いたるは若しき者にあやかり、益若くなる心である。まして小供を大切にし、之を敬ふことが神代からの習ひなれば、小供にも飲み易き甘き酒を與へやり、其の若酒を老者が飲むのである。之は理窟ではない、大和民族の有する心持に外ならぬ。同じ心持で正月元日に始めて汲む水を若水といひ(北山隨筆には、古は立春の日に汲む初の水のことを若水といひたりとあり)。又元日食べる餅を若餅と申す。そこで禁中にも、薬子と名けて、童女に、御生氣の色、衣をさせられて、御前へ召されて、屠蘇の酒を吞せられて、後に供御に參らす趣、或書に見えたり。然るに屠蘇を飲むにつきては何故小供を先きにするかと申すことを、支那の書物に依つて證明せんと、勉めて居つた人が徳川時代の支那崇拜家には多々ある。證據の分からぬことは皆之を支那の書籍に持つて行き、甚しきは本邦の風俗も漢籍に云々と記載せるが故に然るべしなどと論じつつ

ある。そこで屠蘇を飲む順次につきても、過庭紀談原瑜(字、公瑤、號、雙桂)著、二三八―二四二七には『後漢の崔寔が月令に、小歳の拜賀には君親椒酒從小者起とあり。小歳とは臘後一日のこと、元日のことには無けれども、畢竟するに元日の屠蘇と同じことであり、また椒酒從小者起と云ふことが、後漢の世に既にあつたことが分かる、其の後晋の世に至りて、或人董勛に、元日に屠蘇酒を飲むに從小者起の理由を問ひしに、董勛答へて、小者得歳故賀之、老者失歳故罰之と云ひしよし、第一時鏡新書に載つて居る、又唐の世に屠蘇を飲むに、小者より飲み始めて、段段年かさの者が後に飲むことを名けて、婪尾と云ふ、又、尾とも書く、婪尾とは、終を貪るといふ義にて、老者ほど跡にて緩りと酒を餘計に飲ましむべきの意にて、老者の馳走ごころなるよし、莊季裕が鶏肋にも、唐時稱婪尾者以老者後得酒當有餘以優老也と云ふてある第二云云』と申す意味の文句が列ねてある。さうかと思ふと又三養雜記と申す書には『屠蘇攷云、慮柳南小簡に、屠蘇卑幼より始むること不遜なり、元日は一歳の始め長幼の分を正し、長者より始むべしといへるは、理さもあるべきことに聞ゆれど、

考の足らざるに似たり、中禮記に君の薬を飲むには臣先嘗む親の薬を飲むには子先嘗むと云へり、説苑に殷の湯王の言を載せて、薬食は卑に嘗て貴に至るといふ、これにて考ふるに家内の人人悉く屠蘇を飲むに、かりそめにも薬の名あれば、先づ試るむる者は、誰をか先にし誰をか後にせん、故に卑幼をはじめとすること至極のことわりなり、是全く聖人薬を用ゆる禮教をかり用ゆることと知るべしといへるは、確論といふべし第三と書かれてある。

然し是等は皆皇國人の神隨かたはららの心持とは異つて居る。屠蘇といふ名は支那の名を借りて稱ふるものたることを許しても、彼と我とは酒を飲む心持を異にして居る。彼に在つては邪鬼を拂ふ居は邪鬼なるべし等との説がある爲に飲みしもの、我に於ては神人合一を實修する御神酒である。殊に第一説の様に正月には若者が歳を加へたることを勝ち誇り、老人は死に近くなるから罰として後で酒を飲ませられるなどといふ、個人的出し抜き主義は皇國人の有せざる所であり、老幼打揃ふて本來の一心同體を發揚すること、が主意である。又第二説の様に幼者は面倒臭ひ故、早く片を付けさ

子供の誠心
より自ら先
づ薬を試む
ることは別
論なり

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 大晦日と正月 民家の正月 九一二
せて置いて、老耆連が緩緩出し抜いて飲まうなどといふ穢けがない根性は、日本人は有つて居らぬ。而して第三説の如く薬を飲むときは中毒する恐れがあるから、先づ己れより眼下の小供などに毒味させ試してから、老耆が安心して飲まうなどといふ利己主義權勢者の專擅主義などは、皇國の何處を捜して見ても心の底には無いことである。毒になる恐れがあるなら共飲きんまぬが宜い、先づ頑がん是ぜなき無邪氣な小供を騙だまして「モルモット」や蛙かの代りに使用するなどは如何にも親子の一心同體たる所以を自覺せぬ和魂わこんの缺けて居る致し方である。斯かる事を教ふる人を聖人と思ふたら間違まちがであり、斯様のことを元日から致すならば將來の事も思ひ知らるる譯である。要するに是等は皆實證主義個人主義幸福主義專制主義權力主義の外國の思想である。否、外國でも斯様のことを考へて居るのは誤りであるから、皇國を中心として榮へつつある隨神の大道即ち古神道により之を救濟してやらねばならぬ。是こそ、天皇の御光りに浴して獨立獨行する皇國人の天職である。

雜煮。

望月と餅
搗こ。
餅を喰ふ。
餅と山櫻花。

二 餅を食ふ。

それから一同が雜煮ざしゆを食ひますが、雜煮といふのは色色のものを雜まぜこぜにして煮るから雜煮と謂ふので、一寸聞くと結構のものでないやうであるがなかなかさうでない。日本人は何もかも一向排斥せずして包容主義を取つて居りますので、此の精神は元日の雜煮にも現はれて居る。然し唯、ごちやごちやに集めただけではいけません、ぬけれども、之を煮るといふ所に妙味があるので、皆一様に火を入れて同化せしめて後之を喰ふのである。充分緩め擴げておいて之を同化せしめ之をつめることは、恰かも神輿をかつぐときに「わつ」と揚げておいて「しよい」と之を抑へる様なものである。又其の中の餅はどういふ物かといふと粘り強い食物である。日本人は一方には「朝日に匂ふ山櫻花」と申すやうな精神があつて、萎びても尙ほへたばり着いて居るなどと申すことは嫌ひな人間で、いさぎよく我も彼も先を争うて散つてしまはうといふ氣質に富んで居るが、併し又一方には餅の如く粘り強い力を有つて大和心を實現することをお理想とする所から餅を喰ふて之を反省するのであります。而かも其の餅に

は鏡餅がある。

御製 明治天皇の御製に「くろがねの射し人もあるものをつらぬきとほせ大和心を」とござりまするが、晴晴しく雄雄しい古神道の大精神を有する人は、此の大御心を拜察するに難からぬことと存じます。

雑煮 雑煮は又烹雜ともいひ新年三け日の間必ず食ふものとなつて居る。これも支那流の名でなくては高尚でないなどと考へて本名保藏などと稱する者あるに至つた。又羹餅などと漢字を保藏とは五臓を養ひ保つ義である。然し實のところ何處までも雑煮であつて、餅を主とし、清汁又は味噌汁に大根、人參、午莠、芋、昆布、干鮑、田作、干海鼠、小松菜等を取捨して入れ、又焼豆腐、氷豆腐、勝栗、するめ、あらめ、鮭の子等の内を加ふる地方もある。年中行事故實考には信州邊にては、總じて十三色を入れるといひ、から鮭くして、漬わらび、干瓢、雉子、花がつを、なども掲げてある。つまり地方地方で多少の相違はあるが、餅を中心として、各地に通常在る御馳走を加味するものであらう。其の時の餅は多く焼餅とするが、京阪地方等は焼かざ東京にては切餅を用

「ひらく」とは産靈の義になる。

紅白の水引を結ぶのは、明かき清きは、心を以て清き、靈の働を實現する義である。

ひ京阪にては丸餅を用ふる。雑煮中の野菜も、芋は子の殖えるものであるからとて、芋頭、芋の子を用ひ、ひらき、午莠、ひらき、豆、むすび、昆布とて、産靈の精神を忘れぬ名を付つて居ります。さうして此の雑煮を食べるときには、白木の柳箸を用ふる習ひで、糊入紙にて造りたる箸包に入れ、表を紅色の水引にて結び、且田作田作のことは二尾を挿むが正式である。紅色は例の通り「あかさき心」を、白きは「きよき心」を表はすものであります。水引を結ぶのは産靈の心にかけてある。水引のことは尙ほ相撲水引幕の説明を参照せられよ。

餅 禮容筆粹五享保年の作に曰く「歳の始家毎に餅を喰ひ、門戸に松竹を樹て藁の繩を引、皆是吾神國の風俗也、相傳ふ、垂仁天皇の御宇に、大己貴命、大田田根子命に訓へてのたまはく、元日元日赤白の餅を以て我が荒魂をまつらば、國の中災なうして幸福を來しめんと、すべて節辰の祭は、皆大田田根子命より始まるといへり、此の尊常に神に見えて、人と物語するごとく語り給ふ、是を世の人習得て、年の祭をする也」と。而して理齋隨筆五牛諸理齋に「正月の餅を鏡といふは、日月を表したる也、禁中の餅は、上は紅く下は白

きよし云云』とあり。とにかく餅を神に供へ、又お祝に用ふることは皇國古來の風俗である。支那にも似た物があつたからとて、支那傳來などと思ふてはならぬ。

餅は本名『もちひ』といふ、是は『もちひ』のつづまりたるものである。『いひ』とは飯のこと、『もち』とは總て粘り強きものを意味する。鳥や蠅を捕ふる粘るものを『鳥もち鳥糞』『蠅もち蠅糞』といひ、五穀中特に粘氣強きものを『もち糯』といひ、單に觸るるのみでなく長く強く握つて居ることを『もちもつ(持)』といひ、長久に物などを支配することを『もちもつ(有所有占有)』といひ、食物が胃中に在つて長く消化せぬを胸に『もちもつ』といひ長く耐へることを『ながもち(長持)』といひ、宵より夜明けまで最も長持する月を『もち(望)づき』といひ、『もちづき』は『みちづき』(満月)なりとの説もある。又勝負を争ふ事に勝たずまけず其の儘長く續くを『もち持』といひ、双方の品位並に満足を保持せしむることを『とりもち(取持)』といふ。正月に食ふ餅も亦『もち』とて粘り氣の強き品物であり、又粘り強き足の強き餅程宜

此の粘り強き餅を二人に引合ふことば元は福引といへり

「かちいひ」は矛盾反對に勝つ飯なり。又己に克つ飯なり。

實用的精神を排斥せずして居るが、主たるものは粘り強き心持である

いものとなつて居ります。此の餅のことを俗に『かちん』『かちん』と呼ぶ。『かちん』とは擣きたる飯をいふことである。貞丈雜記六にも『かちん』は、擣の字也、うつともつくとも讀む字なり、春杵にて物をつく事をおかつと云也、云云、いひとは飯也、こは飯をつきて餅にする故かちいひと云也、かちいひを略してかちいと云、かちいを轉じてかちんと云也』と書かれたり。東雅十二にも『古語に擣つことをいひてかちともいふ、擣栗呼びてかちくりといひて、また春米をおかつなどといふなり、東北方言と見えたり』と載せてある。然るに漢學者は又之に家鎮の字をあてて、家のしづめじやなど言ふて居る。家も何もあつたものではない、矛盾反對を征服しつ、天下邦國の鎮めとなる不屈の粘り強き精神を養ふ爲のもち即『かち飯』である。

斯かる意味ある餅であるから、皇國古來の仕來りとして、神様に『もち』をお供へ申し、祝儀にも紅白の餅をつき(かち)若若しきしるしにとて鳥の玉子の形に作り、鳥の子餅と稱して人に贈る。昔は正月には鏡餅あり、三月上巳の日には草餅を製し、五月五日には柏餅を食ひ、茅卷餅(粽)を味ふ、十月亥猪

お鏡及お鏡
開き

光りがみと
きて見ゆる
が故に眩見
赫見の義で
あるとか影
か神見であ
るとかの説
ども何けれ
分らぬ

信仰を以て
鏡の眞面目
は即ち神の
表現なり

諸曲にも松
山鏡と申す
ものがあ
るに
狂言土産の
鏡は一人が
他に方か
た致して居
るに

には上の亥の日は、北斗の斗亥の子餅を用ふることになつて居りました。鏡餅は二つ重つて居つて其の名の示す如く鏡を意味して居る。鏡といふものは寫すものと寫されるものとの二つ在つて始めて其の用を爲すのである。其の寫す所の鏡に我が顔を持つて行つて見ると始めて自分も人間であることが分かる。さもなければどんな顔をして居るか自分では分からず、猿の様だか何だか分らぬのであるが、鏡に對して始めて人間たることが分かる。所が又其の同じ鏡に、諸君の銘銘が對はれて御覽になると皆同じ人間に映る。して見るといふと一つの鏡に依つて各人が同じ人間であるといふことの證明が出来る。若し誰かお疑ひの方があつたら鏡をお覽を願ひます。

天孫御降臨の時に 天照大御神が「此の鏡は専ら我が御魂として吾が御前を拜くが如く齋き奉り給へ」と仰せられ、即ち我を戀しく思はば鏡を見よ、鏡を見れば我がチャンとそこに寫つて居ると仰せられました。そこで我我は神様を拜したいと思ふたら鏡さへ見れば宜い。鏡を見ればそこに 神様がチャンとおはします。而かも其の 神様は鏡を拜して居る者と別の者でない。鏡

を拜して居る者を除き去つて唯、神様が漠然と、お在りになる筈がない、神様が參拜者なりとの義には非ず、神様は勿論普遍的存在として參拜者の外に在らせらるれども、參拜者とは離れ給はざるを申すのである。所が其の鏡に對して居る太郎だけが 神様ではない。次郎も三郎も四郎も皆同じ 神様であります。さういふ譯であるから、一つの鏡を取つて見ると各人は皆同じ 神様であつて、各人相互も亦同じものであるといふことになるのであります。

お伽噺にも「松山鏡」といふのがあつて是は昔からの言傳へになつて居ります。其の言傳へに依ると、或田舎の人が都に上る時に何か土産を買つて來てやらうと言ひましたら、其の妻がどうぞ鏡を買つて來て貰ひたいと願ふたから、歸りに鏡を買つて來てやりました。其の妻は毎日此の鏡を見て自分を人間なみの姿に作つて喜んで居つた。さうして居る中に此の妻が不圖疾病に罹つて、臨終に自分の娘に向ひ、若しお前が此の母を戀しいと思ふた時には、此の鏡を見なさい、さうすればそこに自分が何時でも其の處に現はれると告げて死んでしまつた。其の「後妻」が來ました。然るに其の娘は繼母にもいとまめやかに仕

へましたけれども、亡き母の戀しき爲に折折鏡を出してはそこに寫つる姿を眺めて居つた。繼母が之を見て邪推を致し、是は必自分を呪ふのであらう、彼は表は親切に見せて蔭にて自分を呪つて居るやうである、其の父に告げたので、父はそれを聞いて甚だ不心得のことと思ひ、密かに覗つて見ると、娘が鏡を眺めて居つたので、段段詰問して見た所が始めて其の謂れが分かり。其の繼母が鏡を取つて見ると、恐ろしい顔をして人間の様な顔でなかつたから、大に驚いて、自分の怖い顔を直して人間の心持になり。又娘も此の鏡に寫るのは亡き母の顔ではなくて、實は自分の顔が寫つて居るのである、自分も母も同じ人間であつて、同體のものであるといふことに氣が付く。父も自分の先妻と一心同體になつて生活し、其の結果鏡を買つてやつた事を憶ひ出して、ここに一つの鏡に依つて家中が愈一心同體になり、目出度く暮したといふ話であります。是は理窟ではなく、美しき感じであり、心持であります。先程朝早く顔を洗ひ、それより神様を拜してよい心持で一日努力奮闘すると申したのも、理窟ではなく、我が知らず識らずに有つて居る我が活きて居る心持に外ならぬのであるが、此の

具足餅。
不二の餅なり。
鏡餅。

松山鏡の言傳へなども、唯感^〇じを^〇お伽^〇噺にして言傳へたものであります。

さういふ様な譯で、大きい所から申すと、天照大御神の御神勅、又小さい所から言へば、民族のお伽噺として小供に聽かせる松山鏡などに依つても、其の精神が傳はつて居る。矢張り其の精神に依つて鏡餅は作られて居るので、鏡に對ふ姿と鏡に映れる姿と二つ在れども、實は唯一の存在であり、又映す方と映される方の二つを具足して成つて居るが、實は一つの鏡である。さうして、我が唯鏡として外に之を眺めて居るだけではなく、餅に致して喰ふのである。

鏡餅 正月の雜煮には本來鏡餅を用ふべきものであるが、便宜上先づ切餅や丸餅を用ひ、後に『お鏡開き』と稱して鏡餅雜煮を食へることになつて來た。鏡餅は形圓くして鏡の如し、故に此の名ありとは一般に説かれて居る所で、禮容筆粹五には年鏡と致して『鏡は神明の正體なれば、餅を以てその形をうつし、年の始まづむかひ奉る事むべなり、けらし、是吾國の人遠き昔を忘れざるの謂か、先君父に備へ、宗族の方に送り、互にことぶきをなすと申して居る。』

鏡餅。

具足開きの
祝。
具足の初着。

第三篇

第三部

第二段

一年の實修

大晦日と正月

民家の正月

九二二

鏡開 神棚並に其他の神様に供へた鏡餅を各自が雑煮にして食べるのは、愈々神人合一の大精神を發揮し、隨神の本質を實現する仕業である。是により囊きに述べたやうに、鏡餅を供ふる人々と鏡餅を享くる神様との間に寸分の隔てなきこととなる。所が鏡餅は、圓き二つの重なりが、具はり足つて居るから、武家時代になつては、此の餅を甲冑の具足に通はして具足餅とも稱し、甲冑に供へ、『お鏡開きの祝』又は『お具足開きの祝』と稱して、以前は正月二十日に開いたものである。二十日とは、刃柄を祝ふ義なりと倭訓栞中篇四に見えて居る。徳川秀忠公二代將軍が正月二十日に薨去あつてから後に、徳川時代には正月十一日に改めたと申すことである。倭訓栞五辰の年、よリ十一日然し藩によりては他の日を選んだ所もあつたらしく、其の時の景況は次の例にても知られる。守國公御傳記七守國公は陸奥平定と號す、後樂翁に曰く『毎年正月十五日、具足の餅を頒ち賜ふ時、兩營の番頭始諸士一同、甲冑を帶し、陳列をなし、夫より行軍にて鎮守社に拜謁し、凱旋の式ありて書院に列居し、前に記せる、自書白書平定信を横目にて奉讀、一統拜聽、畢

鏡臺の鏡餅。

藏開きの祝。

第三篇

第三部

第二段

一年の實修

大晦日と正月

民家の正月

九二三

て餅酒を拜戴せり』と。(尙ほ具足と申す事は何事によらず具はり足つて居ることを申し、足産靈神の司どらるる所である。されば樂器にも具足といはれ、射手具足とも申されしも、後には専ら甲冑のことを具足といふことになつたと申す。其の具足も遂には足利頃より甲冑と異る特殊の武裝を指すこととなり、甲冑と具足とは別物として相對して居るが、然し具足餅の具足とは尙ほ古義で、双方を含めて申すのであります。鏡餅の中婦人が生命とも思が鏡臺に供へたものも二十日に之を開く、夫は初顔祝ふ二十日を祝ふの義であると、倭訓栞に説いてある。然して町家に於ても原則としては、正月藏に供へたる鏡餅を、『お藏開き』と稱し、十一日に開き祝ふたので、之は町中揃ふてなし、倉庫の戸を開き、貨買帳だいきやうぢやうを綴ぢ町家にては、福を求む、然し是とて隨神の精神を根柢として、然る後のことである。雑煮をこしらへる。年中行事故實考には、『藏の神は、稻倉魂神即ち稻荷様を祀る。祭祀雜彙曰、大神宮御倉には、大宜都比賣命を崇め、御稻倉には、屋船命を祀る、是を以て、其分あることを知るべし』とある。斯様に十

一日が藏開きにて夫までは戸を立て置く筈なれど今日は商品の出入頻繁なるが故に二日の初賣初買始商賣と共に開いてよいことになつて居る。

開くとは咬
の義
き延ふ産靈

かきもち。

此の鏡餅を小さくすることを「開く」と申し截ると言はぬ。武家にては、武士の本領發揮になければならぬ具足を切れ物で切らせぬ例である。是も理窟ではない。武士の感^おじでありませぬ。されば鏡餅は、手や槌にて破^{やぶ}し、又は水に漬^ひけ氷らせてこれを細かくする。よりに又缺餅かきもち又は搔餅かきもちと申す。世間の「かきもち」と申す言葉も、これから出て居る。

三 數の子、照り田作等。

數の子。

照り田作。

そこで屑蘇酒を飲み餅を喰ふと一心同體が輝いて來て、而かもそれが神^{かみ}しき所の一心同體となる。尙ほ其の時の副食物に何を食べるかといふと、日本全國何處に行つても同じく食べられる所の食物であつて例へば數の子、照り田作、煮豆などといふ物である。數の子は末廣がりに益産靈の働きを行つて大生命が愈己を發揚することに象つて居る。又照り田作などといつて焙烙で炒り醬油や砂糖をつけて炒りたる「ひしこ」は、益健全にして身體並に精神の愈健全

煮豆。

なる意味を現して居る。「炒りたる、ひしこ」とか、「更に炒つた、干枯らびて居る死んだ魚」などと言つては意味を成しませぬが「照り」と申し明き清き輝く日により出來たもので、人為に愈此の日の御光を實現せしむることを意味し、又田作又は「たつくり」と申して、農本時代には田を尊んで居りましたが、其の田に作られた清きものであり、「ごまめ」と申し健剛を意味して居る。我我も田に作るもの如く、日の神の御光りに依つて愈健剛になつて行く。天皇の御光りの下に愈心身を健全に發揚して行くといふ意味を現して居る。煮豆も亦それと同じく健剛の意味を表はして居るものである。

照り田作「ごまめ」又は「たつくり」は、小さき鱈を生まのまま日光にあてて干したるものなれば、串柿や勝栗の如く日の御光によりうるはしき味を得たものとする。之を人為に火にて炒り愈此の味を發揚せんと致す所に二重の妙味がある。天皇の御光りも彌其の御發揚をおたすけ申さんとする人民の心掛並に努力により、益輝かせ給ふ次第であります。此の炒りたる田作を「照りごまめ」といふ。田作のことは又敬意を表し是も祝

食積は又春盤とも書く産靈を表すあるを義で

ひの員と看做して小殿原(小殿儻)とも申す。

蓬萊節 略して蓬萊と申し又喰積と云ふものは、新年の祝儀の爲めに、三方盤の上に鬘斗、昆布、穂俵、橙、栗、海老等を飾り立てたもので、賀客來るときは之を其の前に供ふる習である。蓬萊の語は、支那の傳説に、東海の中に在る不老不死の仙人のみの住する神山をいふとある。實に此の神山こそ神國たる皇國に當るもので、日本人は皆隨神の存在に歸一し、彌榮の大生命に一致して居るから、支那人に言はすれば、擧つて皆仙人に相違ない。皆本來の一心同體の表現者であるから、小生命に拘泥して我利我利主義で相争ひ革命などを起し、聖人とまで尊まるる人でさへも衆を率ひて人を殺し王位を強盜強奪など致し、其の上萬人をして己を敬はせて置く所などは違つて居る。されば此の蓬萊の語を借り來つて、互仙人同志のより合たる神國を反省する事は然るべきことである。而して其の上に飾る品物の説明は前に致した所であるから、更に繰返すことは致さぬ。大阪邊の商人は利慾かひら寶來など見ゆ。云

若水を飲む。

大服 又往時は元日に若水を沸かし茶を入れ、之に梅干を加へて飲むことを大服と申して居つた。梅干は皺があれども赤きもので中が堅固であるから、年寄りになつて顔にほくろや皺が出来ても、尙ほ若返つて赤い色と丈夫の健剛心持とを有し、創設して已まぬことを期するのであります。然るに慾張り根性などを起して大服は大福なり、梅干は梅寶珠じやなど呼んで利得の轉がり込む様にと希ふのは、淺間しき心得方である。

七種の菜粥 往時正月七日の節供には、其の朝、三都共に七種の菜粥を製して食ふた。七種菜といふ歌に「せり(芹)なづな(薺)ごぎやう(五形)又は母子草、又はもちよもぎ(七種菜)はこべら(藥蕒)、佛の座(土器)菜すずな(菘)又は唐菜、又は京菜、すずしる(菁)又大根、これぞ七くさ」とある。是等が七草なり。是等の七草を六日に困民小農より買ひ求め、其の夜と七日の未明とに之を「はやす」のである。「はやす」とは七草を細かく切り刻むことであるが、尙ほ産靈の働を行ひ七草より特殊の品物を造り出す意味を以て居る。故に刻むとは申さず、毛髪を「はやす」(生す)などの場合と同じき言葉を以て呼ぶ。又人を

「はやす」とは産靈なり。

無数の青人
草を生成化
育する義
其の分によ
りて始めてよ
神ながらめて
存在を發揚
し得るのみ
又「七種な
づな」唐土の
鳥が日本の
國へ渡らぬ
と言ふこと

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 大晦日と正月 民家の正月 九二八
譽める人を美化する意味の「はやす」(稱揚)と同じ呼び方を用ひ愉快に合
奏をなし聲を立て調子を取る「はやし」(囃子)と同じに申す。そこで七草
の「はやし」方は俎の上に「なづな」を置き、其の傍に薪、庖丁、火箸、磨子、木
杓子、銅杓子、菜箸の七つ道具を揃へ、御年の神神年の神神の方に向ひ、先づ庖丁
を取り、俎を叩きて細かく刻むと同時に囃子をする。「唐土の鳥が、日本の土
地へ渡らぬさきに、なづな七種はやしてほと」と云ふ。「ほと」とは「程程」
じての「なづな七種」は無数の青人草に當り、「はやしてほと」とは神な
がらの理想に従ひ是等を生成化育創造して其の分を盡さしむることであ
る。(江戸にては「唐土云、渡らぬさきに七種なづな」と云ふと)。夫より庖
丁以外の残り六具を次第に取つて、此の「はやし」(囃子)を繰返し乍ら、「は
やす」(細かに刻む)なり、守貞漫稿二十六 京阪にては此の「なづな」(薺に
蕪菜を加へて粥に煮、江戸にては小松といふ村より出る菜を加へて煮たも
のであると申す。つまり同じ菜の葉の粥を吸るにいても、先づ元日來反省
した神ながらの本質を日本を通して他の民族に劣らず後れず實現せんと

佛敎の好む
紺色は死に
紺色なれば
皇國では懸
懸反つて
「かち色」と
呼ぶ。
後世には
「そなたは
も女房よば
ひせむ水洗
もあるの俳
句

する心持を以てするのである。徒らに世界とか道理とかに目が眩み、各自
の生れ付きたる本來の一心同體を通して是等を表現することを忘るるの
徒は宜しく氣を付けねばならぬ。又皇國の研究すら異邦人の著書等に
より之を通して爲さんとするやうな心得違ひの人は、「七種なづなの歌」
を繰返し歌ふ必要があらう。本來の民族精神を各自の心の中に見之を捉
へて出發せねば、隨神道の公平なる研究は出来ない。皇國人として皇國
に同情を有つて觀察せねば、萬邦の精華たる皇國の根柢は之を窺ふに由
なき次第である。

赤小豆粥 小豆粥は一月十五日に用ふるもので、赤小豆を入れて赤く色
付けてある。あかき心持を忘れぬ爲めであり、又櫻色を有して天つ晴れの
生活をなすべき爲である。されば「あかきをも」とも申し、又加賀邊で
は「さくらがゆ」と申すとのことであります。

此の十五日には土族は他人の花嫁に白雪を溶ぶせ、農家等に於ては水
を掛けたものである。是は朝起きて顔を洗ふも同様のわけで本來は袂

人格が美し
き故贅澤を
しる必要な

質朴の食物
を味ふて神
代の本を省

今日も日本
人の質素な
務なり。結
舉國同一の
食品を用ふ。

の精神より来たもので決して人の結婚に對して焼餅を焼くわけでない。
新夫婦の間の清らかなることを祝ふのである。

是等の物は所謂物質主義や感覺主義の立場から申せば味の悪い物である。
けれども、我々の人格の中に神聖のものが輝いて居るから、旨い物を食はんけ
れば立派な仕事が出来ぬといふことはない。貧弱の人間に限つて旨い物を食
はなければ活動が出来ないのであります。内部から健剛の氣が充溢して居る
のであるからどんな物を食つても構はない。二殊に質朴とか質素とかは神代
からの主義になつて居つて、我々は贅澤をすることもあるが、それが本ではなく
飲食器物の他の一切の生活共に質朴を本旨とすることを意味して居る。世の
中が複雑になる程益神代の質朴なる生活を反省せねばならぬ。三之と同時に
亦自分一人が食ふのではなく、日本全國到處どんな高山の絶頂に居る者でも
どんな谷底に居る者でも、又は都に居る者でも、田舎に住む者でも皆同じに食べ
られる物を選択して居る所が面白いのである。自分は金持であるから珍らし
い物を食ひ、彼は貧乏人であるから有り觸れたつまらぬ物を食ふといふ様な次

古の禮服は
質素に着て
何人も着ら
れ得る品を
擇みたり。美
品の非ざら
ぬ中非に

古神道では
動物すら之
を輕んぜぬ
東は北馬を
社と共参詣
する所があ

第でなく、誰も彼も皆平等に同じに食べられる物を選び、全國の人が皆睦ましく
一様に食べるのである。(此の根據の上に人人の好き厭ひにより又貧富により
其の他の物を取捨することは自由であつて、猥に他人から關涉はされぬ)。是ぞ
愈以て睦みたる所以であります。昔は禮服なども貧富を問はず誰も彼も皆同
じに着られるやうな清らかにして質素なものを用ひて居つたのであるが、近頃
は贅澤のものでなければ禮服でないやうに思ひ、目出度い祝などには争ふて
華美の服を着ますが、是は實は古神道の精神ではありませぬ。

年男 古神道の正月は一心同體として一心同體を發揚する主意である
から、近頃までも煤拂をしたり、節分の豆の年越を蒔いたり、正月の飾物をした
り、年始の諸祝儀を司る人を順番に仲好く定むることに致して居つた。即
ち來る年の十二支に當る者が之を勤める定まりで之を年男と申します。

動物 此の上下一心同體の睦ましさは單に人間同志の間のみに止まら
ず、禽獸草木にも及ぶ。雀も晴れて囀れば、鶯も來て鳴くといふ有様であつ
た。「しめかけてたてたる宿の松にきて、春の戸明くる鶯の聲」と西行上人

は讀まれ、「又元日や晴れて雀の物語り」の句もあり、雀までも、虐待されず

お祝の仲間になきな顔をして加はつて居る。 萬歳 参照

おめでたう。

第五 おめでたう。

それから正月には「お目出たう」と申すことを言ひます。日月星辰は同じに運行して居り、冬が去れば春が来るのは當り前であるのに、「お目出たう」などと言ふのは譯が分からない、そんなことを言ふのは虚禮である、といふやうなことを耳にすることもありません、それは小さい智慧袋である。一體お目出度いとはどういふ事を謂ふか、文字から云へば眼の球でも飛出しさうに思はるるが決してさうでなく、「目」は「芽」であつて芽を吹くことである。愈緑の繁るやうに産靈の働きを行つて彌榮えて行くことを意味して居るのであり、まいて古神道では彌倍榮え行くことを大精神として居ります。それ故古神道の記録を御覽になると「いゝや」といふ語は到る處に用ひられて居る。或は「八」などといふ字も澤山用ひられて居るが、其の多くは「いゝいゝ」といふ意味を有つて居る。そこで彌産靈の働きを行つて、自分の内部に具備して居る

下流の民が上流の家を訪問して千秋萬歳を祝す。

理想を實現することを意味するのであつて、今年も亦我々の内部に一心同體として有つて居る心持を、一心同體として現すのであるから、内部からの勇氣が充ち満ちて、黙つて居られませんか。「お目出たう」と言ふ譯である。自分だけならば言はぬで耐らへて居つても宜いが、人の顔を見ると皆「あな面白」で其の内部の理想が輝いて居るものでありますから、互に顔を見ると黙つて居られないで「お目出たう」と言つて其の心持を言ひ傳へるのであります。

萬歳 正月には今日でも小民がなつて居る萬歳と申すものが家家を巡つて行き、歌ひ舞ふて新年を賀し産靈の働きの榮えんことを祝す。古に於ては、京都に出るは大和よりし、中國へは美濃よりし、東國へは三河よりしたものである、そこで三河萬歳などと申す。其の歌舞中の詞に千秋萬歳と申すことあれば「せんずまんざい」の名が付いて居つたが、之を約めて單に「萬歳」と申すのである。

社會經濟の融通 正月は貴賤貧富の別なく、本來の一心同體を、氣を揃へて反省し、他人を出し抜かずして同じ神酒を飲み同じ質素の食物を味ひ一

ついで祝ふので、雀や鶯までが、祝の中に加はつて居る。之と同時に、正月は門松を立て注連繩を張り雑煮餅を食ひ七くさの菜粥を食べる爲に、中流以上の者が預かつて居る天下の金錢が、過激でなく、温かく緩やかに、下民の懷中に流れ入り、之により下民も雑煮が食べられ屠蘇も飲み得らるのみならず、寒き間に於て仕事をする資本を獲得することになる。此の頃の様に慈善事業じや等と稱し、態態人を困らせて置いて、これ見よかしに自分の私有の金錢や物品を施こし、如何にも慈善家らしい顔をして居るものは大に異り、其共揃ふて本來の一心同體を反省し、互に手を執つて神ながらの本質を發揚せんとする結果、「私を超越し表現者として有つて居る天下の財貨」が屠蘇と共に知らず知らずの間に、圓滿に融通し行き渡るのである。近頃は名譽ある人人や其の家族迄を乞食扱に致して得意で居る様であるが、眞に同胞を愛するならば、餘り臭味のない様にやつて貰ひたいものである。古來の正月の風習などは、實に是等の臭味がなし、知らず識らずの間に愈も互の一心同體たる事實を發揚せしめつつある所に、妙味がありま

金錢さへや
いばよと
のいふ譯の
でないもの

祝祭日である

第六 お正月は祝祭日である。さういふ次第でありまして、一體日の本の國では正月を祭りの月となし、元

日から祝日になつて居ります。何故祝ふかと申すに、我が斯ういふ有難い神様の現れとして存在することは實に得難いことである、さうして益々神様の産靈の働きを表現することは實に喜しき事で、祝はざるを得ない。祝ふのは當り前である。

祭りと如何なることかと申せば、神人合一である。「まつ」とは合すること、を謂ふので、甲が乙を「まつ」(待つ)て居ると申すのは甲が乙と一所になること、又甲と乙と「まつ」(相待つ)といふのは甲と乙と双方離れぬことである。睫毛などは双方から相待つから「まつ毛」である。襦とは衣服などの布幅の不足を補ふて他の布を添付せる所である。松は澤山の葉が相待つて歸一して一つの木になつて居るから「まつ」といふのである。或は澤山人家の在る處を「まち」(町)と謂ふのも其の通りで、多くの人家が相待つて一團を成して居るからで

門松の松。

政事と人とは一上
人心と人とは一上
下人心と人とは一上
ことと發揚とある

ある。また人に物をまゐらせ、人と物とを近づかしむることを「たてまつる」
「まつる」奉といふ。然して人に引きつけられ、之に歸服することを「まつら
ふ」(服従と申し、人と人の一心同體を實現することを「まつりごと」(政事とい
ひ、神人の合一を現はすことを「まつりごと」(祭事といふ。されば祭りは即
ち神人合一であつて、正月の始めには神人合一を反省して、其の本を省み、其の本
に依つて末を動かして行かうといふのであるから、お祭りをすることは當り前
である。決して自分の幸福を希ふとか、金儲けをしたいといふ爲め、祈ること
はない。

祭り 祭りと神人の合一を反省し、實修する特殊の儀式である。元來
「まつる」とは合一歸一を意味する、一心同體を實現するのいひである。
神人の合一の實修も「まつりごと」といひ、君臣の合一も之を「まつりご
と」といふ。古神道に於ては下下の者よりお上の方方に合一し、本來の一
心同體を發揚せんと願ふけれども、お上の方からも亦下下の者共に合一し、
本來の一心同體を發揚する事を樂みとし給ふ。人間が神神に合一し、之に

より其の惟神の性格を開展せんと希ふけれども、神の方よりも人間に合
一し、之により其の御存在を實現せんことを期し給ふ。産靈の愛は神より
も人よりも交相應じ、お上よりも下下よりも相迎ふる所に見事に働く次第
である。

されば 高皇産靈神は 天孫御降臨の際勅し給はく「吾は則ち天津神
籬及天津磐境を起し樹てて、吾孫の爲めにいはまつらむ、當奉齋。汝、天兒
屋命、大玉命も天津神籬を持ちて、葦原中國に降り、亦吾孫の爲に「いはひま
つれ、宜奉齋」と。是は日本書紀の一書及古語拾遺に見えて居る。然るに
神武天皇も亦詔して曰はく「我が皇祖の靈、天より降り、鑒りて、朕が躬を光
らして助けたまへり。今、諸の虜已に平け、海内無事なり。以て天神をまつ
り、郊祀て、大孝を申べたまふ可し」と。乃ち「まつり」のには(靈時)を鳥見の山
中に立つ。もて 皇祖の天神をまつり、祭たまふ。此の事も亦日本書紀の
本文に載せられてあります。

斯様に 皇祖の天神も 天孫及其の御延長たる、即ち廣義の 天孫たる

一 上より
下に向ふ場
合
二 下より
上に向ふ場
合
三 中間に
在つて上と
下とを取持
つ場合

神武天皇を「まつり」給ひ、天孫の臣下たる天兒屋命、大玉命も上神武天皇を「まつり」給ひつゝあれども、神武天皇も上に向はれては皇祖の天神を「まつり」給ひ下に向はれては古語拾遺にも見ゆる如く大宮賣神、事代主神、御膳神をも「まつり」古語拾遺には「建樹神籙」とあり給ふた。尙古事記には一神功皇后が本來の一心同體を韓國に擴張遊ばされ、其事未だ終了せざることを「其のまつりごと」政未だ竟へ給はざる間に」と書き、二又臣民が天皇に歸服し愈々本來の一心同體を成就することを「天の下まつりごと」政をば平らけく聞こし看さむ」とも記してある。三又臣下が、天皇の一心同體發揚の思召と臣民一般が天皇に信頼し一心同體の生活を欲する心持とをち取持ち致し、臣民一般に對しては天皇の有難き大御心を行ひ、天皇に對し奉りては下一般の心持を率ゐて歸服を實にすることを「まつりごとまをす」といふ。天照大御神の詔として「次に思金神は御前の事を取り持ちて、まつりごちてよ爲政」とあるは即ち是である。是を要するに「まつり」「まつりごと」と稱することは、(一)

上より下に對する場合も(二)下より上に向ふ場合も(三)上と下との間に在りて双方を取持つ場合も意味せられて居り(四)又神事と政事とに共通の言葉であつて、是等の總てに普遍的に存する義は相互の合一、一心同體たることの實修であります。

そこで神皇正統記北畠親房著 二〇一四卷にも「上古は神と皇と一にましまししかば、祭をつかさどるは、すなはち政をとれるなり」と申され。日本釋名貝原篤信著 二三七四卷にも「神武天皇より開化天皇までは、禁中に天照大神の神體を安置し奉らる、是れ神勅によれり、朝廷にて天照大神の祭を司さどる人即天下の政務を行ひし故、政をまつりごとと訓す」とあり。實に皇國は即ち神國にして、政事は即ち祭事を根柢となすのであるから、正月には産靈を表する松の「まつ」と共に、祭政一致の根本を反省せねばならぬ。然し貝原益軒翁が政事を「まつりごと」と訓ずるは、祭事より來れりとの説につきては本居先生二四三九〇生 四六一卷が其の著古事記傳に於て異議を唱へて居られます。余は先生の説に服せざる箇所もあるが、之を掲ぐれば左の

如くである。

『政は凡て君の國を治坐す萬の事の中に、神祇を祭り賜ふが最重要なる故に、他國にも此意あり皇國は更なり、其餘の事等をも括て祭事と云とは、誰も思ふことにて、誠に然ることなれども、猶熟思に、言の本は其の由には非で、奉仕事なるべし。そは天下の臣連八十伴緒の天皇の天命を奉はりて、各其の職を奉仕る、是れ天下の政なればなり。さて奉仕るを麻都理と云由は麻都流を延て麻都呂布とも云へば、即ち君に服從て、其事を承はり行ふをいふなり。』(されば、都加閉麻都留は、事服從なり、又服從は奉仕にて、皆本は一意より出たり。中略、又神を祭ると云も、其の神に奉仕るにて、本同言なり。されば政とは天皇の神に奉仕り座義とせむも、言の本の意は同じけれども、其の祭祀の事に因て云稱にはあらず、臣連等の天皇に奉仕る方に就て云稱なり。故古言には政と云をば、君へは係ず、皆奉仕る人に係て云ふ。上卷天照大御神の詔に、思金神者取持前事爲政と見え、輕島朝の詔に、大山守命爲山海之政、大雀命執食國之政、以白賜宇遲能和紀郎子所知天津日繼也と見え、又下に引る續紀

卅一の文など、皆然るを以曉るべし。(然れば言の本を以て見れば、麻都理恭登には政の字は當らず、此の字になづむべきに非ず。されど臣下の奉仕る萬の事は即ち君の國を治め賜ふ御事なれば、末は一におつめり。○麻都理恭登は令服事なりといふ説もあれど、若し然らば麻都禮恭登と云ざれば、自他の違あり。麻都理とは、自奉仕るを云言、麻都呂閉は、他をして奉仕らしむるを云言なればなり。)

本居先生は以上のやうに、『まつりごと』とは奉仕事又服從事といふ意味の言葉で俗事には政事即ち『まつりごと』であり、神事には祭事即ち『まつりごと』であると申されました。故に先生の説は服從本位一點張りのものと謂はねばならぬ。一勿論先生の駁された通り『まつりごと』は令服事であらふなどと申す権力本位の説は觀念の上からも言葉の解剖上からも採ることの出来ぬ考へであるし、二又政事の意味の『まつりごと』は全然祭事より來れりとする貝原翁の説が絶対に動かすべからざるものとも申されぬが、三本居先生の服從一點張も亦皇國本來の大精神には合

現今政治家の反省を促す

本を省みる

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 大晦日と正月 民家の正月 九四二
はぬと考へられます。四されば結論はと申すと前に述べて置いた通り、各己を超越して相互に合一せんとすることが『まつる』と申す事で、神事に表はれては祭事たる『まつりごと』となり、俗事に表はれては政事たる『まつりごと』となり、臣下が此の心持にて天皇に向ひ奉るときは服従即ち『まつるふ』こととなると思はれます。斯く政治とは、上下人人相互が自己を没却し私を超越して本來の一心同體を發揮せんと致すことであるにも拘はらず、現今の政治家は或は専ら權力關係を振り廻したり、或は各人の利己主義を闘はすことに汲汲として居るやうに見える。如何にも心外のことである。『天皇と人民との間を取持ちて本來の一心同體を發揮し上下人の表現者たる所以を實現する衝に當つて居る政治家』は何を措いても先づ古神道の大信仰を養はねばならぬ。
本を省みる 正月の『いはひまつり』は本を省み始めに反ることを何より大切と致して居る。いつたい何事にもあれ、矛盾反對する諸般の性質を包藏致して居り、又悉皆の理法が其の中に具はつて居る。たとへ現には存

佛敎では佛地獄も畜生地獄も鬼界も入つて居る。佛も佛の居る所に入つて居ると申す。

古神道の寛容性

古神道の本末の序

在せぬ様に見ゆるものも、次第に詮索して見ると追追手繰り出すことが出来る。されば物事の中に出来るだけ多くの要素や理法の包み含まれ居る所以を發揚することが尊いけれども、夫れだけでは其の物事も其の特性を失ひ、ただ掃き溜に終つてしまふ。本と末との分が立ち、諸要素諸理法が主となり、従となり、表てになり、裏になり、隠れたり、或は顯はれたりする關係が整然と立つて居る所に、事物の確實なる存在と神聖なる特色とを認め得るのである。各、其の自性を保持し乍ら其の儘大宇宙を表現し、神ながらの存在を表現し得る所以は、全く一切を排斥せず、然も亦本末の分を亂さぬからである。古神道は一方には寛容性を有し出来るだけ一切を受け容れること、に努めて居り、排他主義を排斥するだけである。然も他方には、嚴に本末の序を明らかにし、本を確立する爲めには末を切り去つて惜むことがない。夫故正月には末を後にして本から事を運んで參ることを專一となし、元日には先づ天照大御神及其他の神を拜し、天照大御神の御正系にして人間全體の總本家の長であらせらるる天皇を拜し奉ることに定まつ

て居り。次に降つては宗家や目上の親族を拜することより始められたものである。但し上下長幼うち寛ぎて一心同體の生活を樂みし事は勿論である。然るに『上長本位に偏しつゝ禮儀三百威儀三千を流義として居つた支那』と盛に交通するに及び大に彼に倣ひ七面倒な形式が定められ其の爲に公家に於ては形式に急はしく精神の方がお留守になつたらしい。元日には公禮として 天皇並に 三后 皇太子を拜する外には、親王さへ拜するを得ない。猥に他人を拜することは禁制となつて居り、僅かに親戚の範圍内に於てのみ許されたが親戚間に於てすら氏の長及兄弟以上の親族を拜することに限るとか何とか窮屈のことになつた。尤も一般民間の私禮としては神隨らの餘裕が傳はつて居り、後世になれば宗家や父母主人のみに限らず、一般に年始を賀することとなつた。支那の影響を受けた古制の儀式其の儘を今日復興することは出来ぬ相談であり、反つて有害であるが、寛にして餘裕を存しながら先づ本を立てて末に及ばんとする 皇國固有の大精神は、愈々正月に於て磨いてかかりたいものである。

大切なるは形式ではな
大式ではな
形其の精神
でいある

現時の西洋などではどうかといへば、正月はお祭りでもなければ大切なるお祝ひでもないので全く社交的實利主義の下に存する儀式に外ならぬ。年の始になつたから今年も澤山金儲けの出来るやうにと、お互に挨拶して社交を温める手段にするだけのもの。獨逸などでは『新年にも幸福あれと願ふ』^{幸福主義} *Ich wünsche Ihnen viel Glück im neuen Jahre. 即ち Glückliches Neujahr!* などと言ひ、又英吉利邊りでも『幸福なる新年を願望す』*I wish you a happy new year.* と申し、佛國でも『幸福なる年 Bonne année!』を前祝ひするなどと云つて居つて、利益主義で固つて居り一向有難く感じられない。中には『喜ばしき新年を願ふ』*Froliches Neujahr!* といふ人があつても、何故喜ばしいかと尋ねて見れば、福利が入り来る事を前提して喜ぶのである。彼の *Prosit Neujahr!* などの『プロジツト』も有用利益 *nützen* の義を有する *prosum* といふラテン語より出でて居る。されば之を『お目出たらなど』と譯すけれども、實は形式のみ似て内容は異なるものであり、神人合一して神の産靈の働を表現することを祝ふ意などは少しも入つては居らぬ。日本でも往往そんなことを言ふ人があつて『貴家の清福を祈る』などと

隨神の存在
及努力の實現
す此の感現
じが湧出し
た「お芽出し
外せざるを
得ざるなり

たこた揚
がれくけ
風よくけ
たあかい、
高天がはら
れ天まで揚が

いふことを祝詞に書加へて居る者がありますが、其様なけちなことは書かんで
もよいので「新年お目出度う」といふことが大切な事である。隨神の存在た
る神人合一を土臺として、彌神の産靈の働きを表現して往くことを感じ、然る後、
勇ましく仕事に取りかからんと期する事が新年祝詞の骨髓であらねばならぬ。

第七 紙鳶を揚げ、羽根を突くこと、其の他。

されば正月の遊びも中元氣があつて勇ましい。男の子は各自に抵抗する
豊草原(現國)の風を利用して紙鳶を揚げる、矛盾反對を歓迎し之を轉じて、飛
ばす。「たこたこ揚がれ、風よくうけて、雲まで揚がれ、天まで揚がれ」など申し、高
く高く高天原までも達せしめんとする。此の點については互に負けぬ氣で
やつて居る。女の子はとかく下に落ちて来る羽根を突き上げ、然も其の羽根を
一人で私することなく、他人に突いて送つて遣る。自分の懐へ取つたり貰ふた
りして入れるのではなく、打ち上げては他人に送つて遣る。之を遣り、羽子とい
ふ。「やり羽子や未だ戀知らぬ妹がふり」で無邪氣の中から「私を超越せる神
ながらの無邪氣」を無邪氣に彌や發揚する。女の子と雖も正月には随分跳

ね廻わるが、夫れで「はね」と申すのではない。落付た静かなる手伸しき心持
を以て、人と共に向上を期し、羽子(羽根)を突き上げ之を他人に送つて遣る。斯
様なわけであるから正月の始には、事業を休むでも、其の本を反省しつつ勢よく
遊ぶことは、將に大に不屈不撓の精神を以て本を忘れず努力奮闘せんとする準
備で誠に結構のことである。但し若し此の大精神を自覺せず、徒らに業務を休
むで懶けるならば、一時間も休まぬ方が優しである。

紙鳶 紙鳶又は凧は「いか」中國邊「たこ」關東邊「はた」長崎邊などと申し、春

殊に正月の遊戯となつて居るが、地方により他の季節に之を行ひ、随分青年
が加はつて致す。之は支那にも在つたものであるが紙老鴨とも書かれ「し
ろし」と呼ばれて居つたこともある。「いか」「たこ」の呼び方は、紙鳶に尾
のさがつて居る具合が烏賊や章魚に似て居る所から來たものであると申
します。兎に角「たこのぼり」は 皇國に於て最も盛んである。長崎の
『はた』は西洋品に似て居るとの事である。西洋では遊戯としては盛んで
なく、紙鳶の製法も發達して居らぬ。然し學術上に應用して居ることは世

古書に於ては、
人間の習俗を記し、
その旨を以て、
此の理を由れば、
以て上臆すべし、
人間的に臆すべし、
無言かつ臆すべし、
か言し得たるとも、
古昔の事には、
記に無き、
ことあるに、
代々の信仰、
制度の研究、
を此の注、
意せられよ。

界第一である。西洋の紙鳶は智識獲得の實益道具であり、皇國の紙鳶は古神道の心持隨神の感じを養成する遊び道具である。

羽根 羽子板を以て羽根を突くことの起りは明らかでない。然し風俗習慣の起源等は一分からぬのがほんとはある。記録などに見えぬから其の以前は無かつたのであらうなどと斷定するのは實證論者が常に陥る誤りである。寧ろ反證なき限りは古くより在つたものとするを當然でありませう。新しく始まつたことならば反つて記録にもあるが古くから知らず知らず行はれ來つたことは其の理由も自覺せられず其の事柄も態記録などに載せられぬものである。人間の起り夫れ自身が既に然うでありまして其の出來た理由や創設の起源などは如何なる記録にも載せられてありませぬ。夫が爲に人間が記録前より存在せしことを否定する譯には參らない。羽根羽子板につきてもつまり元は分かりませぬただ徳川時代には學者が彼是と考證し秋の頃蚊を追ひ遣る爲に蜻蛉に似せた羽根を作り突き上げ突き上げたものであらうなどと腑に落ちぬことを申して

居ります。是も實證論的實利的の考方である。

竹馬 是は正月に限らぬこと乍ら次手に申して置く。竹馬は「正しき直き竹、追進を性質とする矢などに用ひらるる竹、建き心勇」と同音を有する竹を馬となし、「うま」く跨がり活動する小供の遊びである。古は葉の付いたままなる生竹を用ひ、枝葉を下にし幹を手に持ち、之に乗りて遊んだものであるが、其の後になまがなつては竹竿の頭に馬頭を飾り下に車を付け、之に手綱を付ける様になり、近世になつてからは、一層長き竹の棒二本に横木を結び付け、兩の足を載せ、兩手にて棒の上方を握つて歩むこととなつた。

竹 笹を「ささ」と呼ぶは其の相觸るときの音より名づけ、竹を「たけ」と呼ぶは、正しき直き姿並に性質を保持するが故である。總じて直き姿や性質を有するもの、又は直きものとして観る場合に「たけ」と申す。例へば山にても特に屹立せる高山を「たけ」(嶺、岳)といひ、小さき植物にても地上に直立し多くは縦に裂けるものを「たけ」(葦)といひ、又正しき直き心持を主張して撓まざるを「たけし」(建武、猛)といひ、「物を直

立せしめて觀察し、或は直きものとして計るとき、或は事物の有らん限り
を眞つ直くに繼ぎ足すとき』にも之を『たけ』(丈)といふ。

初夢と寢船 何時の頃より起りしか明らかならざれど、正月二日の夜寢
船の繪を枕の下に敷きて寝る習ひがある。餘り古きことではないらしく、
又始は正月元日の夜に行ふた事であつた。嬉遊笑覽喜多村信節二には起原
四九〇頃作を支那に求め、韓愈の送窮文より起こり、初は單に船のみを畫きて窮鬼を流
棄する意を寓したるならんといふて居る。此の説の當否は別として、舟の
繪を枕の下に置くは、凶夢を見たる時、船に附けて流し去らしめんと考
へであつたらしい。然るに大和民族の積極性は、消極的に凶夢を流してや
る事では満足して居られず、積極的に船により吉きものを積み込むことを
考へることとなつた。

先づ禁裏に於かれましては國家の經濟に 大御心を用ひ給ひ、『萬民の
活働力を養ひ産靈の働きの資料となる五穀』の豊穰なることを希ひ給ふ
結果、舟に稻の穂を載せたる圖を畫き、初夢にお用ひ遊ばされた。人民一同

古神道の幸
は支那流の幸
は幸福と異り
なり

人世代の代見
より長夜の夢
覺ゆれば現
生に及ぶ理
中つ國に現
想を實現す

も此の 大御心を承けて之に倣ひ奉りしが、更に進み米俵を積める圖とな
り、『寢つむ』と『稻積』と同音であるから稻積船を枕頭に置き、寝る祝と
致したものである。總じて正月には消極的の言葉を用ひず、寢起のことも
稻積、稻擧と稱し、疾病を歡樂と申して居つた。唯「しみつたれた幸福」を祈
るのではなく、『天つ晴れ』『あな面白』『あな手伸し』『あな明け』の心持によ
り、一切を美化して名づけたものであり、所が社會經濟上の變遷と共に
に稻より金錢を主とすることとなり、是と福利主義と七福神の俗間の寄せ
物的信仰などが入り雜つて、船の上に七福神や鶴龜や寶蓋などを畫き、寶
船と申し、又更に後には夫の『ながきよのとおのねふりのみなめざめなみ
のりふねのおとのよきかな』といふ廻文の歌をも書き加ふることになり、
形式は複雑になつたが、かく各個八各戸の私の幸福利得などに憧れ、私利
を夢みて喜ばんとするやうに墮落致すことにもなつた。

今日の初夢の思想は墮落して居る。然し本來各自が 大御心をうけ奉
り、一人として天下國家の經濟につき心を用ひざる者なく、寢ても夢にまで

大黒、惠比須は木像に祀る。大國主神言に祀る。或は曰く「えびす」は東夷の夷なり。の訛りたるものなり。元來猛惡なる不文未開の民をいふ支那人にも非ざる。倭人を自卑して「えびす」といひ、古神道の神を附會すと。

大智慧功德財により大辨財を成就す。

と申して 大國主命の信者を佛教に引き込むだ。二、大國主命には事代主神と申す大義名分に明らかなる御子がある。父の神をお助け申して國土を經營せられ、鳥狩や捕魚をなされた御方である。此の神も一般人民の尊敬厚き御方であらせらるるが上卷三八七以下及之を「もと明確でない恵比須」と習合致した。尚 伊邪那岐神 伊邪那美神の御子に水蛭子(蛭兒)と申す御方がある。此の神の御名を「えびす」と讀ませ、之とも同じである様に申しふらした。然し蛭兒は古事記によるも日本書紀其の他によるも、福の神たることなどは記していない否、反對に、此の神は手足も有せられぬ所から下等の水棲動物として 親神様の御心に協はず、葦船に入れ流し捨てられた御方で釣などの出来る筈がない。然し其の御名を利用することが好都合である所から、可なり、古くより、蛭子は即ち夷三郎であるなどと申して居る。三郎とは日本書紀によれば、諸冉二神が 天照大御神の次に 月讀命をお生みになり、次に蛭兒を生まれたと申傳へて居るからである。また恵比須は 彦火火出見尊即ち 火遠

理命なりとも申す説もあつた。兎に角恵比須を信ぜしむる爲には、其の中に包容する神神の多き方が宜しいから、事代主神の實質を基礎とし、海に關係ある神神殊に稱呼上附會し得らるる蛭子を選んだものであらう。恵比須は古神道の如何なる神なるか、之を三辨財天も印度の女神で、一切の世間を利益し、貧困を救ひ、財寶穀物を施與せらるると申す、そこで或は此の者と五穀經濟の神たる 宇迦之魂神(稻倉魂神)とを同一なりとし、殊に古書には辨財天を又宇賀神將と記載してあるから一層好都合であつた、又辨財天は水と關係ある女神であるから、水邊に祭れる嚴島明神即ち 市寸島比賣命上卷二九四參照三官幣中社嚴島神社には、市寸島比賣命を主神とし、多紀理毘賣命及多岐都比賣命併せて三柱の比賣御子を祀る。又は竹生島の 淺井比咩命と習合致して居つた。四、毘沙門天も印度の財寶福德の神である。之には古神道の神神は習合せられなかつた。五、福祿壽は宋代の道士なりともいひ、又三星の名といふ、杖の頭に入人の壽命を書いた巻物を持つて居る、富み且貴く且命長からんことを希

壽老人は又
南極老人と
いふ。

第三篇

第三部

第二段 一年の賞修

大晦日と正月

民家の正月

九五六

ふ餘り此の名を喜び敬ふのである。六、壽老人は千五百歳を超へたる玄鹿を伴ふて居る、其の鹿の肉を食へば二千年は生きて居られるさうじや。然し其の玄鹿を殺して肉を喰ふわけに參らぬから、もつたものである。七、終りにでつぷり肥滿せる布袋和尚は支那に居つた物貫ひで、人から施與されたものを大切さうに袋一杯につめ込み、小供などと嬉戯して満足して居つた者である。孰れも皆或る程度に於ける神の表現には相違なからうが、或は空しき想像神であり、或は低き權限に満足して居つた史上の人物である。之を信仰したと申しても、半は玩弄的であり、又それにしても信仰し得たるは、大黒天及惠比須を以て、大國主神及事代主神に習合し、此の二神を頭らに致した爲めであらう。

爆竹 正月十五日の朝には、豫め塞の神として四つ辻岐路に限るに立てたる長き棒の前に於て、又は塞の神の御前のつもりにて四方に竹を立て、其の中に於て門松、注連及是等に附屬する竹や品品を焼き捨てる。六十日を以てす。之は一つには元元神しき飾物なれば、粗末にせず穢さぬやう

十五日に
新婚礼に
雪祝ひ水
ひ祝ひ水祝

今日の如
社会は如
今日の如
は昔のや
に着實て
るかどう
か。

第三篇

第三部

第二段 一年の賞修

大晦日と正月

民家の正月

九五七

に終りまで火で清めて形を變へしめるので、つまり産靈の働きを火を借りて行ふことに當り、誠に結構のことである。殊に塞の神は、日本書紀では岐神又は來名戸之祖塞神と申し、古事記では塞立船戸神續古神道大義上卷二三七頁參照とありて、通俗に申す道祖神又は手向神は此の神であらせられ、伊邪那岐神が禊をなされた最初に投棄給ひし御杖に成りませる神様に、之より内には根の國の汚れが其の儘の性質形状では入り得ぬ様に道を守り給ふ神である。従ふて正月の飾物は撤して焼いてしまふが、一度清くなつた皇國並に家及人々に汚が汚れとして入り込み又は取り付くことの無きことを、此の塞の神に祈りて期するのであります。此の塞の神を長き棒を以て表はすのは、元元伊邪那岐神の御杖に成りませる神様たるが故である。岐路や山の峠等には石を衝き立て此の神を表はす。

然るに支那文明に心酔せし時代には、皇國の爲し來りの行事は下民間に確守せられ、都の中央にては支那流の儀式を行ふこととなつて、正月十五日も支那の上元といふ日に當るからとて、之に支那流の意味を附與し盛

大なる爆竹の式を舉行することになつた。

爆竹は『さざちやう』左義長、三毬杖等といひ、支那より入り來りしも、何時の頃より初まりしか明確ではない。爆竹は元日に限らず祝祭に於ける漢土の行事であつた。然し其の理由として支那書に見えて居るものは、一つも雄大の理想を示して居らぬ。例へば一、神異經に曰く、西方の深山中に身のたけ丈餘の山男がある、之を見る者があると直く寒熱の病氣に罹る、其の男の名を山臊と申す、所が或人が竹を火にくべてバチバチと音をさせたるに、此の山臊が皆驚いて逃げてしまつた、夫以來爆竹をして無病を希ふのである。二、朱子語類によれば、或人曰く、李三といふ人があつて、死んで後厲となつた、村里に祭祀や佛事があると、必ず此の厲にも御馳走を供ふる習はしとなつた、偶之を怠ると、此の厲が仇をして、齋食を盡く汚してしまふ、然るに或人が爆竹を以て、此の厲の住んで居る樹木を焚き拂ふた、夫以來此の災害が絶えてしまつた。朱子曰、是他枉死氣未散、被爆竹驚散了と。三、毬打を蚩尤の頭と看做し之を弄するのである。是等以外にも定めて何の彼のと申

す人もあらうが、孰れも萎縮したる心持により行はるる、淺薄な事柄である。此様な事も一時は正月十五日に複雑なる儀式として行はれたが、今日は全然消え失せた。然し其の更りに西洋の層無意味なる風俗習慣が續續侵入しつゝある。之も誠に結構であるが、先づ隨神道の發露たる皇國古來の風俗と其の背後に存する大精神を自覺して、然る後に輸入して貰ひたい。

第二款 皇國の大祭及公儀

一私人がさういふ風に祝ふばかりでなくして、上 天皇陛下に於かれましても人民を率ゐ之に先だち給ひて、新年の祝祭をお行ひ遊ばします。

第一 四方拜。

先づ正月一日には四方拜と申す御式がある。是は元旦拂曉に 天皇陛下が神嘉殿に臨御せられ、御自身に 天つ神 國つ神、並びに四方の有らゆる 神神をお拜しになり、又代々の御山陵をお拜し遊ばさるるので、是等の有らゆる 神様と歸せられ、是により寶祚の天地と共に御長久なること、亦天地が寶祚に依

四方拜と申す大祭。

つて長久なることを祈りになるのである。それからして此の年も益々人民は健剛にして産靈の働きを行ふやう、八百萬神が之をお助け下さるやうお祈りになる次第であります。

三大節の一。

四方拜 四方拜は紀元節天長節と共に三大節の一つであり、其の起りは甚だ古きことに上る。天皇のみならず臣民も亦之を行ふたものである。後には年の始に限りて行はるる朝廷の大儀となつた。之は或は光孝天皇の仁和五年とも申し、或は其の翌年即ち宇多天皇の寛平二年とも申す。明治に至りても之を年中恒例の大儀となし、式の模様など改定せられた。之によれば夜の明けぬ中に午前四時前頃神嘉殿の南庭に玉座を設け、五時の頃御出御あり、伊勢大神宮内宮は更なり外宮も同様、天神地祇、神武天皇御陵、先皇御陵、武藏氷川神社、賀茂兩社、男山八幡宮、熱田神宮、鹿島香取の兩神宮を順次御拜ありて、天の下の太平、實祚の長久、萬民の手伸しきことを祈らせ給ふ。御拜畢りて宮中の賢所を拜し入御し給ふ。

第二 元始祭。

元始祭と申す大祭。

現人神、明御神。

又三日には明治五年以來元始祭と申すお祭りがあつた。元始祭とは、天皇陛下が人民に率先し給ひ、報本反始の大御心により、根源を省みさうして建國の土臺となつていらせらるる神神に合一せられ給ふ御實修のお祭である。即ち天照大御神をお祭り申してある賢所並びに代代の天皇の御靈をお祭りしてある皇靈殿及神殿神殿は神武天皇以來明治迄お祭りをして参りましたる八柱の神様並びに天つ神國つ神の一切をお祭り申してある等宮中に在る三つの神殿に於て御親祭遊ばされます。是により天皇陛下が唯御肉體を有せられ權勢のみを有せらるる御方におはしまさずして根柢に於かれては是等の神神と御一體となり是等の神神を其の内部に包藏していらせらるる現人神即ち明御神で在らせらるることを彌確實にせらるる御式であります。一言で申せば元始の事を御反省遊ばされて、其の根本的の御性質を御發揚遊ばされる所の御式であります。

元始祭 此の祭の實質は極めて古くより存せし所で、神武天皇が靈時を鳥見の山中に立てて皇祖の天神を祭り、又八柱の神と共に天つ神

臣民は悉く此の祭りを共にす。

政治始。

神事を始めとす。

國つ神をも祭り給ひしも上卷一五五頁以下亦之を證するものである。然し明治の皇政維新と共に愈其の根柢を發揮せられんが爲に一月三日に天皇陛下が賢所、皇靈殿及神殿に於て御親祭遊ばすを恒例となし、皇國の大祭と定め給ふたのである。當日も常の如く大眞榮木を御門の左右に建てられ、午前十時 天皇御出御あり、先づ賢所にて御玉串を奉り、御拜あり、御告文を奏させ給ひ、又御鈴の儀あり。儀畢りて皇靈殿に進ませ給ひ、次で神殿に進ませ給ひ、儀畢つて入御せらる。此後に親王、大臣、其の他親任官、及勅任官等も拜禮することになつて居る。十一時よりは更に皇太后宮、皇后宮、東宮等の御拜在り、午後には一般に官吏が參拜致す定まりである。此の日には、日本全體の神社は官幣社、國幣社、以下府縣、鄉村に至るまで此の大典に準據して祭を行ひ、臣民は其の基督教徒たと否と等の別なく、悉く戸頭に國旗を掲げて此の大祭を共にするのである。

政治始まつりごとはじめ

一月四日即ち元始祭の翌日午前 天皇正殿に御出御あり、親王、大臣及樞密院議長等參列仰せ付けられ始めに 神宮の事を奏上し、然る後

大御心を奉體すること

新年宴會。

第三 新年宴會。

に政務を奏する次第である。何處までも随神の信仰を基礎となし、神神の御力により俗權を行ひ給ふことが御主意である。換言すれば天皇は神神に歸一せられ、現人神たる根柢を以て政事を行ひ給ふので、臣下も亦此の大御心を奉體して政治を輔翼し奉る次第である。

其の翌翌日の五日には新年宴會と申しまして、心持に於ては神様に、お供へ申した種種の物を土臺として、天皇陛下が豊明殿に出御あり、臣下の重なるものをお集めになつて、御馳走を賜はる式がある。人民の私の家家に於てもお目出度い神酒を戴き、又お雑煮などを食べまして、皆一心同體となるのであり、すけれども、其の總本源で在らせらるる皇室に於かれましても「豊の明かり」を名とする御殿に臣下をお召しになつて、神酒神食を賜はり、之に依つて一心同體を實現し給ふ次第である。

新年宴會 之も其の内容は大昔より在りしことなれど、一月五日に新年宴會と稱して取り行はるる定めとなりしことは、明治の御代からである。

既に 神武天皇の御時にも群臣を集へて酒宴を給ひし事、古紀日本に見えて居り、何時の頃より恒例の御宴となりしやは知れざれど、持統天皇の御宇には公卿を内裏に召して『とよのあかり』(豊樂)せられしことあり、其の後は『とよのあかり』又元日節會とよひのせちまゐりと稱し、新嘗祭の翌日の節會を『とよのあかりのせちまゐり』豊明節會とよあかりのせちまゐりといふ、是とは異れり、天皇紫宸殿に出御遊ばされ、群臣に御馳走を下し賜はる例であつた。然るに足利の世に 皇室の遊ばさるる此の儀式も中絶することとなつたが、又古來の内容を復興せられ一月五日に執り行ひ給ふのである。

終りに『豊の明かり』と申すは 天照大御神及其の御延長たる 天皇の御光りにより、臣民一同も『天つ晴れ』『あな面白』『あな手伸し』『あな明け』と光明が心身に充ち満ちて居るから、上下の光りが交、反映しあひ邊際が無いのであります。之を『豊明』又は『豊樂手伸しの義』と書き又は讀んで『とよのあかり』と申す。然るに御神酒に酔ふて顔が赤からむことを『豊のあかり』と申すとか、甚しきはぐつたりして飲み且食ふから豊

豊明、豊樂の義。

古神道の食物。

一人食へば舉國の活動力を生ず。

樂であるとか考ふるのは餘り卑近の思想であります。

神道に於ては食物をも決して輕蔑致しませぬ。何となれば、食物をも神様の現れと見て居る。御飯粒もただの物質ではないので、神様が其の中に宿つておいでになるのである。故に我我がそれを 神様として食べるときは、其の神様が腹の中に入つて色色にお働きになつて、神聖の活動として表れ出て来る。若し是が單純の物質であつたら殆ど意味の無いものである。其の神酒神食の中に活きて居る神神しい力が在るから、そこが尊いのである。其の神酒神食の力といふものは、それを食べる一人のみを養ふものでなく、其の神酒神食を食べるときは、太郎一人が食べてもそれが全體のものとなる譯である。生理學などを卑近に研究して居つたのみでは分かりませぬ、我々が飯を食ふのは自分だけの腹に溜まるのではなくして、それが 皇國の力となり、一般人の力となるのである。日常の酒食でも、さうである、まして特に 天皇の御心の籠れる神酒神食を頂く場合には、論のないことでありませう。さういふ神聖の神酒神食を食べる式を正月に行つて、上下共に反省するので

ある。さればお互が正月に餅を食べる時にも、實はさういふ心持で食べなければならぬ。單に自分の腹に溜める爲であると思つては大間違である。其の食べる餅は世界に歸一し、神に歸一して居る自分が食べるものでありますから、其の餅の影響は大なるものであります。

第二節 正月後と年末

第一 古神道の信仰は些細なる事柄にも現はれつつあり。

尙ほさういふ様な精神は正月でない時にも現れて居る。例へば注連繩を採つて申すと、

大木におしめ繩を張る。

一 大木。

特別なる大木などには注連繩を張つて居りますが、之は神の現れであるといふ證據であります。それはただ太郎といふ椎の木であるとか次郎といふ樟の木であるとか申すに止まつて居らずして、物事の存在は斯く迄立派になり得るものであるといふ、宇宙の大生命の神聖なる所を表現して居るものである。其

の木は宇宙の美を表現して居るものであり、神の現れであるといふ、注連繩を張るのである。

二 相撲。

人間などでも相撲取りなどを御覽なさい、横綱などになると、相撲取りの中の花であり、表現者であるといふ所から、注連繩を腰化粧禪の周圍に張つて居ります。「しで」を垂れたる白麻の繩は即ち注連繩のつもりである。其の外の力士が腰に纏ふ締込の前垂も注連繩に準ずるものであらう。又相撲を取る時には、必ず水で嗽ぎ手を淨め、鹽を撒く。鹽を撒くのは穢れを去る爲で、伊邪那岐命が根の國から明るき國へお歸りになつた時、海水にて禊を爲されたのか起りであります。それから後は鹽は淨める爲に使ふものとなり、今日でも葬式等に行つて歸つて來ると鹽を撒いて身を淨めるのである。其の鹽を三方に撒くのは伊邪那岐命が上つ瀬、下つ瀬、中つ瀬の三方にて禊を遊ばしたるに象るものであらう。それで相撲を取るときには先づ水にて口を滌ぎ手を洗ひ鹽を撒いたる後に手を拍ち、神懸かりし、自分といふやうな私の心無く、立派な表現人として相

横綱と七五

今日「しで」には紙々用

鹽を撒くと

手を拍ち神懸りす

互に對立して居ることを明らかにする式を済ましてから、相撲を取り始めるのである。故にそれが爲に假令投げ殺されても少しも苦情も遺憾も無い譯である。昔の相撲は負けた者は同時に殺されてしまつたもので彼の野見の宿禰と當麻の蹶速の相撲なども當麻蹶速は蹶殺されてしまつて居り、其の後も斯る例が多い。又神代に於て 建御雷神と 建御名方神と力競べ(相撲)をなされた時も、建御名方神が投げ付けられて命が危かつた爲め、出雲の國から信濃の國迄逃げて行かれて彼の地で永遠有効なる御誓を遊ばした様な次第であります。斯様に相撲は眞面目の勝負であるから先づ神人合一の域に入つて、然る後に致すものである。されば側で見て居る者としても樂樂としては見て居らず相撲取りと合一して自分が相撲を取る積りで見て居る。さうです。相撲を取る者は二人であるが彼等は各自分の最良などの全體を脊中に脊負つて最良の人人と一體になつて相撲を取つて居るのでありますから國技館の如き大建物の内に居る數千の群集は東西二人の相撲取りに合一して是等の二人を通じて相撲を取つて居るのである。して見れば相撲取りの身體の重いのは勿論である。相

國技館内唯
二人の相撲
あるのみ

軍配。

起原及性質

相撲の一指中にも相撲取全體が入り、相撲取中に觀客の全體が入り、否、神が入つて居らる。又相撲を取つて居る間にも水入といつて水を以て口を滌ぎ手を淨めることをやる。生理學などから考へては一寸口を滌いだ位で力の出やう筈が無いが、是は皆古神道の信念より來て居るので、其の水には無限の意味を有つて居る。故に水を入れると大いに力を恢復して奮闘が出来るのであります。又相撲の時用ふる軍配などにも日月の形を表はし天下泰平と書いてある。さすれば天下泰平を實現する相撲であります。

相撲の起原及性質 相撲は「すまひ」とも轉じて「すまふ」ともいふ。

其の語義につきては諸説ありて一定せざれども矛盾反對に打ち勝たんとして自己の力所を主張する義なるべく、逗留（古事記の朝參照 垂住などの言葉と同じ根を有す）後拾遺和歌集四（白河天皇の朝）に「秋風にをれじとすまふをみなめし、いくたびのべにおさふしぬらん」(前律師慶暹)とある、其の内「すまふ」といふ言葉などは良く當つて居る。

相撲の起りは神代に在れど 聖武天皇の御宇には相撲節（すまひのせつ）ありしこと歴

史にも見え續日、桓武天皇延暦の御時より相撲節會を恒例とせられ毎年七月に之を行ふた。其の後 高倉天皇の朝に一度行はれしが夫より永く廢絶せられて居る。此の節會は公事となつて居たが、後世の勸進相撲、花相撲、辻相撲など概ね之から出で來たものであり、其の内で勸進相撲が最も主なるものであつた。

勸進相撲は神社佛閣の建立修繕の爲め、又は道路橋梁の修築の爲め、勸進(善美なることに喜捨すること)の淨財を集むる相撲のことであつたが、遂には營業の爲め木戸錢を取りて興行する相撲のことを申し、神社の御祭禮に寄附するものを神事相撲と呼ぶやうになつた。

斯かる沿革を有する相撲であるから、ただ假初の力競べとは異り、今日に至るも尙ほ幾分眞面目の精神を傳へて居り、古神道所産の形式が保存せられて居る。されば古神道の自覺により、彌此の技を雄大にせしめ得べきことは疑ふべくもない。

土俵 土俵の作り方から既に單純の便利主義實用主義のみでない、實用

土俵。

も便利も考の中には置いてあるが、深き意味を偶せられてある。一言にして申せば土俵の内は即ち大宇宙其の儘である、大宇宙の表現である。古今相撲大天下二四二三に相撲行「土俵を圍く居るは太極を象る、四方に四方を合せ、内外にて三十二俵なり、内土俵十六俵の内、左方に二俵、右方に二俵、合て四俵のける、左右は兩義にて、左方を陽とし、右方を陰となす、二俵宛のけて一道を作る、今之を二字口といふ、阿吽の二つより出るといへり、左にあらず、古へ角力すでに始んとせしに、俄に大雨のふり、土俵の中へ水たまりし故、すまふを猶豫せしとき、左右の土俵一つ宛のけ、水を流せしにより水流しといふ、しかれ共その名目、今しる人まれなり、内土俵四俵のけて、残り十二俵を十、二支に象り、外土俵四俵のけて、残り十二俵を十二月に標す、近例は内土俵ばかりをのけ、外土俵二俵宛はのけず、内土俵の二俵宛は、左右今東の關の腰懸とす、是も近來は、古の餘風もすたれて水桶載せとす、世人士俵の數は定らずといへど、左にあらず、甚故實あることなり、委は秘要抄に出たり。」斯様に申して居る。是は百五十年後の今日とは大に異なる所もあらうし、其の説明の

形式も支那の陰陽五行等の説に據り、臭い所があるが、つまり「土俵全體を以て天之御中主神の存在し給ふ範圍とし、左右を高皇產靈神、神皇產靈神の御領分と見、内土俵外土俵を以て一切の時間と空間との名義を表はすものとし、土俵數の各十二在るは神世七代の神神併せて十二柱の守り給ふ所」と解する精神に外ならぬ。他の言葉を以て説明すれば「土俵は單に二間一尺又は三尺の狭き圓き場所ではなく、時間空間に亘り大生命を有する大宇宙其の儘であつて夫と離れずに産靈の大活働即ち相撲が行はるのである。此の産靈は努力奮闘により、大活力を生ぜしめ形を示すものなるが、廣大にして壯麗なる妙技となつて現はるるものであり、然も東西の力士も觀客も和合一體を主意とし、恚恨憤怒により相殺傷するつもりで致して居るのではない。」神世七代の神神其他は其他尙ほ内土俵の二俵宛を取り東西の關の腰懸とせし所も妙である。是は是等の大關等が時間空間に亘り、表現人として活働すべき所以を感じて居るからであらう。

四本柱。

四本柱

土俵の圓きは大宇宙を象るのであるから、四本柱とても無意味

今日は四本柱に
赤下毛に
巻上毛に
は赤下毛に
巻上毛に
を巻上毛に
配して色を
分に配して

のものではなく、天下國家の御柱である。古今相撲大全下には「四本柱は四季に標す、東は春にて其の色青色、西は秋にて白色、南は夏にて赤色、北は冬にて黒色なれば、其の色色の絹をもつて巻を差別とす、御前すまふの風流なる物好より、つひに一樣の色絹にて巻様に成たり」とあり。又大相撲評判記上には「四本柱は略中風流の物好より、一樣に赤き絹又は毛氈にて巻、其上を白き絹または白木綿にて巻こととなりぬ」とある。思ふに一、上古は古神道の精神に基き、紅、白、あかき、きよき色の布を以て巻きたるものが、支那思想の入來と共に四本の柱を天の四方の星神に象り、東は青龍にして春に當り、西は白虎にして秋を司り、南は朱雀にして夏、北は玄武にして冬なりなどと申し、四色を四本の柱に配當し、其の色の布を以て柱を巻いたものであらう。三、然るに徳川氏の中頃第二十四世より古神道の復興に従ひ、四本柱の布色も支那流を排して日本趣味に立ち歸り、各柱共に赤き絹又は毛氈にて巻き、其の上を白き絹または白木綿にて巻きたるものと覺ゆ。四、今日には又逆戻りして黒、青、赤、白の四色を四本の柱に分けて巻き、水引幕の總に

西の柱には
弓を結びつ
けてある。

進物川の水
水引幕
髪(かみ)即
ち上(かみ)を結
ぶ細條を古
くは水引と
いふ、後引
は之を元結
といふ。

女房に水洗
じひする
ると同

まで之を推し及ぼさしめて居る。四本柱は之と中央の土を加へて五行

四本柱は八幡幣を裂きたる白布で括つて置く、八幡宮は御母 神功皇

后の御胎中に在ます中に、既に三韓を征服せられし神にて、源氏の氏神であ

り、鶴岡八幡宮の御祭事には定まつて相撲を行ふと申す。是等の柱の内北

の柱を役柱と申し、總括りをする柱である。従ふて北の方を正面となし、今

日の國技館内には其の方面に玉座を設けてある。役柱の北に在るは天

皇が天照大神の御光を最も充分に受けさせられ、此の御光を以て南面

して臣下に臨まれ、一切を總攬せらるることに當たる。之を北辰、其の所に

居りて衆星之に向ふが如しなどと申すものもある。

水引幕 穢を祓ひ不都合を鎮むる爲に引く水を表すものが「水引幕」

である。人に品物等贈るときにも、彌擴張する意味を偶せしめた祝ひの熨

斗と、贈物により穢れる様なことはなく、是により互に且互の間も益、清

くなることを期して水引を添へてやるのと同じ心持であります。此の水

引も紅白(明かき、清き)の結び合はせを用ふるが根之國の穢に入つた時のみ

一時黒水引を用ひる。又地方によれば赤と金色の水引を使ふが、之は水引

の下落である。相撲の水引幕も斯くありたきものである。古神道に於ては、

大宇宙の存在も其の産靈の働きも、襖によりて始めて實現せられ完成する

ものと見て居るから、水引及水引幕には輕からぬ意味の存するものと思は

れる。(相撲隱雲解には「水引は黒赤黄三色之絹を以て、北之柱より巻初め、

北之柱江卷納るは、出る人々を清むる心なり、北を極陰と云、相撲に是を役柱

と名附、俵を以て形をなすは五穀成就の祭事なり」とあり。また大相撲評

判記上には多少之と異りて記載せられてある。即ち「四本柱の上に、張幕

を水引幕と號るは、東西の力者、精力を勵まして勝負をいどむ、是陽と陽とを

闘かはす事なり、陽氣相戦ときは陽、火を生、たとへば檜と檜と合すときは、火

を生ずるが如し、此の理をもつて陽火を鎮むるため、水に表して水引幕とい

ふ也、かるが故には、る時も北より張出し、北にてはりをさむ、北は陰にして水

徳を主り、易にとりては坎なり、尤も絹の色は黒なるべけれども、是も後世風

流の好みより、色色の絹を用る也」とある。如何にも支那思想を以てした

「こいん」

「ぶどいん」

は聞えず、「がらんがらん」と音する西洋鐘の如く物騒がしく上つ調子でなく「ちんちん」の鉦の音の如く悲哀沈鬱でなく勇ましく大きいものである。釣鐘の「ごーんーん」といふ響は汎神的で遠く聞こえ深く達し長く消えず心の底の底までじくじくと染み亘る様であるが常に陰氣のもので厭世的の色彩を帯びて居る。太鼓にも大小色色あるが特に大太鼓などになると其の「ぶどーんぶどーん」の音は「天つ晴れあな面白あな手伸しあな明け」と陽氣に遠く、廣く、且腹の底まで響き、引込思案など致しては居られない。されば此の頃までは樂器としてのみでなく、軍陣中に於ても、一般にも、時間や其の他の合圖に用ゐられ來つた。相撲の櫓太鼓の音は元より理想的のものではないが、此の皇國の太鼓の音を、手本として居る所が尊い。皇國數千百年來の太鼓の音と聯絡を保ちつつある「どん、どん、どん、どん」である。

太鼓の種類 太鼓にも種種あるが、一、雅樂用の品には、大太鼓、荷太鼓、及釣太鼓の三種がある。中にも大太鼓は朝廷の盛儀及大社の舞樂に用ひ

られ、面徑六尺三寸もあり、左部には巴文三つを書き、右部には巴文二つを書き、周囲には刻みたる火焰を飾り、故に火燭大上の中央に七尺八寸の柄を立て、其の上に日像と月像とを掲げてある。之は庭上に壇を設け、其の上に置いて撃つものである。荷太鼓又中太鼓は道樂に用ひ、革面の徑二尺七寸、擔はしめて之を撃つ。釣太鼓又小太鼓は神社佛閣の常の儀式や尋常の舞樂に用ひ、革面徑一尺八寸よりなく、釣つて置いて坐して之を撃つものである。二、俗樂用の品にも、大太鼓、縮太鼓、陣太鼓、豆太鼓等がある。大太鼓は名稱の如く大なる皮、羊、馬、を堅き木の胴に釘にて張り付けたるものにて、古來時間や其の他の合圖に用ひらるるもので、里神樂などにも之を使ふ。縮太鼓は雅樂用の釣太鼓より轉じて出來たもので、釘付でなく緒にて締めてをき音調を調節し得るやうになり、能樂其の他俗樂に於て之を用ふる。

太鼓の特性 一、太鼓はもと空筒で内が空しいものである。然し大なる響微妙なる音を發する空虚では、眞空である。即ち天之御中主神

太鼓と撥と
音とは一に
歸す。

産靈の原理
に協ふ。

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

正月後と年末

相撲

九八〇

の御性質を表はして居る。二、此の眞空は積極消極の兩方面を表する左
右の撥により撃たれて音を發する。離れ離れの太鼓と撥とが音を出す
のではなく相觸れて一に非ず異に非ずと申す所で鳴り且兩の撥が調和
して働く所で音樂となる。是は相待つ御二柱の皇産靈神があらせら
れて始めて天之御中主神夫自身が産靈の働きを爲し、諾冉二神の愛
による一心同體の實現と共に世界が創設せられたる思想と同じわけ合
である。三、又太鼓を撃つには其の眞ん中のみを叩けば平らかにして音
大ならず眞ん中を本とし之より種種の距りを撃つので自由に高低の諸
音調を發生する。四、撥を用ふるにしても其の通りである。撥の眞ん中
を握つて撃てば平らかにして和らかき音響を發するが末端を持つて叩
けばいとも浮きやかなる音を生ずる。五、其の撥を用ふる者から申して
も魂を鎮め下腹に力を込めて撃つから鼓手と太鼓とが一つになり鼓手
の心持が太鼓を借りて音響となつて現はれる。又夫故常に平らかなる
根據を失はずして手を動かし撥を用ひて行ける。六、斯様にして撥を使

ふ爲に肢を用ふるにも肩と肘とが下腹の力に應じて働き手頃の上の面
だけを以て撃たぬやうになる。是等は皆平らかなる眞ん中眞空を本來
とせる根柢により偏や端を用ひて行くことの必要を示すもので是が實
に古神道の産靈の説明である。是は強ち太鼓に限つたことではないが
常に眞ん中を失はずして偏を用ひ端を使ひ是等をして眞ん中を表現せ
しめて行く所に妙味がある。「はし」は「まんなか」ではなく、「まんな
か」も亦「はし」ではないが其の相待つ所に始めて役に立つ「はし」
もあり「まんなか」も在る。「まんなか」と「はし」とは相待つがいつ
も「まんなか」が本となつて末の「はし」を働せて行くことを忘れて
はならぬ。

此の太鼓は、現今西洋傳來の諸樂器の西洋の樂器中こせし居るものや
うに徒らに緻密一方で「せせこましい」ものとは違ふ。精密に分析
せられたる音律を精確に表はし得ることは樂器の要件には相違ないが
同じ音を表はすにも宏壯にして餘裕があり或は聞く者をして雄心勃勃

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

正月後と年末

相撲

九八一

連繩を張り、清菰を敷き、神の棧敷とす。行司此所にかしづき居て、相撲取一人宛に黄色の幣を頂戴させ、土俵へ出す。左右とも儀式これに同じ。此の日は一式神事なり。二番合す相撲を、俗に神相撲といふ。是手向なり。本式の儀式は至てむづかしきことにて、近來は次第に略式をもちゆるやうに成たり」とある。然し地取禮式も單純なるお儀式のみでなかつたことは、相撲今昔物語一に「紀州に云、御前相撲の地取を見物したる老人の咄に、云云、刎合ひ、踏張り、ちから聲、すさまじき事なりといへり」とあるにて想像せらる。人の玩弄物になる爲に、又は金儲の爲に取る「すまひ」では困る。さうでないなら地取の禮式をも昔の様にしつかりやつて貰ひたい。

尙ほ中に立てる幣帛につきては、古今相撲大全下に「中に立る幣帛は、土の色を標し、黄色を用ゆるを故實とす。則高野川原にて興行の時節まで、かくのごとくの黄なる幣を用ひたるに、その已來神道によりて白幣になりたり。今なほかくのごとし」と書かれたり。思ふに復古なるべし。

式、土俵の

開くとは産
靈の義に歸
す。

土俵入。

き合ふて拍手し、各双手の掌を開いて見せ、又土俵の土を捻る。一土を踏んだら土を捻るのは「すまひ」するにつき、土俵自身と歸一し、大宇宙を表現する。土俵夫自身より生を抜いたものになる。二拍手するは力士が各其對手と競技することを條件として、神に合一せんとするのである。三而して掌を開くは、正大に産靈の働を實現せんとする心持(大生命の開展)を示す。開き、午旁末廣、「ひろめ」熨斗等参照。又公明正大なる心持を見するものである。「凶器を携へざるを示す」などとは甚だ卑近の述べ方である。

土俵入 横綱の土俵入の式は、土俵の中央に在る行司に禮し、然る後正面に向ひ拍手すること二度、足踏みすること三度。其の説明に曰く、拍手兩度は、乾坤陰陽和順を標し、足踏み三度は、天地人の三才、智仁勇の三徳を標し、以上合せて五つ、五行五常を標すと。然し夫でも宜いが、産靈には少くも必ず積極消極の兩方面を要すること。高皇産靈神と 神皇産靈神との御二柱あらせられ、伊邪那岐神と 伊邪那美神との御二柱あらせらるるが如し、

されば古神道では少くも兩度拍手する。足踏み三度は高天原、豊葦原及根之國の三つの世界を踏むものである。五行五常等は支那特有の形式である、どちらでもよい。

相撲と眞面目及氣合 相撲を取るには昔は小生命などは投げ出してかかつて居る、従ふて大生命に歸一し、随分思ひ切つて荒業を致したことが相撲傳書等によると分かる。後世追追和らかになつたが氣合の如きは特に重んじて居つた。神ながら言舉せぬ皇國に於ては眞面目を根柢として氣合を以て相交通し相制御することとなつて居る。理窟の形式も大切にすることが、理窟は氣合により始めて運用せられ眞面目により其の生命を獲得するものである。されば相撲にも、少くも四十八手あり細か手と申せば百何十手と申せば百ある。種種理窟もあらうが眞面目になつて居る上に氣合を以て技術を用して行くことを尊ぶ。して見ると今日の様に計算主義知識主義の横行して居る時代に尙ほ相撲の盛なること假令娛樂の道具と申せらば實以て結構なることである。

相撲にては眞面目により土俵と大宇宙と一つになり力士と土俵とも亦一つになり力士と力士とも亦歸一しつゝ相對立する、即ち表現對立關係に立つ。此の眞面目は氣合により働きとなつて現はるが氣が全體に充つるときは心神と身體と一つになり心と掛聲と業とも亦一つになる。是が膝なり指の尖きなりを突ても負けとなる所以である。唯膝や指を突いた位で負けになるのではなく、結局敵を制服し終り彼をして如何ともする能はざらしむるに至らねばならぬが氣一杯に満ちて居るが故に、指や膝を全體の表現と看做すのである。そこで指一本でも勝負が定まる。尙ほ氣合のことにつきては、甲子夜話十一に「寛政上覽の度、谷風棍之助西の關なり、小野川喜三郎東の關なり、何れも横綱を免されし無雙の男にて、其頃世に鳴し關取の此度上覽のこと故、諸人眼をつけ居たりしが、立合ふとき、谷風「ヤッ」と言て立つと、小野川「マッタ」と云て不立、行司即ち勝相撲、谷風とて、西方に扇を揚たり、諸人皆不審に思ひ、谷風は思はず面目を得しが、小野川は心得ぬことに思ひ、退き出て行司に其仕方を尋たるに、行司答るは、全體相撲は其氣の勇

氣の負け。

行司と氣合の出會。

氣合は電光石火の起る如し。

を尙ぶ。ヤツと言ふに、マツタと受るは氣に勇なし。是を「氣の負」と謂ふ。常の勸進場などは、雜人の視る處なり。上覽の場に於て、如斯き所作會てなきことなりと判したれば、流石の小野川一言もなく、閉口赤面せしとなり」とある。此の勝負につきては將軍よりも其の理由御尋ねあり、行司吉田善左衛門は相撲上覽記によれば左の通りの書付を差し出して居る。

吉田善左衛門へ御尋之儀に付申上候書付寫

谷風小野川勝負最初行司合せ聲を掛不申候内取結候に付勝負付不申候尙又雙方氣合を見合行司聲を掛候處小野川殊の外油斷之様子にて取結び不申候間其儘勝負付申候右者任古例相撲油斷之事に付小野川負に取計申候以上

細川越中守家來

六月十一日

吉田善左衛門

甲子夜話六十二に「近頃はみな下に居て取かかる也去ればこの下に居て取るより角力の心きたなくなり幾度幾度もまだまだと立合はざる者多

賞與。

弓矢八幡。

御幣を授く。

其の後に横柄など支那風の字に改めた。

行司。

今日でも茶屋の男衆までが袴をばいて居る。

し」と申して居る。

賞與 結びの勝者には賞與する。大關には弓を取らしめ、關脇には弓弦を與へ、小結には扇をやる。弓と弦(追進のしるし)のことは織田信長の頃より定まりしといひ、扇(末廣)は其の後なりと申す。其の以前には御幣を授與せしものである。大相撲評判記上には「いにしへ未だ弓取の式なき時代には、結の相撲に勝たる關取に、此の幣束を與ふる故實なり、されば曠の相撲にかちて幣をとりたる力士、誇かに幣を振かけて退く、是を「黄幣ふる」といふ、其の詞残りて、今の世まで驕たかぶる者を、黄幣なりともいふなり、然るに後年神道により、白紙にて作るやうになりたり」と申してあります。今日のこととは之を略する。

行司 元は相撲の節會を奉行した者であるから此の名稱がある。今日では相撲の禮式故實に關することを掌るが、主として力士を立合せ、其の勝負を判定する役をする者となつた。其の装として假初の風などしては居らぬ。(昔は侍烏帽子素袍を着、軍配團扇を持ちしが、其の後種種に變遷し最

行司の服装は古神道の流儀に清素であるも重みのあるては如何しても入卦よいやぞとは易しい

今日の観客が誠に行儀

相撲の國技たるは古神道の根柢の上存し益之を發揚するものなればなり

剣道柔道の催しの時、信仰の反省の擲してある

近の今日では風折烏帽子、鎧下直垂、腰紐白綾となつた。力士が各、大生命の表現者として行動するのも、先づ表現者たる行司を中心として可能である。されば横綱も行司の本来吉田追風より抜群の大關に經ふことを許すこととなつて居り、又横綱土俵入の節も、力士は先づ行司に禮して後に拍手や足踏を致す。此の行司は官廳表現普遍人の如く昔から代續いて一人となつて居る、私人ではない、相撲界の表現人である。加行司の家は増而して此の行司が公平に力士を立合せ、公平に勝負を判定するに當り、手に離さぬものは古は御幣であつたが、其の後軍配團扇を用ひ、往々采配相撲式をも用ひたことがあつた。御幣を用ひたることは最も面白く、今日でも神相撲には斯様致すのである。

行司は先づ自ら表現人となつて、之により力士全體を表現人化することを職司とする。(行司は相撲の和魂を司り、力士は和魂を根柢とせる荒魂を分擔する表現人である。然るに聞く所によれば、今日は行司の勢力が地に落ち、力士中威勢よき者が其の私を主張して如何ともすることが出来ぬと

申すことである。之は社會の人士が相撲の本質を忘れ、之を玩弄物視するから、行司等を眼中に置かず、強い力士などに最負する結果でもあらうが、又信仰の結晶たり、眞面目の保持者たる行司が『敬神愛國尊皇』の誠心無く、理想と信念とを以て、力士を率ゐることの出来る人格を養ふて居らぬからである。同じ行司の家の子孫が先人より無能なる筈はないが、理想信仰の厚きこと、廣きこと、美しきことは到底之を既往と比較することが出来ぬ。理想信仰は之を角力界にまで盛にせねばならぬ。行司や角力者は「すまひ」によりて、観客を救済し、其の理想信仰を鍛練してやる者とまでならねばならず。夫につきては、行司が終始其の先驅とならねばならぬ。

いや此の事は「すまふ」よりも更に眞面目であるべき、學校や議會や官廳などについて、申さねばならぬことである。學校に於ける陸上運動會や、ボートレースなどに於ては、徒らに外來の物質主義、感覺主義、個人主義を振り廻すのみで、精神上の深みを反省する方式などは一つもない。是等は遊戯じやといふかも知れぬが、教授上の事につきては、全く個人の利益の計

算や各人の智識を授受する寄せ席の様なものであり、偶、勅語奉讀などを致しましても信仰などは全く留守で、信仰や理想を反省する方式に至つては到底相撲場にも及ばぬ。行司に理想が無いの信仰が缺けて居ると申すが、幾萬千の生徒を養成する中心になる教育家自身にも、此の理想信仰の缺けて居る者が中中多い。政治の方面に於ても同様で、人民の先覺者となつて是等を率ゐつつ向上すべき政治家、是等の政治家を統べて行くべき頭領すら、孰れも大人物であり、有ゆる方面の知識も有し、萬般の技能に長じて居るのであらうが、夫れ丈け甚しく理想や信仰には缺乏して居る。天下の人民が現今の政治家にあきたらぬのは、全く彼等が理想信仰を有せず、徒らに個人主義、目先主義、感覺主義、物質主義を振廻すからである。行司よりも先づ教育家、政治家自身が古今東西に鑑みて己を反省せねばならぬ。有り難くも、皇國の民と生れ來り、大日本の飯を喰ふて居り、天皇の御光りの下に生活し乍ら、此の様な事では決して外國の模範とはなれぬ。

三 お能 お能即ち能樂を見ましても、さすが、お能樂から轉化し來つたもの

だけあつて、必ず先づ神を反省し之に歸一し、其の土臺の上に諸種の樂曲を行ふことになつて居る。そこで單純の慰み物ではなく、昔は式樂として武士等の教育に必要なものとなつて居つたものである。戯事では之を眞面目反省の手段と致して居つたことは、今日の眞面目の事柄さへ冗談半分に取扱ふて居ると比較すれば、如何にも反對であつて面白く思はれる。眞面目をただ古臭いなどと思はずに、彌之を磨くことを考へては如何であるか。

第一 能の起原 神代の昔、天宇受賣命が天石屋戸の前にて神懸りして、表

歸一の域に之より發する行動により、八百萬神を咲はしめられ、天照大御神をもお招き出しになり、是等の神神をして一口同音に「天つ晴れ」「あな面白」「あな手伸し」「あな明け」と歌はしめた。(單純なる實證的の歴史的事實としていふのではない、古神道の永遠不滅なる理想信仰としていふのである。此の時の積極的なる晴晴しき心持は、後に豊葦原の中、國の萬般の生活を定め、上は天つ晴れなる皇國體を確定し、下は面白き風俗習慣を發生せしめた。能の如きものも此の間に起つたものである。

晴しき心
持の發露な

神懸り。

平安朝の頃にも神社の祭に猿樂を奏することと見ゆ。鎌倉時代に猿樂と並んで行はれたり。

神能時代。

能は、天宇受賣命の遊ばされたお神樂の正系たる神樂より轉化し之に俗生活の趣味を加へ、往往諧謔をなして神様や人人の顎を解かしめた。神人上下、人面白く笑つて萬難を引き受けることを國是とし、此の心持により、千差萬別の生活や心持を統へ括つて行く。此の目的の爲に、聖徳太子が皇命を受けて秦川勝と申す樂人に此の種の俗樂を起さしめしものであるといふ。(尤も、聖徳太子や秦川勝のことにつきては異説もある、假りに譲歩した所で、少くも平安朝の頃には「滑稽と諷刺とを加味し人人の眞面目を喚起する俗樂」が起り、神前にて之を演奏せしめたことは確かである。宮中内侍所の御神樂に之を行はしめたことすらある。然るに鎌倉末よりは、此の生き生きせる俗神樂が益々發達し、人を笑はすやうの事は狂言となり、人生の眞趣を奏する方面が、田樂の能は田樂は田植の節に歌ひ舞ひ、一となしたものであり、元は田植をも攝取し、其の内容を豊富にし、其の形式を整頓して能となつた。に漸次移り、其の發達の各段階を釋ぬるに、第一期は神能時代で、此の頃に於ては神

徳川幕府の時金剛より分れて喜多を生ず。

祝言能時代。

社に奉仕し、其の祭典に與かることを職とせし神職により發達せしめられた。従ふて其の樂曲の内容は、神と人とが互に双方より打ち解けて相融通し相合一することを其の骨子と致して居る。神様は常に寶祚の長久國家の進取及人民の繁榮を志し給へども、我我も亦神徳を稱讚し、神代ながらの理想を益々實現せんことを期し、何を措いても先づ皇室の御高德を祝ふことを主と致して居つた。即ち古神道の信仰が眼目である。是等樂師の家家は、大和(奈良)に外山とやま後の寶生結崎ゆづき(後の觀世)坂戸さか後の金剛圓滿ま井い後の今春の四座在りて、春日神社に奉仕し、近江には山階下坂、比叡の三座ありて、日吉神社に奉仕し、河内には新座が在り、丹波には本座が在り、攝津には法成寺が在りて、共に賀茂神社及住吉神社に奉仕し、伊勢には、和屋勝田、主門の三座が在りて、大神宮に奉仕致して居つた。

第二期は祝言能時代で、一方には、益々俗事に接近し、他方には、頻りに個人主義、福利主義を加味し來り、七福神の神能の如く隨神の理想の實現を期する替りに、君民主從各個の幸福長生利益を祈るやうな趣味を帯び來り、總じて

神樂は其の各名曲の中に存す。神子(みこ)の舞(まひ)は女(め)の舞(まひ)と稱(な)す。神樂(かみ)は神(かみ)の現(ま)れ舞(まひ)ひ給(たま)ふを神(かみ)舞(まひ)といふ。内容も豊富となり、形式も一新す。然(しか)し個人(こじん)的(てき)の消(しょう)滅(めつ)的(てき)の加(か)はる。子(こ)が多(おほ)大(おほ)に現(ま)はる。幽(ゆう)靈(れい)能(ね)の時代(じだい)。

て神社の御祭事に用ふる歌舞より轉じて室町將軍家の式樂となつた。能の文句が著しく佛敎趣味に支配され、其の下に大に發達したのも此の頃よりである。斯く能が神事より脱逸したのは決して神能の精神を捨てたわけではなかつたから、反つて其の大精神を基礎とし、異分子を採納して自由發達を爲し得ることとなつた。應永の頃に、足利義滿の後援により、結崎次郎清次(觀阿彌)一世、其の子左衛門大夫元清世阿彌二世が、是迄の能を一新せしめ、謠ひ方、舞ひ方、晰し方を整頓せしは此の時代であつた。

第三期 『天つ晴れ』『あな面白』『あな手伸し』『あな明け』といふ 皇國

人の心持は能を借りて、舞樂に於ては先づ品よく、神をすずしめ奉り、人を清め、神を咲はせ奉り、人をして抱腹せしめ、是により四海皆一つの『天つ晴れの心地』を彌發揚し來つた(第一段の心持)。此の基礎の上に、次ぎには各個人の幸福長生を樂み祝ふたが(第二段の心持)。追進んで生死を考へ込んだり、來世のことを考へたりして、幽冥界のことに趣味を感じ來り、能も徒らに晴晴しい一方のみでなく、此日向に對して日蔭を持ち込み、日向の配合

現世能。

革命又は打破を精神とせず。

をいて喜ぶこととなつた。愈晴晴しい心持を胸突きして固めた以上は、反つて正反對に死を考へ、死を工風して置くことが、愈以て生を擴張し、益晴晴しさを増す所以である。そこで能の第三期は幽靈能の時代である。佛敎の精神並に形式が、大乘の方面も小乗の方面も、積極的要素も消極的要素も曲の文句や精神の上に採用せられ、之が一時は此の頃の人人の氣分を満足せしめたが、餘り消極的に傾き過ぎたるが故に、直ちに轉じて、次の

第四期に移つた。第四期は現世能の時代で、現國に於ける生活を寫出し、人情の機微を叙述した。然し前期迄の各曲と離れたるものでなく、皆之を糸口として生死を諦らめしめ、やがて個人を悟に誘導せしめ、遂に隨神の神人合一の本元に參らしめんとするものである。

斯様にして能も時代により種種の方面に異つて發達はしたが、新作が決して舊作を破壊したり驅逐したりせず、相待ち相補ふて愈其の美しさを増し、時代と共に愈其の内容を豊富ならしめた。之と同時に能と雖も相撲の如く古神道の大神が土臺となつて居ることも動かぬ。能の文句は如何

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 正月後と年末 お能 九九八
にも佛教僧侶及佛學者の手に成つた者が多く、佛教思想を採用しないものは殆んどない。夫にも拘はらず、是は言ひまわしの形式の末のみで、其の骨髓に至つては尙ほ古神道の心持である。古神道の運用を佛教の形式により致して居るに過ぎぬ。勿論作文者により潤飾にも相異があり、各曲を離れ離れに見れば、古神道に對し佛法の優先を書き綴つた様のもも随分あるが、能全體を運用して行く上から見れば、各曲孤立して役をするのではな

いから、各曲を如何に運用するかが最も大切のことである、各曲及び其の技藝等は末のものである結局、『古神道を中軸となし、其の周圍を回轉し、つあること』を争ふわけに參らぬ。尙ほ能の起原につきては古書に記載してある儘の所も反つて面白いから參考として次に掲載致してをく。

花傳書一 夫申樂延年のことわざ、其の源を尋るに、この國にはじまるところは、地神五代 天照御神の御時に、天の岩戸の神遊し給ひし時、八百萬の神たち、高天原に集り給ひ、此の曲を作り御はじめあつて、岩戸の前にて神樂といふ事を奏し給ふ、其の神樂成就して、天照皇大神宮岩戸を出

給ひ、日本明らかになるより此の方今に此の曲繁昌也、されば目出度曲なればとて其の風をつたへ學ぶといへ共、代へだたりぬれば、其の風を學ぶ事及び難し、神樂管弦は役者あまたなれば、諸人もて遊ぶ事なりがたし、近代あまたの役者を略し、鳴物のしやうかをかぞへ、能といふ事を作り初也、其みなかみを尋ぬるに、御門より、秦川勝に仰て、天安全の爲、又は、萬人快樂の爲に、おもしるき曲をつくり候へとありしかば、川勝承て其のとき『三十三番の能』を作りはじむる也、然共今のやうなる能の心もなく、和歌を上ただ打はやして、一曲一かなで一座の遊びまでにてありつるを、中比天下に竹田はつとりとて、兩人曲の名人ありつるが此の曲を再興し、其の時彼兩人『六十六番の能』を作り、色色の曲をそへたる也、今に『かずの能』と申は是也、竹田は今春大夫なり、はつとりは當家世の源なり、されば神代のまなび、はやしはかつら男のよそほひをにせ、うたひは神歌を表せり、然に神事に能をすと云も此儀也、

金春禪風
(又善風)元

觀世小次郎
信光

觀世彌次郎
長俊

風委花傳としるせり、應永七年三〇六。卯月、從五位下左衛門大夫觀世泰元清が序に云、中凡わかき年より此の方見聞の稽古の及ぶところの條條、大概記し申を、いとこゝろなり、按ずるに、貞徳が慰草に云、近き代の歌など書て、奥にふるき歌人の作としるしたる歌書など多く侍り、また猿樂の秘書とて、花傳書抄といふものを、ある人天満の下間法印に見せければ、これは偽書也、金春禪風が奥書有て中に遊行柳の能の事をかけり、此の謠は觀世彌二郎とて、近き世の者の作りたる能なりといはれし、よろづ疑はしき物の本を取扱はん人は、其の作者の時代を、先よく考へ然るべきことなり云云、又按ずるに、能作者を記せる書に、觀世小次郎が作三十二番の中に遊行柳ありて、次に彌二郎が作二十五番をしるせり、其の書の奥書に云、右能本作者事、依安藤典範御所望、調進之、觀世彌次郎長俊連直談時、物語申趣所、注置如斯、又此上猶可被開召合者也、于時大永四年二八四甲申孟夏上旬、吉田藏人兼將在判、此奥書を以て考ふるに、觀世彌次郎大永以前の人なれば、その一代前の小次郎が作の遊行柳の事も、傳書に入まじきものにあらず、彼下間法印の臆斷によりて、強て偽書と定めん事は、おぼつかなし。

小次郎とは觀世三世元重(音阿彌)と號す、元清の養子(の三男)であつて、四世觀世政盛の門人である。

其の他能の起りにつきては、翰林蒞集六に「秦河勝者、化生乎人王三十代欽明天皇之御宇者也、天皇一夕夢有神童言曰、我是秦始皇之後身也、以

有緣生於日域、請爲臣矣、時大和州有洪水之變、初瀬川大漲、有大甕流來、止于三輪明神廟前、土人開之視、則有一男子、身體如玉、土人奏之、天皇曰、所夢見者此人也、舉美之、賜姓曰秦氏、其才智與年相長、至十五歲、授大臣位、而奉五朝以至推古女王之時、豐聰太子監國、祭祀天神地祇、以布安國利民之政、因作六十六番之面、命河勝弄假貌、眞遂於橋內裡紫宸殿前、令作此伎、由是四海波穩、萬民康樂也、太子以其神樂析神字、名之曰申樂、說文云、申亦神也、大歲在申、以猿配之、故後世稱之曰猿樂、以爲孫供奉之類也、錯矣、河勝遂入攝津州、遊難波浦、乘一小舟、任風之所行、而舟浮西海、著播磨岸、土人聚觀、其形非常之人、靈威可畏矣、共謀立神祠祭之、曰大荒明神、其後人王六十二代村上天皇萬機之暇、觀覽太子所筆申樂延年記、告群臣曰、上敬諸神、下安庶民、莫過於申樂、即河勝遠孫秦氏安重興此伎、又有紀氏某、爲氏安女弟之婿、故二人共俱起之、日日舞之於大内殿前、天皇以六十六番事繁、而一日難徹、故抽其事爲三番、稻積翁代積翁父丞是也、自此傳之、至氏安二十九世之孫、是號金春、大和州圓滿井之座是也、太子所親作之鬼面、秘在此座、於是大和州有四座、外山、結崎、坂戸、圓滿井是

へり、散樂は周禮より見えて、鄭注に野人爲樂之善者、若今黃門倡といへり、散樂を「さるがく」とよむは、駿河を「するが」とよむに同じと、秦廣貞が歌舞同異抄にも見えたりとぞ、中略本樂は衣冠束帶也、猿樂は烏帽子直垂也、禁裏には本樂を用ゐ、武家には猿樂を翫ばるるを恒例とす、細川入道常久おきて定められし也といへり』又貞丈雜記二には、

『一猿樂又申樂とも書也、中略猿樂と名付る事、眞の智慧にあらざるを猿智恵と云、眞の蜻蛉にあらざるを猿蜻蛉といふ如く、眞の樂にあらざるゆゑ猿樂といふ也、一説に、山王の猿が舞ひ始し故猿樂と云、又神樂の代りに神前にて舞事あるゆゑ、神と云字のつくりを取て、申樂と云などといふ兩説は誠としがたし、用ゐるにたらず』又

『一猿樂と云は、散樂の轉語也、さんがくをさるがくといひ違へたる也、散樂とは正樂にあらざるを云也、三代實錄に内藏富繼長尾米繼伎善散樂、令人大咲とみえたり、古の猿樂は人を笑はする事を其の藝とする也、今の狂言師は古の猿樂の本體を藝とする也、今の能と云ふ物は、既に鎌倉の末

の代頃より始る歟、大森彦七が能興行の東山殿の比より彌盛になりて、古の猿樂の風變じたり、古の猿樂は人を笑はす』とある。

實用的の理
由もあるが、
根本は信仰
より来る

第三目 能の番組 一日の中に奏する各舞曲を其所に應じて用ふるやう配合致すものが能の番組である。番組により各曲が其の分擔を通じて全一日の能の精神を表現することになる。番とは元、舞樂の左方たる唐樂と、右方たる高麗樂と二曲宛を組合せ之を番の舞と申したるよりされば番組の作り方が極めて大切であつて、むづかしく、之に關しては古來不動の規則がある。第一番組には常に神能を致す。必ず神能により能が開始せられる。此の所は古神道の和魂を神様により開示することを中心と致す。第二番組には修羅もので必ず荒魂を現國の生活を借りて現はさしむる。和魂はただ和魂のみに拘泥して存するもので無いから、其の運用に缺くべからざる荒魂を反省せしむるのである。既に和魂及從たる荒魂在り、是に於て第三番組には豎物と稱して女物を演奏する。卑近なる人生生活の花を叙述し、性愛主義、其の他をも排斥せず、是等をも包容し、是等を材料として、現國人情の微細なる所を示す。第四番組には根之國眠の

國○的○の○存○在○を○幽○靈○や○鬼○や○精○靈○等○を○通○し○て○示○し○。第五番目には以上の諸要素を包容せる表現的人生を活躍せしむ。終りに第六番目には一日の結末として祝言を述べ、人生を通して愈神ながらの理想を實現し、現國の彌榮ゆることを期するのである。然し今日は第四番目と第五番目とを併せて番數を省き、従ふて是等の番に當る曲が多多存するから、其等の内から祝言の心持のある曲を選んで留め、最終の番にも用ふる様であります。今番組の義につき、能樂界の珍書花傳書を見るに左の通り記してある。

『能くみの事、一日に六番なり、子細は抑此國を六十六にわる事、役行者行基菩薩國國の水を飲みわけ給ひ候へば、六十六色これあり、かるが故に人の心も、國國にかはり、聲言葉なまり以下まで、別にわかつかつ事、右の水のかはりめの子細也、この國も六十六能の始まる所も六十六番なれば、其數を表して、一日に一は六の誤番に、定むる也、

一 一番に祝言をする事、神能に定まりたり、祝言にてあらば、なに能にてもあれ、是あるべき儀なれども、神能にさだめ候事は、子細あり、日本は神國

なり、神代よりつたはる國なれば、今人王の御代に至るまで、我朝の守護神たり、かるがゆゑに、其日祈禱として、神を勸請するといふ心によつて、一番に神能なり。

一 二番に修羅をする事、抑此國は弓矢をもつてあくまをたいらげ、さまるくになればとて、あくまかうふくのために、修羅を用ゐる也。

一 三番にかつらをする事、みな人ごとにかつらにてさへあれば、何なりともと心得候事、是ほほきなるひが事なり、かつらは幽玄のかつら本也、其故は一番に神代のはじめをうけ、二番にあくまかうふくの修羅を引、三番には加様に國おさまり、天下泰平の御時は、ことごとくゆうげんなり、かるがゆゑに三番に幽玄をさだむ、幽玄いろいろあり、男の幽玄もあり、さまたまの幽玄ありといへ共、女能にさだむる事、二番の修羅おとこのふなれば、陰陽和合と取あはせ、三番にかづらなり、そのうへ世治まり、泰平の御代には、色にそみ香にめで、幽玄つもりて戀慕のみちになるゆへなり、かるがゆへに世間の有様をまなびたるものなれば、戀慕幽玄の鬘をするなり。

一 四番に鬼能を定むる事、是も鬼なればとて、ただの鬼のふにあらざ、冥土の鬼を本とす、其子細は此まへの能ゆうげんのかつら也、脇能に神祇を學び、二番に惡魔降服の修羅、かくのごとく代を始めて、榮花さかんにてもあれ、人間の一期は一睡の夢、電光朝露いしの火幻の間の世なれば、樂みも頼まれず、只菩提心の心をとおし、後世を願はん事本意なり、然るに依て今日は何れどもあすを期せざる、浮世なれば、因果報いの冥土の姿をあらはし、樂み榮花も菩提のたよりに、ならざるの心を知らせんとの儀によつて、四番に冥土の鬼をするなり、または漸くなかばも過ぎぬれば、四番目の時分は、諸人も眠ふる比なれば、一つは萬人の眠りをも覺まし、氣をもつけん爲に、一座のうちにかたがたもつて鬼をもちゆる也、これ能組の秘事也、斯の如く面白き遊の中にも、後の世の體を此世にてつくりし罪咎にひかれて、夫々の罪に苦をうくる體を見て、後世を思ひ出し候へば、我人の發心をおこし候へば、佛法も能にあり、説法の場にまいるも同前なり、さるによつて謠を無盡經といふも此儀なり。

一 五番に義理を定むる事、世間は仁義禮智信の五常をそむかずして、ざりを本とする事本意なり、右一番より神の部と定め、二番に修羅を定め、三番にかづらを定め、四番に鬼を定む、冥途の有様をあらはすこと、義理をあらはす、五常にはづれたるものはかくの如く成行くと、の理も、義理を思はんが爲なり、然るによつて五番に義理を定むるなり。

一 六番に祝言を復する事、これは一座のおさめなれば、君を祝ひ、身を祝ひ、所を祝ひ、花は春過ぎつれども、また立ちかへり、春來ぬれば、過ぎにし春の如くには、な咲き榮ふると、夫を表し、咲きかへりぬる春に、又逢ふと、樂しみを祝ひ、重ねておさめ、六番にはじめ有つる祝言をまたする也。

右如此一日の能に、有りと有らゆる世間の有様を悉くあらはし、萬民に之を見する能なれば、何として智慧なき者の、斯様の事を知らんや、能組の條條如此、さりながら、これは初日の能組也、二日目より又かへ候ても、苦しからず、かくかぐらなどを入番かずあるべし、前日の能に似たる能をせぬなり。」

斯様に神能を根柢として、順次に、生活の有ゆる方面、諸種の實在を舞樂に現はし、或は自由、觀念的のものもあり、打會我など夜或は汎神論的のものもあり、或は超俗的のものもあれば、或は現世的のものもあり、神も佛も人も物も、靈魂も形體も交、其の内に含まれて居る。是等のものを「調和したる一日の所作」に現はす古今一貫の規則が誠に面白くないか。そこで神能として第一番目に置かれてあるもの、修羅もの、合戦のもの、鬘もの、の一端を、諸諸流名寄等を参照して例示すれば次のやうである。

初番(脇能) 神能

- 高砂 老松、加茂 難波 氷室 養老 右近 吳服
- 志賀 竹生島 弓八幡 和布刈 嵐山 鶴龜 西王母 岩船
- 金札 繪馬 松尾 等等
- 二番目 修羅もの
- 田村 清經 忠度 兼平 八島 頼政 經政 敦盛
- 巖 巴 生田敦盛、俊成忠度、實盛 通盛 朝長四番等等

三番目 鬘もの

- 熊野 松風 千手 楊貴妃 井筒 杜若 江口 采女
- 芭蕉 東北 源氏供養、野野宮 藤 半部 吉野靜 六浦
- 羽衣留め 祇王 誓願寺 等等

然るに近くは一日演能の番數が大概五番と定まつて居る。そこで四番目以下は中錯雜し、五番目の曲の最後の文句が「芽出たけれ」とか「久しけれ」とかで終つて居らぬときは、嚴格にすれば、附祝言とて祝の一節を謠ふ定まりである。今次に寶生流の四番目五番目を推測して掲げて置く。

四番目

- 鉢木 班女 玉葛三番 柏崎 葵上
- 三井寺 梅枝 藤戸留め 黒塚 紅葉狩
- 櫻川 蟬丸 東岸居士 隅田川 善知鳥留め
- 花筐 山姥 富士太鼓 通小町三番 雲林院三番
- 望月二番 錦木 弱法師三番 道成寺 唐船留め

寶生の家元
で公けに
せぬから
せぬこと
が知らぬ
來ぬ

百萬 自然居士 籠太鼓 大江山二番 高野物狂三番
 邯鄲 野守留め 砧三番 車僧留め 俊寛二番
 歌占 夜打會我二番 放下僧 松虫 竹雪
 雲雀山三番 鳥追 鷺留め 大會留め 綾鼓三番
 小督 滿仲 鐵輪 照君三番 花月
 調伏會我留め 三笑 谷行留め 正尊二番 烏帽子折留め
 張良留め 咸陽宮初番 芦荊 飛雲留め 加茂物狂三番
 小袖會我二番 大蛇初番 羅生門二番 春日龍神初番
 蟻通初番 三輪初番 熊坂二番 朝長二番
 鶴二番 是界二番 殺生石二番 檀風二番 鞍馬天狗二番
 女郎花二番 七騎落二番 禪師會我二番 藤榮二番 土蜘蛛二番
 錦戸二番 船橋二番 景清二番 安宅二番 攝待三番
 雨月初番 卷絹三番 西行櫻三番 木賊三番
 五番目(留め)

皇帝初番 海人四番 鶺鴒 船辨慶 阿漕四番
 融 小鹽四番 天鼓四番 國栖初番 小鍛冶初番
 舍利四番 來殿 須磨源氏四番 絃上 鍾馗四番
 猩猩 亂 石橋四番 羽衣三番 當麻三番

尤も番組の定まるには他に所作の都合なども参照することは勿論のことである。難波江六には「上能は先五番を一日の定めとするなり、公邊は何時も五番なり、狂言二番あり、謡曲の書も、五番を一冊とする、この意あるなるべし、其五番も彼と此と組合せて、一日に興行するに便りよきやうにしたり、されど、其書初の程は、宜しけれど、末になりては、入り亂れたるもありとぞ、たとへば、一冊の第一は「ワキ能」二番は「カケリ」か「はたらき」か、三番は上の舞か中の舞か、四番は「ハヤマヒ」か「神樂」か、五番は「祝言」半分す、或は一番全ありて「附祝言」として、別に祝言を付くるものあり、但しうたひばかり也」とある。

第四目 謡初式及正月の番組 管に一日の番組のみでなく、一年に付ても、四季

の節により月に従ひ色色と異なつて居る。特に正月には武家時代には幕府に『謠初の式』があつて、特に神能を選び謠ひ又囃子等をなしたもので、徳川氏の頃には『四海波』高砂の中の小謠と老松、東北、高砂の囃子三番を行ひしといふ。又其際の舞には『弓矢の立合』とて古神道の追進の心持を以て其の理想を實現する趣を形式に現はさしめた。其の文句等は彼も是も排斥せずして之を隨神の大精神により統括し、其の内に包容せしめつつある所が見所である。朱子學等を採用して政治を行はんとせし徳川氏も、矢張り自ら古神道に支配されつつありしことは面白い。

其の他一年中の能の眞つばじめに於ては必ず『翁の曲』を勤めたもので、今日でも其の通り致して居る。『翁』は最も古き曲として能家の秘事となつて居り、天照大御神が天の石屋戸より出で給ふて『天つ晴れ。あな面白。あな手伸し。あな明け』の生活が確定する初めを舞ふものであると申すことである。然して翁に次ぎて必ず高砂とか、弓八幡、養老難波のやうな神能を奏し、此の心持により一年中の能をすることになつて居る。今

桑か蓬と
かは支那の
古事を用ふ。

尙ほ是等のことを少しく説明致さうと思ひます。

い 弓箭立合 此の舞の文句は九祝舞に

『剛下桑の弓、蓬の矢の功は、同まことに芽出たかりけり、あら有がたや有がたや、いざやわれらも大來目の命にいのりてな、ゆみはり月のやさしくも雲の上まで名をあぐる、弓矢の家を守らん守らん、上ノラズ武士のやそ宇治川のながれまで、同水上清しや弓張の月、あはれめでたかりける、治る御代の時とかや、上ノル釋尊は釋尊は同大悲の弓に、智慧の矢をつまよつて、三どくの眠を驚し、愛染明王は弓矢をもつて、陰陽の姿を顯せり、されば五大明王の文珠は、やうゆうと現じて、積首蛇を取て弓を作り、眼睛を化さしめて、矢となせり、又我朝の神功皇后は、せいとの逆臣を退け、民堯舜の榮えなり、應神天皇八幡大菩薩水上清き石清水ながれの末こそ久しけれ』とある。古神道の積極的精神、荒魂をも具備し、つつ之を和魂實現の具となし、個人等に拘泥せず、普遍我的向上を期し、表現人として進取して已まざることは、此の文句中にも充分に見えて居る。

世界や人
を始めて
起るもの
の記録を
無いたる
みである

發達完成
しものが
か原初が
の離れか
が誠か

神代の言
ひを偶意
して舞ひ
多るは多
ること多
ある

ろ 翁 一年中のお能の眞先きに舞はるるものは『翁』である。此の曲は古來特に神聖神秘なるものと申し傳へられて居り、之を舞ふ者は別火、潔齋し、即ち禊をなし、神懸りして、表現歸一の域に入つて致すのである。其の作は神能中最も古きもので、或は猿樂以前より傳はり來つた部分も入つて居るかも知れぬ。其の位であるから、其の舞の精神につきても、記録類の證據と申すべきものもなく、之に關する解説は大概四五百年此の方のものである。従ふて『翁』を観察するには、一方には能の精神の根本より致さねばならぬし、又他方には能となつて整頓致した後にも如何なる地位を占め、如何なる意味に於て、人人の神聖なる心持を養ひ來りしかの歴史を無視してはならぬ。假りに最も初めには、格別意味のない形式を資料として曲が出來上つたにせよ、能の發達につけ次第に之を改造し、建國の大理想と結び付け、最早之と離れぬ様になれば、之を心得て厥の善を長ぜねばなるまい。況して後に意味を付け加へたといふ證據も無い以上は、無暗に其の意義を損する様のことを致すべきものでない。然るに實證論主義の人人は證據

が無いと常に之を卑近淺薄無意味のものとして看做しつつ、偶然に見せる岩細の證據を盾として、根據無き建物を組み立つて行く、是は明治時代には特に多かつた所である。其の様な證據よりも『翁』が如何にして是まで人心をつなぎ來りしかといふ根柢を探つて見ねばならぬ。能の確定と共に何が『翁』の生命となつてしまつたかを反省せねばならぬ。

イ 猿樂は元滑稽をも致したが、神樂から轉化したものである。従つて高天原の神遊と關係を以て考へられ來つたことも怪むには足らず、又最も古く最も神聖なる曲とせらるる以上は、其の中に隨神の信仰を包藏することも斯かるものとして解釋せらるることも當然のことである。始めには秘中の秘曲として書き記されざりしものが、遂には書き付けられたものであらう。例へば猿樂傳記上の舊名倭樂傳記といふ、享保二、三、七、六、元文二、三、九、六には『翁渡しの根元は、日本開闢の時、日の御神、天の岩戸に隠れ給ふを以て八百萬神是を歎き岩戸の前にて舞曲を調べ、是を慰め給ひしを學びたる物にして、能の總囃子方には、八百萬の神達を移したる故也、シテの翁を、天

古神道を通
面してする眞
が主である

古神道の神
神は高天原
に在つて尙
ほ現國の神
皇室人民を
祭らる

照大神宮に表し、色黒き尉を住吉の神に表し、脇師を戸隠の神に表す、とある。是によれば千歳が戸隠の神を三番叟が住吉の神を舞ふのである。或は是を天照大御神翁八幡大神千歳春日明神三番とし、其の他の説もあることなれど、斯かる説明の形式は従であり古神道を通して眞面目の反省が主である。舞臺上に理想界を現はさしめ、理想界の眞面目なる存在が無数の表現者となり、主従本末の關係を失はずして、共皇室國家の長久を祝するのである。従ふてこれを古神道の信念に當て嵌めて見れば、猿樂傳記に在る通り申し傳へて誠に結構である。天照大神八幡大神春日明神と申されぬことも無いが、之では穩かならぬ點が多く出て參る。思ふに此の方の説は三社の信仰により附會せしものであらう。(皇室は常に天照大御神を本たる神として祀り給ふ、然るに藤原氏の跋扈に連れ、其の祖神たる天兒屋命春日神を特別に奉祀し、此の信仰が盛となつた。其の後源氏の世となつては武運の神八幡宮天應仁を氏神として特に尊信致し、ここに三社の信仰が起つたのである)。猿樂傳記の説を採れば天の石

屋戸に於ける天照大御神の『永遠なる産靈』の大御心を、手力雄神神の及八百萬神を離れずに拜察し奉り、又『此の大御心を愈四海に輝かすことを以て任じ給へる筒之男神』を活躍せしめて、此の舞の跡、始末を面白をかしく附けるものであらう。手力雄神は天石屋戸の段に於ける他の神様を以つて更へても差支へはあるまいが、日の神をお引き出し申したる大切の神様である。筒之男神は即ち住吉の神日の神の御光を世界萬邦に輝かしめ、皇國を擴張せんが爲に水先案内をなされ、航海を護り給ふ御方で、又一般に世界の交通の安全を保ち給ふ。神功皇后の三韓に赴かれ給ひし時に現はれ給ひしも此の神である。中古以後は其の上に又和歌の神として、尊崇致して居る。

○斯かる謂れがあるから、翁を舞ふ時は豫め禊してかかることになつて居り、樂屋の内にも格別の作法がある。金剛右京氏談によれば、能樂講義第一、藝道

『翁』の節は『翁』特殊の儀禮作法がある。由來『翁』は他の曲とは

異り、極めて神聖なものとして、尊ばれてゐるのであるから、之を勤める心得も一般の能を勤める時とは違つて、専ら心身を清淨にし、樂屋内に在つても、別火と云つて火鉢は別になつてゐて、湯茶も夫が爲に飲まなければ煙草も慎んで喫はない。

扱て當日鏡の間に祭壇を南面して設へ、其の上には中央に面箱、向つて左に翁鳥帽子、右に扇の三品を据ゑる。壇の下には供物臺を置いて、其の上には白木の三寶三個を載せる。中央のものには土器を前にして洗米、鹽水と云ふ順に並べ、向つて左のには鏡餅、右のには神酒、德利一對を載せるのである。此の一事を以てしても『翁』と云ふ曲が如何に神秘的であるかを知るに難くはあるまい。

先づ囃子方の調べがあつて、夫が濟むと『翁』を勤める役役のものは、悉く鏡の間へ集る。其の席順を云ふと、第一に翁は成るべく祭壇の近くに床机にかかり、次いで千歳但し下懸の時、三番叟、面箱、狂言の後見二人と云ふ順に並び、向ふ側には祭壇の近くに笛方を首じめ、小鼓頭取脇鼓

二人、大鼓方、太鼓方と云ふ順に折れ曲つて並び、地謡は祭壇に面して並ぶのであるが、鏡の間の廣狭又方位の相違等に依つて席の位置も變るものと思はなければならぬ。

翁先づ祭壇の前へ進んで恭しく禮拜し、床机へ戻ると、表の後見は供物臺中央の三寶を取り上げて翁の前へすすめる。翁が盃を取り上げると、裏の後見は傍から瓶子を傾けて酌をする。『翁は夫を三口に飲み干して盃を置き、洗米を取り、左右左と淨めて洗米の餘りを僅か左の袂へ入れる。夫より後見は前に述べた席順に従つて盃を勧め、かくて一同漏れなく飲み了つたところで演奏に移るのである。

ハ 翁を舞ふ者も、黒き尉を舞ふ者も、觀能者の面前で其の「面」を着け、又ぬぐ。是は舞ふ者も觀能者も共に心して神ながらの根本を反省せんとする心持を示すもので、舞ふ役者が神と號し、神神を汚すことのなき様に、呉も氣を付けるのでありませう。萬人が一心同體となり眞面目に普遍的存在を反省する爲に、一人が偶然面を被りて神懸りしつ、神として

神合一の
神懸りの式。

日の神と翁
と之を舞ふ
者役者等と
は三者一體
なり。

舞ふことを示すものであらう。従つて又此の曲の主人をも特に翁と稱し、天照大御神とは申さず、他のものも千歳とか三番叟とか申して居る。三番叟とは三番目に出るからの名であらう。

ニ 今此『式三番』の舞の式を詳説せる花傳書の文を掲げる。

一 式三番座付の次第の事

第一 翁。 第二 千歳。 第三 三番。 第四 笛。 第五 小

鼓。 第六 大鼓。 第七 太鼓。 第八 謠衆。 第九 狂言。

一幕を掲げ千歳二間ばかり出るとき、大夫出べし、其次に右の如く何れも出べし。扱翁千歳は座付の間、シテ柱の際より橋一ばいに一重並に各つくばう。扱千歳舞臺の真中にて、面箱を目八分にかまへて持ちて畏こまる。翁千歳の右の方にて禮をして座付、其時袖をあらあらとむらす、その音を聞き千歳面箱を翁の前に持ちて行く。翁の前に面箱をきて紐をととき翁の面を取り出し、面箱の蓋に据へ、大夫の方へ向けて置く。立あがり協の座に直る。三番叟はシテ柱の脇に直る。其時孰も

翁として
は
あ
る
と
し
て
あ
る
の
で
あ
る
と
し
て
あ
る
の
で
あ
る

公衆の面
前
に
て
翁
を
入
る
後
に
入
る
後
に
入
る
後
に
入
る

座に付く。シテ柱の際にて、座付衆正面へ一禮あり。扱各皆座付候てより、笛やがて座着を吹く。鼓うち鼓槽の紐を解き、鼓を取り出し、元の如くに蓋をして、左の方より寄りて腰を掛け、素袍の袖を左より脱ぎ、鼓を左に持ち、膝にのせ、笛のひしぐを待ち、小鼓打いだす。翁「座して居たれども」といふ時、立あがり、鼓打ちの前にてひろげさいふあり。さて様様の祝言の謠、翁の舞あり。常の如く舞ひ收めて、舞臺の真中にて謹而禮をして、さて立上がり、如何にも静かに樂屋へ入る。翁の舞の中に「むの段」といふ事あり、是おほきにならひあり、秘事。

一 千歳の舞中ば、瀧の水と謠ひ、左より左右のへうちとり、鼓打のそばより、舞臺の中へ出で、「たえずとふたり、常にとふたり」といひてしきる拍子あり、たつはいをして扇に目を付逆にまはる。さて扇をさし上げ、「君の千歳を經ん事は、天つ乙女の羽衣よ、萬歳ましませ、いはふがうへ龜やすむなり、らりうとふとふ」といふ時、足拍子三つあり。舞たまふ常の如くに舞、鼓打の前にて、鼓打の方へ向き、又左へ扇をとり舞とむ

る。あし拍子あり。さて元の座になをる。

一 三番叟。大鼓もみ出し、う、ちい、で、き、あ、は、せ、よ、き、頃、に、立、上、が、り、橋、掛、り、に、て、三、番、の、謠、う、た、ひ、だ、し、や、が、て、舞、ふ、也。三番叟の舞過ぎて、千歳、鈴、を、取、出、し、三、番、に、問、答、色、色、あ、つ、て、鈴、を、渡、す。三番、鈴、取、つ、て、舞、臺、中、程、へ、出、し、さ、り、て、扇、も、鈴、も、あ、ぐ、る。是にも五拍子あり。さて常の如く舞ふ。大鼓の前にて、足拍子細かに踏み、三度まはる度毎、顔を撫づる事仔細ある事なり。舞とめて、面をぬぎ、やがて樂屋へ歸る。

ホ 又一話一言三十六の翁三番叟次第には左の如くある。括弧中の言葉は五號註六號註共に、克彦が所感や疑問を附記した説明に過ぎぬ。所作や謠方等は今日の寶生流にて行ふ所を想像して附記したのである。

式三番翁立。

- 一 面箱狂言 翁大夫テシ 千歳シテツレ、觀世流、寶生流、今春、金剛、喜多にては狂言師面箱にて兼相勤(現今の寶生流にては狂言師面箱でなく、別に役者が之を勤む) 三番叟狂言 笛 小鼓脇鼓 小鼓取手 小鼓脇鼓 小鼓脇鼓
- 大鼓 太鼓 地謠。

公衆の面前にて後樂屋へ入る

秘傳なれば外部から想ひし得るのみ

役者の資格にて禮をするなり

産靈の精神にて一貫す

右之順に出る。初め面箱出て目附柱の際に跪き居る。翁正面にて下に居るを見て、千歳以下皆跪き居る。千歳はシテ柱の際に居る、三番叟以下、唯方皆橋掛りに居る。翁正面にて禮をして座に着く。面箱、翁の前に行、面箱の蓋を明面を出す時、千歳協坐に行坐す。面箱は面を取出し蓋にのせ置て、千歳之次に坐す。唯方一人宛順に、シテ柱にて禮をし坐に着く。地謠は板附之方より出て、拍方之後に坐す。小鼓三人床几にかかる。笛座附を吹出す。小鼓素袍肩を脱ぐ、笛座附之末ヒシギを聞、小鼓打出す。

翁謠出す。

一 とうとうたらりたらりたらりあがりららりどう(以上は 日の神を舞ひ奉る『シテ』が、ツヨク然しユツタリと、サラリ心にて謠ふ、寶生此の言葉は樂譜なるべしともいひ、又都曇答臘といふ鼓名なりともいひ、又陀羅尼に神道の言葉の和合せるもの、輪林胡ともいふ。陀羅尼じやなどと申すは全く信ずることが出来ぬが、樂譜なりとする説は最

今ふ侍我にて幸龜遊岩枝ね千千一會
様白等お、心とぶのにて秋歲蓬我
あり拍一はは君にの、上鶴、萬經茶物
り子と千さ萬任載鶴に住松歳る山語
のい秋ば歳せ、と龜みの重、に

も有、力なる、證據に、富む、で、居る。然し、元は、樂譜も、交つて、居ら、ふ、が、つ、ま
る。所は、最早、單純なる、樂譜、では、なく、夫、以上、の、意味、を、以て、居る。『天、つ、晴
れ。あ、な、面、白。あ、な、手、伸、し。あ、な、明、け』の、心、持、を、斯、か、る、調、子、を、借、り
て、聲、歌、と、し、て、高、雅、に、表、は、し、た、も、の、で、あ、ら、う。賀、茂、貞、淵、翁、以、下、の、言、葉、中
に、あ、る、類、似、の、も、の、も、同、様、と、思、ふ。理、窟、ぼ、い、文、句、を、列、ね、ず、し、て、『と、う
ど、う、た、ら、り、た、ら、り、ら、ら、ら』な、ど、と、申、し、て、心、持、を、述、べ、真、面、目、を、歌、ひ、出、す、所
は、反、つ、て、何、程、尊、い、か、分、か、ら、ぬ。無、限、の、趣、味、の、存

地、ち、り、や、た、ら、り、た、ら、り、ら、ら、り、あ、が、り、ら、ら、り、ど、う、(サ、ラ、リ、運、ぶ、最、終、を
シ、ツ、メ、ル。此、の、所、は、八、百、萬、神、が、日、の、神、の、御、光、に、照、ら、さ、れ、其、の、晴
晴、し、き、御、心、を、反、映、し、之、に、和、唱、す、る、所、で、あ、る。翁、所、千、代、迄、お、は、し、ま、せ
『天、つ、晴、れ。あ、な、面、白。あ、な、手、伸、し。あ、な、明、け』の、心、持、に、よ、り、大、生
命、を、表、現、せ、ら、る、天、皇、の、御、長、久、を、祝、し、給、ふ、の、で、あ、る。此、の、曲、は
神、神、が、天、の、石、屋、戸、の、段、の、精、神、を、反、省、せ、ら、れ、つ、つ、年、の、始、め、毎、に、天
皇、及、國、家、の、繁、榮、を、祝、し、給、ふ、御、心、を、拜、察、し、て、舞、ふ、の、で、あ、る。誠、に、近、古

日光は瀧の
水を濁せ
しめず、愈々
之に光彩を
添ふる日光
なり。

不二で高天原の 神神は高天原に在つて同時に現世に在らせらるる
次第である。此所もサラリ心にてユツタリ謠ふ地われ等も千秋さむ
らはふ(八百萬神が 日の神及其の御延長たる 天皇の無限なる御
光りに浴し、之と共に長久に存在し、行く久しく御光りの御發揚を輔け
奉らんとする意を述ぶ。是もサラリ心にて 日の神に和して謠ふ)
翁鶴と龜との齡にて(サラリ心、ユツタリ) 地、幸、心、に、任、せ、た、り、(サ、ラ、リ、ハ
コ、ブ) 翁、と、う、う、た、ら、り、た、ら、り、ら、ら、り、(サ、ラ、リ、心、ユツタリ) 地、ち、り、や、た、ら
り、た、ら、り、ら、た、ら、り、あ、が、り、ら、ら、り、ど、う、(サ、ラ、リ、ハ、コ、ブ、最、終、を、シ、ツ、メ、ル)、
千、歳、の、鳴、る、は、瀧、の、水、鳴、る、は、瀧、の、水、日、は、照、る、と、も、延、年、の、舞、の、辭、な、り。
舞、初、る、の、鳴、る、は、瀧、の、水、鳴、る、は、瀧、の、水、日、は、照、る、と、も、延、年、の、舞、の、辭、な、り。
言、葉、は、何、か、ら、取、り、來、つ、た、に、せ、よ、夫、は、二、の、次、の、こ、と、で、あ、る。偉、觀、を、呈
し、壯、大、な、る、音、樂、を、な、し、つ、つ、絶、え、ず、流、れ、つ、つ、あ、る、瀧、の、常、に、動、か、ず、變、ら
ざ、る、こ、と、を、想、ひ、起、し、て、之、に、寄、せ、て、祝、ひ、奉、る、の、が、主、で、あ、る。唯、空、し、き
漠、然、た、る、涸、渴、せ、る、存、在、に、は、あ、ら、で、日、の、光、に、映、じ、之、と、和、し、て、愈、美、し、く
輝、き、且、つ、活、働、し、鳴、り、て、已、ま、ぬ、瀧、を、想、ひ、起、す。サ、ラ、リ、謠、ふ、地、た、へ、ず

一家に於て
さへもきたり
くもあつた
人もあり
之から長く
生きたる
孫があるや
之を存する
長久の存
と申す

「さいばら」
は風俗歌の
一種であつ
て久米歌に
もなるとい
ふなりと

とうたりありうどうどう(サラリ、ハコブ) 千歳たへずとうたり常
にとうたり(サラリ) 君の千歳を經ん事も天津乙女の羽衣よ
鳴るは瀧の水日は照るとも(サラリ) 長長しき文章とせず重要な
る短き言葉のみを擧げ實行に當る舞を以て其の意を補ひ示す所が古
雅にして尊き見所である。地絶えずとうたりありうどうどう(サ
ラリ、ハコブ) 舞ス、笛ヒシギ千歳元の
座に着シテ面を着ける)
翁あげまきやどんや(是より若若しき土臺を失はずして、シテが「翁
面」を公衆の面前にて着け、愈向上擴張、發展、活動して已まざるを祝ふ。
此の時に至り始めて面を着けるのは深き理由があるやうに思ふ。「特
に老人に作らぬ素顔」こそ今後愈長久に生きて行く彌榮えの方面
を示すのであらう、即ち翁の若若しき土臺を見せるものである。次に
特に千歳を經し「翁面」を被ぶつた姿は是迄既に永遠の歲月を生
き來つたことを示す。又公衆の面前に於て面を着け又ぬき、平生の如
く樂屋内に入りて面を着けて來たりぬいだり致さぬのは、特に神人の

分を亂さず假に神を舞ひ奉ることを示す義であらう。此の所はユツ
タリと謠ふ。此の文句催馬樂に在るものと似て居る、催馬樂より採り
來つたものであるとしても、原文の一部を美化して又時と共に美化さ
れて使つて居るので、彼に於ける文章や意味と全く同一と思ふてはな
らぬ。「あげまきや」は揚卷、即ち總角であつて、左と右との兩方に分け
て結ぶ小供の髪である、従つて「あげまき」と申すと「生成力に富む
で居る小供」のことであり「之より愈發達生成擴張活動して已まぬ
芽出たい生命」をいふ。翁も實は死に近きつつある翁ではなく又生
活の一方面に執着し立て籠りつつある翁でもない「若若しい伸縮自
在なる翁」である。

地ひろばかりやどんや(サラリ)心ユツタリ謠ふ。「ひろばかりや」は
「尋尺計りや」でお互の間隔が可なり廣く見ゆる程相離れても居ら
うが相互に己を擴張し愛により一心同體を實現し、益産靈の働きを行
ひ、天下を美化し世界を創設せんとするの義である。翁座して居たれども

坐して居たれどもは、
さいばらに
は「放らさ
かり云云」
とある。

(翁立ち上がり活働を始める。ユツタリ謠ふ。)地まゐらふれんがりや
どんどや「どんどや」を「どんどや」と記せる本もある。「まゐらふ
れんがりや」の後半は元はいざ知らず今は訛りて聲歌になつたので、
其の前半は「參らふ」で己を擴張しいざいざ一心同體となつて創設
的行動を爲さんとの積極的態度を歌ふたものである。サラリ心にて
ユツタリ謠ふ中途よりシメ、どんどやをシヅメル。翁千早振神のひこ
(彦又日子)の昔より久しかれとぞ祝ひ神代の昔高天原にて天孫御
降臨の際にも「寶祚の榮えまさんこと天地と窮り無きものぞ」と仰
せられた。ユツタリ謠ひ最終をシヅメル。地そよやりちや(サラリ、タ
ツブリと謠ふ)翁凡千年の鶴は萬歳樂と謠ふたり又萬代の池の龜は
甲に三玉を戴き渚の砂さくさくとしてあしたの日朝日即ち若日の色
をらうじ瀧の水れいれい冷冷と靜に落て夜の月あざ(シメ)やかにうか
んだり(水月不二の境)天下泰平國土安穩(君民不二、一心同體)今日の御祈
禱なりあれはなじよの翁共よ、ユツタリ謠ふあざやかにシメル、天下泰

皆神ながら
の古き生命
を有す昨今
生れ得たる
生命に非ず。

平はハツキリハリテ安穩はヒタク、今日以下ハツキリ。「あれはなじよ
の翁共よ」は今日の實生では「御祈禱なり」の次に少し間ををきて
「ありはらや、なじよの翁共」翁共はといひ乍ら翁が橋掛の方を向きて
見る。萬我皆一心同體であり上下皆千萬歳の大生命に歸一し其の表
現者たることを高調するのであらう。地あれはなじよの翁共ぞや、い
づくの翁どうどうどう(サラリ、ハコブ、又翁ども、そやいづくの翁云云と
記せる本あり)翁舞千秋萬歳のよろこびの舞なれば、一舞ひ舞はふ萬歳
樂ユツタリ謠ふ。萬歳とは一個人の長生には非ず、神代より永遠に生
きつづある大生命の愈榮ふるを祝すので、之と離れ給はず之を根本的
に表現せらるる天皇の御長久を祝し、其の御光の下に此の大生命に
歸一し之を表現し、之と不二なる人民(天の益人)の愈繁昌するものなる
ことを祝すのである。今日呼ぶ「萬歳」も亦其の意味である。即ち
普遍我及表現人の自覺を有しつづ呼ぶから始めて虚禮でも追しよ
うでもなくなり健全なる熱誠の表はれとなる譯でありませぬ。地萬歳

是より唯子
活潑となる。

翁の白色に
近き面と異
り黒色なり。

白色面と素
顔と黒色面
とは天地人
と象るなど
ありといふ説
あり。

樂(サラリ謠ふ翁萬歳樂(ユツタリ) 地萬歳樂(シヅメ心にてユツタリと謠ふ。終りてシテ面を取る)

右にて翁濟翁千秋這入る、三番叟シテ柱ニ著坐大出づシテの翁這入る時正面向つて謹みて禮拜する、之より大に活潑に唯す。

三番叟。

一 おおさへおおさへ、よろこびありやよろこびありや、わが此所より外へは、やらじとぞおもふ、舞もみの段濟、黒面になる

『おおさへ』は『おおさへ』にて『お子思』なり、老人の鬚多きを形容したる詞なりと三養雜記二に見えて居る春秋左氏傳の註に子、わが此所より外へはやらじとぞおもふ』とは、外には逃がすまじ、之を失ふことなかるべしといふ義にて、他人には與へてやらぬといふことではなす。

三番叟。

一 ああら目出たや物に心得たる、アドの大夫殿に、ちよつとげんぞう申

う(狂言と能とは元來唯一の猿樂より分岐發達せし不可分のものではある、そこで式三番にも狂言師をして三番叟を舞はしむるのである。)

面箱。

一 てうど参りて候 三 一たが立にて候ぞ、面一あどと仰候程に、某隨分物に心得たると存、あどのために罷立て候、三 一ほほう、面一今日の御祝儀を千秋萬歳と、芽出たきやうに舞ふてをりそへ、色の黒い尉どの、三 一今日の御祝儀を、此色の黒い尉が、千秋萬歳と目出たいやうに、舞あさめうずる事は、何より以て安う候、住吉の神は、現に、神功皇后を助け、三韓に、皇徳を普及せしめ、給ひ、其後長く航海の神交通の保護者として、世界に日の御光の及ぶことを努め給ふ。日の神の御舞ありし跡、始末を付けらるる義は、尤のこと大切のことである、先あどの大夫人殿には、元の座敷へおもおもと御直り候へ、面一某座敷へ直らうずる事は、尉どのの舞より以て安ふ候、先御舞ひ候へ、三 一まづ御直り候へ、面一先御舞候へ、三 一イヤただ御直り候へ、面一ああら芽出たや、

左に扇、右に鈴を持つて舞ふ。活潑に舞ふ。

高砂は元清の作なり。清は世阿彌と號す。觀世二より約五百年前のなり。

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

正月後と年末

お能

一〇三四

さ、あらば鈴をまいらせよ、三アラやうがましやな、段、鈴の仕廻なり黒き尉に鈴を與ふ。すると尉は産靈末廣を表はす扇と、個個の活働を意味し、すず(清)の稱ある鈴とを以て活潑に舞ふ。

翁立千歳の舞、翁の舞がへり、素面にて三番叟もみの段。

黒色の面にて。

鈴の段。

右之通之順に御座候。

尚ほ翁は續いて始る協能初番の神能により、愈意味を獲得することとなる。協能により、ワキが、愈、天の石屋戸の開口夫故猿樂傳記によると此の協能を又開口と申したさうであるを能の上に實現するものであるからなり。今次に此の種の神能の文句の一端を掲げて見やう。

は 高砂、老松、難波、養老、餘り長くなりましたから唯、極めて簡単に神能の文句の一二を御照會致すことに止めて置きますが。

1 高砂の文句全體は、普遍我、表現人及産靈の事のみを言表はして居る。

同所。

最初の「今を始の旅衣、日も行末ぞ久しき」といふ所から、終りの「さす腕舞の大切なには悪魔を拂ひをさむる手には壽福をいだき、千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風、颯の聲ぞ手伸しむ」まで皆粗同様である。一個人の小さき幸福、利益、生命ではなく、時と所に亘る宏大にして長久なる手伸しみ及生命である。又眠むたい、無爲の、平靜ではない、矛盾反對と離れぬ活躍しつつある晴れ晴れしき泰平である。中にも、阿蘇の神主が「不思議や見れば老人の夫婦一所に在り乍ら、遠き住の江高砂の浦山國を隔てて住むといふは如何なる事やらん」との間に、ツレの姫が答へて「うたての仰せ候ふや、山川萬里を隔つれども、互に通ふ心づかいの、妹脊の道は遠からず」といふ所などは、諾冉二神が高天原と根眠の國と其の居所を異にせらるれども、永遠に愛しき方方と思し召し共同して世界を創設せられつつあることなども思ひ出でらる。されば人間などは如何に遠く其の居所を隔つるも、相互に引き引かれ、絶えず活潑に交通しつつありて、其の引力の強さは物質間の引力の比には、あらで、加之微妙である。人のみならず萬

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

正月後と年末

お能

一〇三五

同時。

相といひ生
中に無限の
意義を蔵す

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

正月後と年末

お能

一〇三六

物も皆同所の徳所を隔つるも隔てを具へつつある。空間的に然るのみでなく、時間を異にするも實は時間の隔てなく、同時たることは、シテの翁とツレの姫とが仲よく交相和して「昔の人の申ししは、是は芽出たき世のためしなり」「高砂といふは上代の萬葉集の古の義」「住吉と申すは、今此御代に住み給ふ延喜の御事」「松とは盡きぬ言の葉の」「榮えは古今相同じ」と「御代をさがひるたとへなり」と申すに充分見えて居る。聖代は普遍的大生命の表現であつて、同時同所を根柢となすことを、理窟の形式でなく感じによりて述べたる所が尊いのである。そこでワキの神主も彌、自覺を深くして「よくよく聞けば有り難や、今こそ不審春の日の」と春と晴とにかけて、心地の益、明けきことをいふ。是に於てワキの神主とシテの翁と又相和唱し、調和を得つつ産靈を行ふて已まざる御代を讃歎する。即ちワキかしこは住の江」シテ「爰は高砂」ワキ「松も色そひ」シテ「春も」ワキ「のどかに」地「四海波静かにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の、松こそ芽出たかりけれ、實にや仰ぎても、言もあるかや斯かる世に住める

老松も元清
の作なり
さす枝。

難波も元清
の作なり

新葉集の
序

民としてゆたかなる、君の恵ぞ有り難き」と矛盾反對して已まぬ波風の調和せられつつある生き生きせる御代の働き、天皇の働きある御光を、讚美するのであります。是は高砂中に含まる意味や文句の一端であるが、之によりても大體は推測せらるるであらう。

口 其他、老松には「春を迎へて忽に、うるほふ四方の草木まで、神の恵になびくかと、春めきたる盛りかな」とか、又地「さす枝の梢は若木の花の袖」シテ「是は老木の神松の」地「是は老木の神松の、千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」シテ「苔のむすまで松竹鶴龜の」地「齡を授くる此君の、行末まもれと我神託の告を知らする松風も梅も、久しき春こそ芽出たけれ」などともある。

ハ 難波にもレシテツ「君が代の、長柄の橋も造るなり、難波の春も幾久し」ツレ「雪にも梅の冬籠 二人今は春べのけしきかな」サシテ「夫れ天長く地久しくして神代の風長閑に傳はり」二人「皇の賢き御代の道廣く、國を恵み民を撫でて、四方に治まる八洲の波、静に照らす日の本の影ゆたかなる時とか

第三篇

第三部

第二段 一年の實修

正月後と年末

お能

一〇三七

大義名分を辨へざりし足利氏の頃にはさへ能はし神代を中心とせり。發達

皇國にて梅を賞する理由

普慈即ち和魂

や』歌『春日野に若菜摘みつつ萬代を祝ふなる心ぞしるき曇りなき天つ日嗣の御調物運ぶ巷や都路の直なる御代を仰がんと關の戸ささで千里まで普く照らす日影かな』とあり。又『ワキ御即位ありて難波の君の位に備はり給ひし時は』シテ『今こそ時の花の如く』ワキ『天下の春を知ろしめせば』シテ『今は春べと咲くやこの』ワキ『花の盛は大鷓鴣の』シテ『帝を花にそへ歌の』ワキ『風も治まり』シテ『立つ波も』地『難波津に咲くやこの花この花は櫻とも梅ともいふ梅なれば氷雪を物ともせず反つて之を征服して天つ晴れに咲ふところを賞美するなり冬ごもり今は春べに匂ひ来て吹けども梅の風枝を鳴らさぬ御代とかや實にや津の國の何はの事に至るまで豊かなる世のためしこそ實に道廣き治めなれ』又其の後に至りてもシテ『然れば普き御心の』地『いづくし深うして八洲の外まで波もなく廣き御惠筑波山の陰よりも茂き御影は大君の國なれば土も木も榮えさかふる津の國の難波の梅の名にしおふ匂ひも四方に普く一花開らくれば天下皆春なれや萬代のなほ安全ぞ芽出たき』如何にも大きく長く晴れ晴れしく

天皇は聖人なり

養老も元清の作なり

且如何にも温かき心持が致すではないか。此の文句中にも産靈の心持は充分に在るが尙ほ其の産靈は温かにして且雄壯活潑なることは終りにギ地『あら面白の音楽や時の調子にかたどりて春鶯囀の樂をば』シテ『春風と諸共に花を散らしてどうと打つ』地『秋風樂は如何にや』シテ『秋の風諸共に波を響かしどうと打つ』地『萬歳樂は』シテ『よろづ打つ』地『青海波とは青海の』シテ『波立て打つは採桑老』地『拔頭の曲は』シテ『かへり打つ』地『入日を招き歸す手に今の太鼓は波なればよりては打ち歸りては打ち此音楽に引かれつつ聖人御代にまた出で天下を守り治むる萬歳樂ぞ芽出たき』とある。是を見ても如何に支那の詞や外來の言ひ表はし方を古神道に同化して用ひつつあるかが分かる。

養老にも例ば『實にや玉水の水上すめる御代ぞとて水上とは天皇の御高德を稱し又神代ながらの御光を指す流の末の我等まで豊かにすめる嬉しさよ』又『汲めや汲め御藥を君の爲に捧げん』又『後シ有り難や治まる御代の習ひとて山河草木穩やかに五日の風や十日の天雨にかか

るが下照る日の光り、日の光は絶えず照りて盡き、尙ほ此の根柢の上に五日に一度風吹き、十日に一度雨降り、是により愈産靈の完全に實現せらるるを申す。和魂と荒魂との關係を形容したのである。曇りはあらじ玉水の薬の泉はよも盡き、じ、あら有り難の奇瑞やな」といひ。最終には、地君は船臣は水、水よく船を浮かべ、浮かべて、臣よく君を仰ぐ、御代とて、幾久しさも盡させじや、盡させじ、君にひかるる玉水の上澄む時は、下も濁らぬ瀧津の水の浮きたつ波の返す返すも、よき御代なれや、萬歳の道に歸りなん」と結んである。此文句中「君は船臣は水云」とは、荀子に「君は舟なり、庶人は水なり、水すなはち舟を載せ、水すなはち舟を覆へす」とある言葉の形式を採つたのであるが、此の原文中革命の意味在る所は全然捨てて用ひず、彼の言葉を我に同化して、巧に君徳の彌盛んなるを祝し、此の御光りは臣民の忠誠努力により彌榮え給ふこと、此の御光りにより臣民も益清く明かく斯くして聖代の千代に八千代に動きなきことを述べてある。(尤も強て注文を言へば斯かる不祥なる文句を措いて、天皇の明御神におはします方面より

働き無くし
はといたふこと
はといたふこと
はといたふこと

第五目

舞臺

舞臺も亦相撲の土俵の如く、三間四方の板の間及之に附屬せる

積極的に祝詞を宣へてもらひたい、古神道より真向に祝ふてほしい、是が今日以後の文士の大切な仕事の一つである。尤も最後にも重ねて「萬歳の道に歸りなん」とある。是は隨神道に復歸せんといふことであるから、作者も十二分に古神道を治國の大本救世の淵源と見て居つたのである。

橋掛りの中に大宇宙の悉皆を表現せしめ、如何に廣き空間でも何程長き時間でも、所作によりて滞りなく、此舞臺に現はれて来る。所作を捨て離れて、ただ舞臺のみが大宇宙の表現たる意味は生じて來ぬが、用ひ様により、舞臺が宏大無邊のものとなつて生きて來る。此の舞臺を維持する柱には、夫、其の定まりたる分擔があり、此の分擔により、大宇宙を象る舞臺が意味をなす。シテ柱、目附柱、脇柱、大柱、笛柱及狂言柱が是である。尙ほ舞臺の背後には大なる鏡板が在る。之により、神人、人、人、即ち神と役者、役者と観客、神と観客、観客と観客とが相歸一するので、其の鏡板に定まつて現つて居るものは永遠の産靈を意味する松である。臆病口の傍の板には、之に對し、言ひ換え

表現。

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 正月後と年末 お能
れば、鏡板には松を書く定めになつて居る。舞幕の中にも鏡の間といふがある、
と曲中の人物とを合一せしむる。舞曲者が幕より出づるに先ち、已
爲の鏡を備へ付けたる室である。

第六目 所作及文句 此舞臺をして大宇宙の表現たらしめ、或は此の所を高天
原と化し、或は根の國(眠の國)と變ぜしめ、或は此の所に現國を現前せしむる
ものは所作である。詳しく申せば、所作並に文句である。單純なる文句や
所作によりて、其の内に多大の内容を包ませつつある所が能の特長で、従つ
て其の言動が表現的である。表現的であると申すのは、單に其の個獨の言
動に止まつて居らず、寸毫の歩みにより即ち長距離の旅行となり、寸分の運
動により無邊際の廣さを意味せしめ、數秒の言語により永遠長久の感を起
すやうにさせ、一言一動が心の深遠なる底に徹したわいなきことが實は無
數の動作の繰返しを想像せしめ、各其の特色を有し乍ら風の如く水の如く
石の如く人の如く神の如く良く、一己を超越して之に拘泥し得ざるを申す
のである。そこで能の舞より轉化せる俗間の踊なども尙ほ此の趣味を帶
びて居るさうじや。之と同時に能の所作も文句も剛柔相兼ね上品なる所

と強剛にして不屈不撓の所と、壯大と美麗と自然天真と人爲の形式とを眞
に調和せしめて居る。公卿其の他都人の優美にして高雅輕妙なる風と日
本武士の莊重嚴格なる風とを融合せしめたるのみでなく、古神道の生きた
る眞面目と佛教の幽玄なる哲理とを結び付け、皇國の清素と漢風の形式
主義とを統一し、主觀的氣質と客觀的精神との兩端に落ちなかつたことは、
能及其の文句の世界に誇り得べき點である。獨逸特に北獨逸等では健剛
否何でもかでも強い。所作を尊び、之と優美とを調和せしめんと努めて居つ
たことは、少くも此の百年間著しいことであつたが、然も此の點は能の如
くに見事になつては居らぬ。汎神的にして然も充分に強みがあり、高尚に
して雅致に富める舞樂は能である。古神道の大神精神を往時の有ゆる思想
や形式により舞樂として現はし始めたものが能である。能の所作や文句
は將來も益此の大方針により發達改善せしめられねばならぬ。

第七目 所作と追進 古神道では追進を大切の心掛けとして居る。従つて盾
ではなくして弓矢であり、弓矢は武士の魂である。皇國では弓矢に特殊の

八島中に於
ける義經の
弓執

意味がある。之は發しては軍事上の攻心等となるが、又能の所作などを定むる大切の心持となつて居る。花傳書五に『いづれの仕舞にも、其文句にてするは、文句に合はぬ物なり、字二つ三つほど前にすれば、本の文句の時仕舞あふもの也、泣くときも二字三字ほど前になき候へば、泣くといふ目に、手あたる物なり、泣くと謠ひにいふ時、目に手をあてなき候へば、文句過ぎて目に手當たるものなり、月を見て花を見てといふ時も、其字にあたり見れば、跡を見る也、字二つ三つまへかど見ては、よき頃に、謠ひにあひ候物なり、見ならひなり、秘事也』とあるが、即ち追進の心持を必要とすることを説いて居るのである。

第八目 人格の修養

能はシテ師手爲ワキツレ地等が各其分を固守しつづつ、之により一心同體となつて曲を生かし、互を理想化して行くものである。能は世人をして斯かる心掛を鍊修せしむる便宜となる。加之能は又自己たる立場を失はずして、一個人の心持を他人に自由自在に推し擴め、萬人の心持に己を擴張しつづつ、其根柢の上に生活する修養法となる。即ち萬人

表現。

を自己の内に包容し、其の表現人として存在する稽古となるものである。自己の分擔や特色を保持しつづつ、或は其の儘老人になつたり、小供になつたり、女の心持を推感したり、男の心に會通したり、貴きとなく賤となく、上品に、誰にも彼にも心を置き替へる工風をするには、最も面白きものである。各人が表現人の實を發揚せんとせば、此の邊からの修養も必要となつて來る。そこで幕府時代は能や謠は、武士の修養の具となつて居り、豊臣秀吉の如きは自らも舞ひ謠ひ、此の道を盛にせしめ、禁を犯して高野山上に於てまでも之を奏せしめたことすらある。徳川家康以下も之を用ひ長く幕府の式樂と致してあつた。

一體大勢揃ふて花やかに行動することは易いか、一人や二人にて複雑なる成行を演じ、深遠微妙なる心持を表はし、人人をして退屈させぬことは大に技倆を要すること、曲の妙所は實に此の所に在る。ここが最も肝要の所で、能には斯かる所が極めて多い。そこで能や謠をする人は心持の工夫が何より大切である。花傳書六には、よろづ能の心持の事を左の如く記し

てある。

花傳書六 よろづの能の心持の事。

一 神能 心持出候て出る時、我身を神と思ふべし、いかにもけだかくもつべし。

一 鬼 わが身を鬼とおもふべし、いかにもい、かれ、心をもち出る事ならひ也。

一 修羅の心持 幕をあけ候とき、い、くさばへ出る時の心持同前。

一 女 わが身を女房と思ふべし、おびなどをもゆるゆるして、心をもいかにも静に出で候へば、女體によしあるものなり。

一 佛などの能 我身を佛と思ふべし、いかにも心を殊勝にもちて、けだかくいづべし。

一 幽霊 我身を幽霊と思ふべし、いかにもいかにも心よはよはともつてよし。

右夫夫の能心持 大方如此、この心持なく候へば、能にそれぞれのいきほ

ひなし、右心持肝要也、此外何の能も是を以分別あるべし、あはれなる所は、心をあはれにもち、物すごき處は心をすごくもち、いさむ所はいさめ、夫夫の心持かんようなり。

一 陰の能心持の事 おもてを陰に、うらを陽に心得べし、左様になく候へば、能しめりすぎ候也。

一 陽の能の心持の事 おもてを陽に、うらを陰にあてべし、左様になく候へば、能つよみすぎつやなく候により、右の心得を交へ陰陽和合とこれをいふ、但能によるべし、陰の陰、陽の陽と舞もあり、水無瀬定家の後、まつのかがみの幽霊のかたなどは陰の陰なり、又もみぢがり羅城門などは陽の陽也、かやらの事をもつて、此類の能の位分別有べし。

一 かげの仕舞、面の仕舞といふ事あり、かげの仕舞とは、いにしへのうはさを聞及び、其人のまねをする仕舞の事なり、面の仕舞と申は、わが身の事をわれとする仕舞の事、ひとのうはさをまなぶ仕舞、現在の我身の仕舞、ころもちがふべし、斯様の事こまかなるさたなり、よく口傳すべし。』

表現。

第九目 謡 以上の如く、一端を観察しても、能や謡には中中深きいはれがある。そこで一寸謡をうたふにしても、先づ初めの一音が大切となつて居る。一年の能開きは「翁」に在り、一日の能は「神能」にあり、謡も亦初めの一音が大事、杖をつかぬ様にせねばならぬ、目から改むるを杖をつくといふ出が悪いと必ず亂れる。さうして謡ふ時は丹田に力を込め、全身の力を音聲を通じて調節し、つづ真面目に適度に、出さねばならぬ。音聲が全身否、全人格の表現とならねばならぬ。之は相撲を取るとき力の入り具合と變つたことは無い。而して節の具合なども、所作の場合に於けるが如く成るべく清素にして心持を表現せしめねばならぬ。「音曲はただ大竹の如くにて、直に清くて節すくなかれ」とは之を教ふる爲の古歌である。特に節をも忘れ、謠ふ聲をも忘れ、曲をも忘れ、其の執れにも執着せず、拘泥せず、然も其の執れをも公平に平らかなる心持を通して表現するに至らねばならぬ。是には技術の修行のみでは足らず、人格、夫自身の修養を必要とするのである。遊戯がかつた能や謡でさへ、斯くの如しとすれば、教育や法律、政治、生活などは勿論のことである。

は勿論のことである。

第十目 勸進能

能は、元神前にて奏する神樂より出で、尙ほ神社の祭事に用ひられ、遂に轉じて幕府の式樂ともなつたのであるが、神社、佛閣の建立、修繕、又は公共事業に要する費用を勸進する爲にも行はれ、事は、勸進相撲と同様である。然し相撲とは異り、徳川幕府の頃には此の勸進が變遷して、大夫世觀大夫なり、最後には實世觀が札を賣り又は配布して一生に一代催ふす能のこととなり、つまり、公けの式以外に世間一般に其の藝術を示す晴れの興行となつた。是は中中の大騒ぎで、然も嚴格であつた、町人等其の場にて酒などに酔へば縛り上げる程の劍幕であつたといふ。今日では勸進能とは申さず、總て古昔とは異つて居るが、斯かる沿革のある所から、謹嚴にして古の精神を傳ふるに熱心なる現時の實生九郎翁の如きは、嚴格に觀能者の氣風を維持し、つづあつて他の興行物に見るが如き行儀のわるい不謹慎のことはさせぬ。觀能者も亦之を喜んで居る。此の様な氣風や心持は永遠に之を發揚せしめて他に模範を示してやりたいものである。徒らに金取主義で人の

九郎翁の通人
格は社會を通
し、つづつ
改、つづつ
あり、つづつ
藝のみに格が
之、世人は格が
玩、物に格が
ある、かりに格が

他の興行物を排斥するに非ず、是等を美化するむることを望むのである。

一切の外部的なるもの、内部的なるもの、誠は皆内部熱の表現なり。

氣分を淺薄にし、墮落せしめる興行物の多きに對し、何處までも能を獎勵し、同時に能の根本精神を發揚致したきものである。

第十二目 結論

能も亦人の眞面目の心持の表現であり、表現とせねばならぬ。人に心在るときは、何とかして何時か形式により表現せらるる。花に鳴く鶯水に住む蛙。心中の情愈湧き出で益熱誠なるときは、必ず複雑にして微妙壯麗にして幽遠なる形式健剛にして勇猛なる動作となつて現はるべきものである。表現せらるべきものである。之を今日我邦の實證論者の如く冷冷淡視して排斥するやうな不自然なる心持を起さず、何處までも雄大高雅に發揚せしめねばならぬ。熱烈なる心無くして徒らに舞樂や謠の形式の後を追ふことは賛成出來ぬが、天地の公道を感得することと離さず、先づ心持から磨いて、此業を樂ひやうに致したいものである。古神道の大神の反省は能や謠に興味ある人に缺くべからざるところである。學者や教育家などは、愈以て先づ生きた心持動かぬ理想信念から修養してかからねばならぬ。此の心持さへあれば、入つても世俗に活を入れ

御都合主義の學說を唱ふる者は、似而非なり。

即ち一切の生活の美化である。

出でて、いつか世間を照らすこと疑なく、顯れては世人の指南となり、隠れては俗生活の根柢となり得ることはいふまでもないことである。是等の眞面目不動の信仰が無いときは、俗に接近しては御都合主義の學說を唱へたり、俗惡に引き込まれたりし、世間に遠かりては出來そくないの仙人となる次第である。行に非ずして人に在り、形式に非ずして信仰に在る。學者教育者は、字引又は技、手技師ではなく、「其の理想と信仰とに於て卓越せる活人」たること。「此の心持、此の人格を其の所修の學識を通じて表現する者」たることを忘れてはならぬ。

要するに古神道の大神精神は、廣狹を超越して居る、何人にも何時でも分かり、且存在するものであるが、生活の各方面より離れて、此種の大精神が獨り存在する次第のものではない。各般の生活現象により表現せられつつ存在するもので、各般の生活現象も此の大精神を無視しては何等の意味も價値もない。若し古神道の大神精神を自覺し之を表現せしめつつある行動であるならば、一舉一動、滑つても轉ろんでも、皆奥深き意味のある貴重なる出

來事になり、又同じ滑つたり轉ろんだりする形式も異つて來る。風俗習慣も除去すべき形式、脱却すべき重荷ではなく、夫自身を遵守する事が生活する張り合である。面白味である、目的自身であるといふことになる。勿論他の生活現象、向上の手段たる方面も必ず在るが、同時に目的自身といふことになる。古神道が是等を離れて是等を導く、獨立の存在を有し、又風俗習慣娛樂が古神道を離れて獨立しつゝあることは、是等が歸一せる根柢の上に第二三段以下の所に於て是認せられ得、且是認せねばならぬことに外ならぬ。して見れば、實は相撲や能のみに限つて古神道の精神が潜んで居ると申すのではなく、是等は分り易き一例として掲げたものに外ならぬ。教育や法律事業や政治生活、軍隊生活、その他經濟生活等最も顯著に古神道と關係あることは言を待たぬ所である。

四 刀鍛冶、學校と袴。

我我は其の意味に氣付かずに行動して居るけれども、實は一舉一動皆さういふ意味を有つて居る。常に相撲ばかりでなく、踊りや舞などでも日本の舞は西

洋のとは大分違つて眞面目でありますし、又昔から刀などを鍛へる時には、齋戒沐浴し、注連繩を張つて、神聖の心持にて鍛へて居る。三條の小鍛冶宗近が齋戒沐浴して一心に刀を打つて居る時に、神様がお現れになつて小鍛冶をお助けになり、一緒に刀を鍛へられた昔話がありますが、之は小鍛冶が神人合一の域に入つて刀を鍛へたのであります。今でも刀を作る者の所へ行つて御覽なさい、チャンと袴を穿いてやつて居る。決して贗鼻禪などを露はして不體裁な風で致しては居りませぬ。又我我も學校に於て何ぞ袴を穿いて居るかと申すに、神人合一の域に立たなければ、神聖なる學問などは出來ぬからである。(されば日本服ならば袴を着け、洋服ならば、フロックコートを着て、神人合一の心持で出掛けることが大切である。洋服でさへあれば、着流しの脊廣や寐間着で以てどこへでも行けると思ふのは西洋心酔の餘弊であります)。

袴 日本釋名下には「袴は帶裳なり、「きも」と「かま」と通ず、腰より下に帶をはくと云、太刀をはき、脛巾をはきたびをはくの類なり、裳は腰より下の服なり」とある。然し東雅には「はかま」は脛縛で「ま」とは「ま

袴は古き生命を有す。

とよ』の古語萬葉集抄なりと申して居る。言語の原はとにかくとして『はかま』は神代より有つた腰以下の服で、其の頃は袴も、禪も、共に、『はかま』と申して居つたらしい(古事記傳六)。舊事紀には、日神御裳を縛て御袴となされしこと見え、古事記には、伊邪那岐神の袂き祓ひ給ひし條に、御禪を投げ棄てられしよし記載せり。表の裝束とせし袴の方は、上古より上下男女に亘りて一般に之を用ひた。其の種類も多く製作方に變遷はあれども、随分古き生命を有するものである。

第二 年中の努力奮闘。

かやうなる鹽梅に、一年の中に於きましても、先づ年の始に神代の根本をよく反省し、ただ昨今ひよいと起つた出來事に依つて一年の計畫を定めずして、永遠に動かぬ基礎の上に、日に日に新しき事を造つて往く(産靈)のであります。此の絶えざる創設已まざる新生が生命である。一年の中には、つたり轉んだり色色の事があり、上つ面に於ては、失望も、落膽もあり、申す根本の心持を失ふことは、晴れあな面白あな手伸しあな明けと申す根本の心持を失ふことは、

大祭日は、特
に根本たる
古神道の信
仰を實修す
る日なり。

「イエス」は
先づ「イス
ラエル」民
族を救済せ
んが爲に、
其の眞面目
を「イスラ
エル」人の
宗教の形式
を借り用ゐ
て説きたる
人である。

致さぬ次第である。

又始終方方の神社に於てお祭りを行ひますけれども、少くとも大祭日には、假令如何なる宗教を信じて居る者にも心を鎮めて其の本を省みることになつて居ります。佛教徒であるから大祭日を認めないとか、基督教徒であるから大祭日を認めないとかいふことはなく、皆大祭日を認めて行動して居る。ただどうかすると直譯ならまだしも、つと甚しい丸呑みの基督教徒などがあつて、『無意味の儀式としてならば注連繩を張つてもよいが、信念の爲には張ることにはならぬ』とか、或は「單なる儀式としてならば神社に参拜してもよいが、信仰を以て崇敬するのは不都合であるとか」と公然申す者があり、内内では一層誤つた説を言ひふらして居りますが、それは大きな心得違である。普通の儀式としてならば参拜をしなくてもよいが、信仰の爲には是非共参拜せねばならぬ。然るに大和民族の一人でありながら民族を通して輝く世界精神をも自覺せず、自らの主と標榜する基督教祖イエスキリストの眞の心をも解せずして、單に西洋の宣教師の言ふ形式の末を受け賣りし、國民精神を愈美化し發揚せざるのみ

味○噲○の○味○噲○
臭○は○眞○の○味○噲○
味○噲○に○非○ず○
似○而○非○なる○
ヤ○ッ○信○者○
「イ○エ○ス」○の○
大○人○格○を○信○
ぜ○ず○、○反○つ○
て○「西○洋○の○
某○宣○教○師○の○
言○葉○の○形○式○
を○迷○信○す○る○
者」○な○り○
偉○聖○は○活○け○
リ○

イ○エ○ス、○キ○
リ○ス○ト、○キ○

第三篇 第三部 第二段 一年の實修 正月後と年末 年中の努力奮闘 一〇五六
か○之○を○敵○視○し○惡○意○を○以○て○之○を○阻○害○す○る○の○は○如○何○に○も○愛○の○心○持○を○缺○く○者○共○で○あ○
る○。○眞○の○基○督○信○徒○で○は○な○い○と○思○ひ○ま○す○。○さ○う○い○ふ○不○心○得○の○者○も○往○往○あ○り○ま○す○
が、然しそれは一向心配するに及ばない。寧ろそんな不心得の者があれば、それ
に對して愈健全なる基督教を起す導火線ともなる譯である。其の中には
皇國國民の中から必ず古神道を基礎とし、イエスの活きたる精神を活用する健
全なる皇國基督教が起つて來るに相違ないから憂ふるに足らぬのみならず、
反つて劣惡を轉じて善いものを生ぜしむることの前祝をせねばならぬと思ひ
ます。

偉聖は活けり 世界に於て偉聖として尊信せらるる人人を觀れば誠に
活きて居る。鑄形に入れて造られたる木偶とは違ふこと萬萬である。最
も西に於ける「イエスキリスト」を見よ。我等の敬愛せる「キリスト」の活働の
年月は二年半位であつたけれども、其の間に於ける彼の行動は彼の非凡な
る人格を證明し、彼の一舉一動は奥深き信仰並に眞面目の光を現はして居
る。さうして彼は其の奥深き信仰並に眞面目を唯、空漠と有つて居り、迂遠

の顯はし方を致した者でない。先づ人間たる「イスラエル人」として「イスラ
エル人」を通して人間を救済せんと試みた。「イスラエル人」から救済し始む
る計畫であつた。此の事は彼が其の弟子に「異邦の途に上らずして、先づ
「イスラエル」の迷へる羊に行け」と命令して居るによりても明らかである。
又彼が其の眞面目を分析して人を導き、其の信仰を言葉に表はして人を教
ゆるに當りては「イスラエル」人「在來」の思想を無視せずして、先づ此の「在來」の
思想を採り、其の不可なるを去り、其の善を長ぜしむる様に致したものであ
る。されば「イエスキリスト」は猶太教を眼中に置き之を改革せんと致した
者で、其の教の立て方は超越神たる「ゴッド」を中心と致し、博愛の至情に
より、之を汎神論的思想を以て和らげたものである。教の立て方や理窟
の形式が「イエス」の偉大なるを示すのではない、其の活きたる心持、其の偉大
なる人格、夫自身を以て「イスラエル」人に同情し、其思想を採つて、是により彼
等から救ひ始めんとした所に偉聖とも呼ばるる所がある。元來唯眞面目
じやの信仰じやのが漠然とあり得るものでなく、必ず或る程度の形式と離

れられぬ。卑近の話が、火を掴むに致しても、少くも二本の指が入用である、自分の氣象さへ勝つて居れば、火傷などは平氣で指で火をつまめる。然し火を掴むことを何人にも一樣に容易ならしめんとするには、其の場合場合に適當する様に形式的の火箸を造らねばならぬ。眞面目や信仰も其の通りである。自分一人で何が何でも平氣で之を有し之を磨かんとするには、自分免許の最小限度の形式丈けあれば宜しい、然し一般に此の眞面目信仰を有効ならしめんが爲には是非特殊の歴史と制度とを有する其の郷に適する形式が入用になる。「郷に入つては郷に従へ」と古來申す通り、自分一人が物好きに、又は一人のみが悟つた顔をして、えらさうに人と變つたことを致さぬでもよい。されば、イスラエルの偉聖も亦イスラエルの形式に據り、之を以て「イスラエル」を救濟せんと致した者で、是こそ愈、イエスの活きたる所以を證明するものである。

釋迦牟尼佛 釋尊につきても同様のことが申され得る。彼も印度に生れ、在來永く印度人を支配し來つた婆羅門教(梵教)を探り、彼の活き活きと有

釋迦牟尼。

つて居つた眞面目宏大なる信仰に言ひ表はしを與へ、實修の形式を定めたものである。婆羅門教等を輕侮することなく、之を用ひて更に之を彼の心持と行動とによりて、改善したものが佛教である。そこで超越的一神「イエホヅ」を認むる猶太教を改革して起りし「イエス」の教は超越的一神教の色彩を有し、梵教を改革して成りし釋迦牟尼の教は厭世的汎神的の性質を有する次第である。是も亦釋迦牟尼の反つて牟尼たる所覺者たる所であり、又之を支那に生れし、

老子孔子。

老子及孔子 につきて見ても同じことである。彼等は皆支那傳來の思想を己の心肝に徹せしめ、之を美化し、其の内の精髓を發揚したものであり、孔子に至つては「述べて作らず信じて古を好む」とさへ申して居られます。孔夫子の孔聖たる價は一人で以て眞面目を捉へて居るとか、特殊の信念の上に立つて居られたとか申す所に在るのではない。是等の活きたる心持を愈、活かさるるにつき、自己の立場を忘れず、支那の思想や制度に同情を寄せ、之を通して、其の内より眞面目を實現せられんとした點に在ります。

神武天皇 に至り 皇國を中心として永遠に實現せられ諸般の信仰の根柢となり萬邦の精華として遺憾なく發揚せられつつある古神道は天地の公道として支那に於ては老子孔子により支那流に説述せられ印度に於ては釋尊により印度に適應するやうに教えられ西に於てはイエス・キリスト等により彼民情風土に合ふやうに傳道せられたものである。古神道は少しも是等を卑んだり排斥致さぬのみか大いに精神的の勳功を認めつつある次第である。古神道は是等の偉聖の態度が良く宜しきに協ふたものであることを讚するのである。斯かる活きたる偉聖が大正の今日第二十六世紀の今日皇國に生れて來たら孰れも申し合せた如く天地の公道たる隨神道を純乎たるものとして彌榮えしめ之と前後なき皇國體の精華を益顯揚し、範を萬邦に垂れんと努むるに相違ない。今日の宗教家はキリスト教の宣教師たると佛教の僧侶たるとを問はず其の主人公たるイエス・キリストや釋迦牟尼の大人格に歸一し自らキリストや釋迦牟尼佛になつた心持で其の活きたる心持を以て傳道布教せねばならぬ。

例へば往時日蓮聖人は 皇國人が佛教に惑溺して居つた頃其佛教の形式を借り用ひて古神道の一端を説かれた。一九一三年に日蓮是ぞ日蓮の聖者たる所以である今日若し 皇國に再生し來られたならば必ず直接に古神道より説かるるに相違ない。(日蓮聖人が生れて後に始めて日本國が建てられ國是が定まつたのではない然し夫くらゐ自惚て居た所が見所であつてそこが面白いのぢや)。

各自の人間たるに於ては、各人の生活場を失はぬ、活きたる眞實な目撃を、大なる説明を、仕方のないこと、末の方などは

眞の信者たれ 假りにキリスト教傳道者のみを探つて申して見るが、彼等は眞に救世主イエスの大人格を愛し其の再來となつて行動せねばならぬ。西洋に都合の宜い様に發達し彼等の氣質や制度により特殊の形式を獲得したキリスト教會の宣教師の言葉の形式の末に拘泥し之を迷信して居つたのでは宜しくない。之はキリスト信者ではなく「某教會の附屬たる事務所派出所の西洋人の言葉の末」の信者である。勿論彼等は自ら到底聖子「キリスト」の再誕などと申す傲慢不遜のことは思ひ得られぬとの謙遜なる美しい心を有するであらう夫は然うあつてほしいがイエスの活

きたる心持に會通して見れば「イエス」と隔りある別個の性質の者ではあるまい。青き光りに照されて、其の爲に輝けば照されて居る者も青くなる、照る人の光りが赤ければ照される人も赤く光る。「イエス」を信じ其の活きたる光りを受くる以上は、又彼と同一なる活きたる光りを放たねばなるまい。「イエス」の活きたる光りを人に傳へ得ることを自信するから傳道師ともなれる。若し此の自信がないなら、早速止めて貰ひたい。是は簡單の爲に「キリスト」信者のみについて申したのであるが、其の他のものについても同じことである。

國民精神と宗教 いつたい國民精神を無視して、眞の宗教などの存し得やう筈がない。之を西洋に見ても、一近世の幕明け紀第二十二世紀、元第十六世紀「ヤ」に於ける宗教大改革と稱するものも、實は各民族の眞面目を通し、之によりて「イエス・キリスト」の眞面目と會通し、彼の信仰を獲得せんとせし運動であつた。「ローマ」教會の餘り一般的従つて形式的なる修養を以て満足せず、各個人の眞面目を中心として、之により、救世主の心持と合一せんと致したのである。

が實は西曆第十七世紀第十八世紀時代の如き個人主義の考ではなく、或地方或民族の眞面目と離れぬ各個人の眞面目を尊重し、之を持參して「ゴッド」と交通せんと致したのである。然し西洋其の頃の事情では、民族が尙ほ紛亂致して居り、國家と民族とは其の境界を別にし、誠に亂雜極まつて居つたから、遂に個人主義の勃興と共に「キリスト」新教は兎角、獨立的な個人の修養等に重きを置くこととなつた。然し是では小乗的であつて大乘的でない所から、近來は是にて満足出來ず、新教の方は兎角動搖して、現今は過渡時代に居り、其の宣教師等も心の中に於ては絶えず不安の状態に居る。然らば舊教の側ではどうかと申すと、露國「ギリシヤ」教會は皇帝を頭に戴き全然國民的精神を離れざるものとなり、西曆一五八二—一七二一に全く獨立す、英國に於ては西曆一五三三より一五七〇に至る間を以て「ローマ」教會より分離して英國教會を形作り、之も君主を頭に戴いて居ると申すやうな譯である。

(二)最近に世界の大戦争があるにつけても、一獨逸では獨逸で「ゴッド」は